

日曜日か土曜日か  
—近い将来の人類の大問題—

伊藤繁美

# 目次

第1章 概論	1
第2章 預言の靈の勧告	6
第1編	14
第3章 D. M. キャンライトの反論	14
第4章 バン・バーレン教授の反論	20
第5章 ウィリアム・アービン編集長の反論	27
第6章 ホーケマ博士の反論	32
第7章 ウォルター・マルチン博士の反論	37
第8章 パウロ・K・ジェウェット博士の反論	43
第9章 ジェウェット博士の「主の日」論	49
第10章 ジェウェット博士の「主の日」神学	55
第11章 政治と日曜日休業	59
第12章 最近の日曜休業令	64
第13章 日曜日派の反論総括	68
第2編	78
第14章 律法の不変性	78
第15章 聖書と律法	84
第16章 道德律の諸問題	90
第17章 道德律と礼典律	95
第18章 安息日の起源	100
第19章 旧約時代と安息日	104
第20章 新約時代と安息日	109

第21章	安息日の戒めの本質	113
第22章	新約聖書と安息日	117
第23章	主の日と伝説	122
第24章	安息日から日曜日へ	127
第25章	ローマ法王権と日曜日	131
第26章	獣の印と日曜日	136
第27章	世界各地の安息日	141
第28章	古代ローマ法王権の発達	146
第29章	安息日に関する難解聖句	150
第30章	サムエル・バキオキ博士論文	156
第31章	東方と西方教会	161
第32章	反ユダヤ的教父論	166
	参考文献 (順不同)	170
	あとがき	172



# 第 1 章 概論

「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」(ペテロ第二・1：20、21)

使徒ペテロは自分がかつて変貌の山で直接神の声を聞いた時の体験を語り(マタイ 17：1－8 参照)、聖書の預言はこれよりも一層確かなことであると言った。(欽定訳英文 "We have a more sure word of prophecy") そして「あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照らすまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい」(ペテロ第二・1：19) とつけ加えた。

人類は罪を犯して神から離れて以来、各時代にわたって一層深まり行く罪悪の淵に沈み、人生は暗黒の闇と化し、社会は百鬼夜行の巷となった。どこまで頹廢するかわからない人間の道徳は、前代未曾有の危機に達した感がある、個人としても、社会としても、物質的にも、精神的にも、暗やみに閉じ込められている。

こうした険悪な時代に我らの望みとなるのは、天与の明星とも言うべき、聖書の預言である。聖書の預言は決して人間の意志から出たものではなく、神が預言者によって我らに語り示された光りである。この人類の創造者、自然の万象の創造主である唯一の真の神は、完全な暗闇の中で迷っている人類を憐み、生命と希望の光をその聖なる預言を通して我々の道を照らしておられるのである。

今を去る 1900 年の昔、神は小アジアの孤島パトモスで主イエスの僕、ヨハネに驚くべき預言を与えられた。それは、ヨハネの時からキリストが再び来られる時に至るまで、また天に善悪の戦さが始まってから、それが完全に終り、神を信じる全ての人がキリストによって救われ、永遠の御国を嗣ぐまでに至る全ての重大事件が示されたのである。「この預言の言葉を朗読する者とこれを聞いて、その中に書かれていることを

守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである」(ヨハネの黙示録 1:3)、また「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する、もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる」(ヨハネの黙示録 22:18、19)。

ヨハネの黙示録には数多くの驚くべき大預言が記されているが、その 12 章を見ると、キリストの時から現代までのサタンとキリストとの大争闘がはっきり記されている。「また、大いなるしるしが天に現われた。ひとりの女(清い女は純潔な神の教会)が太陽(新約時代)を着て、足の下に月(旧約時代)を踏み、その頭に十二の星(十二使徒)の冠をかぶっていた。この女は子(イエス・キリスト)を宿しており、産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫んでいた。また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍(悪魔、サタン)がいた。それに七つの頭(七つの国家、一説・エジプト、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマ帝国、ローマ教会、プロテスタントアメリカ合衆国)と十の角(ローマ帝国の分裂十ヶ国、一説・ヘルライ、バンドル、オストロゴス、ビシゴス、スエービー、バーガンディアン、アングロサクソン、フランク、アレマナイ、ロンバルズ)とがあり、その頭に七つの冠(王冠、王国の統治権)をかぶっていた。その尾は天の星(天使)の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落した。龍は子を産もうとしている女の前に立ち、生れたなら、その子を食い尽そうとかまえていた。(サタンはヘロデ王によって生れてきた救主キリストを殺そうとした。マタイ 12:16 - 18)、女は男の子を産んだが、(キリストはマリヤの子として生れた)、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である(「地上の諸王の支配者であるイエス・キリスト」ヨハネの黙示録 1:5)。この子は、神のみもとに、その御座のところ、引き上げられた(キリストの昇天、使徒行伝 1:9、10)。女は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女(真のキリスト教会)が千二百六十日(1260年、ローマ・カトリックの迫害期間 538 - 1798 まで)のあいだ養われるように、神の用意された場所があった」(ヨハネの黙示録 12:1 - 6)。

天使の 3 分の 1 をひきつれて神に反逆した天使の長は、サタンとなり、人類を罪に落とし入れ、この世の国家権力を用いて、各時代の神の民を迫害し、救主キリストの降

誕の時はヘロデ大王をそそのかして、幼子イエスを殺害しようとしたが果さず、ついにキリストは人類の為に罪の贖罪として死に、復活し、昇天された、キリストとの戦いに敗れたサタンは、残された女、即ち、教会（真の神の民）を迫害した。ローマ教会が東ローマ皇帝ユスティニヤヌスよりローマ全国における教会の頭と宣言され、ローマを包囲していた蕃族オストロゴスが皇帝の将ベルサリウスより、ローマ市から追放された538年から、1260年後、すなわち、1798年ナポレオンの将パーティヤーにより捕われたローマ法王ピウス6世の下で法王権が一時崩壊した時に至る1260年の期間をさす。

「龍(サタン)は、自分が地上に投げ落されたと知ると、男子を産んだ女を追いかけた。しかし、女は自分の場所である荒野(アルプス山中とか、アメリカ大陸とか、プロテスタント諸国とか)に飛んで行くために、大きなわしの二つの翼(逃避の速力)を与えられた。そしてそこでへびからのがれて、一年、二年、また、半年(ユダヤ暦の1年は360日で、3年半は1260日、すなわち、前記1260年と同じ期間)の間、養われることになっていた。へびは女の後に水(水は多くの群衆をあらわす。黙示録17:15、ローマ教会から派遣された異端討伐十字軍、またはローマ教会の宣教師群)を川のように口から吐き出して、女をおし流そうとした。しかし、地は女を助けた。すなわち、地はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。(地はアメリカ大陸のように、広大な無人の里や、プロテスタントを守ったイギリス、オランダ、北歐諸国、及びヨーロッパのアルプス山脈等)」(ヨハネの黙示録12:13-16)。

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、(1260年の期間の後、即ち1798年以後、この世界は世の終りの時代に入る)、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たち(神の十戒を永久不滅の道德律と信じ、特にその第4条7日目安息日、天地創造の記念日としての土曜日を守り、イエスのあかし、すなわち預言の霊(黙19:10)を有する教会)に対して、戦いをいどむために、出て行った。そして、海の砂の上(社会人類)に立った」(黙12:17、18)。

サタンは世界に7億の信者をもつ巨大なローマ教会(黙13章の第1の獣)とアメリカのプロテスタント(黙13章の第2の獣)を通して全人類に獣の印(ローマ教会の権威によって神の戒に反して、週の第1日である日曜日を守ることを強制したので、

この日が獣の印と言われる)を強制し、その印を拒む者をみな殺そうとする。これに反し、神はその残りの教会を通して、神の印(土曜日、真の神の安息日)を信ずる者の頭(心)に記す。すなわち、キリストとサタンの大争闘は土曜日か、日曜日か、神に従うか、サタンに従うかとの問題を中心として、クライマックスに達するに至る。これには全ての人間が含まれ、誰一人として逃れ得る者はない。聖書にはそう預言されている。「また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手(働き)あるいは額(心中、又は思想)に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした」(黙 13 :16、17)。しかし、この偽の安息日、日曜日を聖日として受け入れない少数の人々がいる「地に住む者で世の初めから、ほふられた小羊のいのちの書に、その名をしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう」(欽定訳英文による、黙 13 :8)。神に従うか、サタンに従うかは全ての人が自分で決定しなくてはならない最重要事である。思想と行動において、我々はどちらの印を受けるかを決定する。サタンは死を持ってこの問題を強要してくる。しかし、神もいとも厳粛な警告を与えておられる。「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」(黙 14 :9 - 12)。

今こそ我々は全宇宙及び我々が住むこの地球及びその中に住む一切の生物、無生物を創造された唯一の真の神、我々が知ると知らぬとに係わりなく、我らに生命を与え、絶えず我らを守り幸いを賜う神、そして神の言、聖書を通して我らのために死に給うた救主イエス・キリストによって罪より救われ、やがて主イエスの再臨の時に(その日は近い)、永遠の生命を信じる全ての者に約束される唯一の真の救主に悔い改めて立ち帰り、真人間としての歩みと行いにより、最後の試みの日に神に忠誠を尽す者とならなくてはならない。私たちの生命の源である神に背き、我らのために生命をすべて救わんとしておられる真の神、キリストを拒む者は、やがて天火によって滅び尽されるのである。



神は唯一人の真の神であり、信じ従う者は必ず救い、背きもとる者は必ず罰し給う方である。我々は一切の目に見える偶像と目に見えない偶像とをすてて彼に従わねばならない。

日曜日是一般のキリスト教徒も偶像教徒も、無神論者も、地球上の住民の大部分が休みの日としている。やがて全世界に日曜休業令が布告される日が来るであろう。そして全世界の全ての人がある時自分の運命を決定する。そして預言されたキリストの再臨が起る。善人も悪人もその日報いを受ける。我々はその時の備えができていだろうか。

## 第 2 章 預言の霊の勧告

キリスト再臨直前の教会に神は預言の霊を与えられた。神の戒めを守り、預言の霊を持つ教会が最終の使命を全人類に伝える働きを与えられている。そして、その働きはもう 100 年以上も着々と行われている。そして、いつの日にか、この神の御働きは完成する。四面楚歌の中で、多くの反対を受けながら、この御業は前進して行く、これは神より出た、神の御働きである。人間がこれを妨害しても、御旨をはばむことは出来ない。近い将来、御業は立派に終り、忠実な民は永遠の岸边につくのである。

土曜日、日曜日の最も重要な問題について、神はその僕を通して教会に指示を与えておられる。第 1 章では聖書の預言から、この問題について考慮した。第 2 章においては、ホワイト夫人を通して神がその民をさとし、導かれている御言を注意深く検討して見よう。

「各時代の争闘」(日本語版)を省略抜粋した「嵐に備えて」(昭和 38 年 11 月初版発行)の中から安息日及び日曜日に関係する箇所を選び出して我々の知識と信仰の糧としたい。

### 律法は不変

---

---

「キリストの死は律法(モーセの儀式礼典、犠牲に関するものではなく、神の十戒—筆者挿入)が不変であることを証明している。罪人を救うために、父とみ子が限りない愛に迫られて払われた犠牲は—このあがないの計画以外に方法はなかった—公義とあわれみが神の律法と統治の基礎であることを全宇宙の前に証明している」(18 ページ)。「カルバリーの十字架は、律法が不変なものであることを宣言しているとともに、罪の価は死であることを宇宙に宣言している」(19 ページ)。

## アメリカにおける日曜日遵守の法制化運動

---

---

「教会の制度と慣習に対して国家の支持を得るために目下米国で進行している運動において、プロテスタントはカトリック教徒の例にならっている。……そしてこの運動にもっと重大な意義を与えるものは、そこに企画されている主要な目的が日曜日遵守——ローマ法王制にはじまり、この教会がその權威のしるしとして主張する慣習——の強制であるという事実である……プロテスタント教会を導いているものは法王制の精神、すなわち世俗的習慣への一致の精神、神の戒めよりも人間の言い伝えを尊重する精神である」(79 ページ)。

### 最初の法令

---

---

「世俗の権力に支持された勅令、大会議、教会礼典は、異教の祭日がキリスト教界に高い地位を獲得した手段であった。日曜日遵守をしいる最初の法令は、コンスタンチンによって制定された法律であった(紀元 321 年)。この法令は町の住民には『この尊ぶべき太陽の日』に休むことを要求したが、農民には農事に従事することを許した、実質上は異教の法令であったけれども、それは皇帝がキリスト教を名義上受け入れた後、皇帝によって施行されたのである」(79、80 ページ)。

### ユーセビウス、キリストが日曜日を聖日にしたと主張

---

---

「勅令は神の權威に十分に代わりうるものとならなかったもので、王侯の寵遇を求めた監督で、コンスタンチンの特別な友人であり、追従者であったユーセビウスは、キリストが安息日を日曜日に移されたという主張を持ち出した。この新説を証明するのに聖書のあかしは一つも示されなかった。ユーセビウス自身も無意識のうちにその誤りを認め、この変更の真の創始者を指摘している。『安息日になすべき義務はどんなことでもすべてわれわれが主の日に移した』と彼は言っている。(Robert Cox, "Sabbath Laws and Sabbath Duties" page 538)」(80 ページ)。

### 日曜休業令の強化、第七日は依然として安息日

---

---

「法王制が確立されるにつれて、日曜日尊重の運動がつづけられた。一時は、人々

は教会に出席しない時には畑仕事に従事し、第七日は依然として安息日とみなされていた。しかし、変更は着々となしとげられた。聖職にある者は、日曜日にどんな民事紛争の判決をすることも禁じられた。その後まもなく、どんな階級の者でも、すべての人は、自由人は罰金、奴隷いはむち打ちの刑罰をもって、通常の労働をやめさせられ、後に金持ちはその財産の半分の没収をもって罰せられることが命令された。そしてついには、なお強情ならば、彼らを奴隷いにするという法令がでた。下層階級の人々は一生の間追放の刑罰を受けることになった」(80、81 ページ)。

## 16 世紀の法王庁会議

---

---

「日曜日の神聖を確立するためにあらゆる努力をしているにもかかわらず、カトリックの聖職者たちは安息日の神聖な権威と、それに取って代った制度が人間から出たものであることを公然と告白した。16 世紀の法王庁会議はつぎのように明白に言明した。『すべてのクリスチャンは第七日が神によって聖別され、ユダヤ人のみでなく、神を礼拝するように見せかけているすべての者によって受け入れられ、守られてきたことを記憶しなければならない。しかし、われわれクリスチャンは彼らの安息日を主の日に変えたのである』(Heylyn, “History of the Sabbath”281、282 ページ)」(83 ページ)。

## 日曜日制度は法王制への忠順のしるし

---

---

「旧大陸(ヨーロッパ)においても新大陸(アメリカ)においても、ローマ教会の権威だけに基づいている日曜日制度をあがめることによって、人々は法王制に忠順の意を表明するのである。……日曜安息日の違反に対して人々に神のさばきがのぞむという主張が繰り返されるであろう」(86 ページ)。

## 強大なカトリックにプロテスタントは屈従する

---

---

「法王制は、プロテスタント教会が偽りの安息日を承認して忠順を表わしていることや、過去に法王制自身が用いたのと同じ手段で、プロテスタント教会がそれを強制する準備をしていることを見て、時機を待っている……ローマ・カトリック教会は全世界にわたって根を張り、法王庁の支配下にあつて、その利害に役立つように計画されている一大組織を形成している。地球上のあらゆる国において、聖さんにあずかる幾

千万の者たちは、法王に対する忠誠を堅く保つように教えられている。国籍や政府がどうであろうと彼らは教会の権威をほかの一切のものの上にあるものとみなさなければならぬ。彼らは国家に忠誠を誓うかも知れないが、その背後には、ローマに対する服従の誓約があって、教会の利益に反する場合には、国家に対するどんな誓いも破ってもよいことになっている」(86、87 ページ)。

## サタンの目的

---

---

「天における大争闘の当初から、神の律法をくつがえすことがサタンの目的であった。彼が創造主に対する反逆を始めたのはこの目的を達成するためであった。そしてサタンは、天から追放されたけれども、この地上で同じ戦いを続けてきた。人をあざむき、それによって神の律法を犯すようにすることこそ、サタンが着々と追い求めてきた目的である」(90 ページ)。

## 律法の一戒を破っても全体を犯したことと同じ

---

---

「律法全体を廃することによって成しとげられても、最後の結果は同じである。『その一つの点』でも犯す者は律法全体に対する軽べつをあらわし、その影響と手本は違反に味方し、『全体を犯したことになる』(ヤコブ 2：10)」(90 ページ)。

## 律法無視の結果はおそろべき無法社会

---

---

「人々に神の戒めを軽んじるように教えるものは、不従順の種をまき、不従順を刈り入れる。神の律法によって課せられている拘束を全部取り去るならば、人間の法則もまもなく無視されるであろう……第 5 条は第 4 条とともに廃される。子供たちは親の生命を取ることで自分の墮落した心の願いを達成できるならばそうすることをおそれないであろう。文明社会は強奪者、暗殺者の大群と化し、平和、休息、幸福は地上から消滅してしまうだろう」(94、95 ページ)。

## 宗教指導者たちの責任

---

---

「安息日改革の運動 (SDA による) がひろがるにつれて、第 4 条の要求を無効にする

ため神の律法をしりぞけることがほとんど世界的になる。宗教界の指導者たちの教えは不信仰への道、心霊術への道、神の律法に対する軽べつへの道を開いてきた。だから今日キリスト教会に存在する不法に対する恐るべき責任はこれらの指導者たちにあるのである」(97 ページ)。

## **社会道徳向上の為日曜日の教会出席を強要する**

---

---

「いまひろがっている墮落は、主としていわゆる『クリスチャンの安息日』をけがすことにその原因があるのだから、日曜日遵守を強制することが社会道徳を大いに向上させるであろうと主張する。この主張が特に強調されるのは……アメリカにおいてである。アメリカにおいて禁酒禁煙運動は最も目だった重要な道徳的改革の一つであるが、しばしば日曜日遵守運動と結びつけられる」(98 ページ)。

## **靈魂不滅と日曜日問題**

---

---

「『サタンは靈魂不滅と日曜日の神聖化という二つの重大な誤りを通して人々を彼の欺瞞のもとに引き入れる』。前者は心霊術の基礎を置き、後者はローマとの親交のきずなを作り出す。合衆国の新教徒は率先して心霊術と手を結ぶために淵を越えて手を差しのべる。彼らはまたローマの権力と握手するために深淵を越えて手を差し出す。この三重の結合による勢力下に、アメリカはローマの例にならって良心の権力を踏みこむのである」(99 ページ)。

## **旧教徒も新教徒も俗人も一丸となる**

---

---

「旧教徒、新教徒、それに世俗の人たちもみな同じように力のない敬けんの形だけを受け入れるであろう。そして彼らはこの合同の中に、全世界を改心させる大運動や、長く待ち望んでいた福千年期の開始という大運動を認めるのである」(100 ページ)。

## **日曜日を尊重しない者は民を悩ます者とされる**

---

---

「人々は日曜日安息日を犯すことによって神を怒らせ、この罪が災害をもたらし、それは日曜日遵守をきびしく励行しなければやまないということ。また第4条の要求を

主張して日曜日尊重を傷つける者は、民を悩ます者であって、神の恩寵とこの世における繁栄とをさまたげていると宣言されるであろう」（102 ページ）。

## 悪霊の託宣

---

---

「心霊術を通して現わされる奇跡の力は、人間に従うよりは神に従うことを選ぶ人たちに不利な影響を与える。いろいろな霊からの託宣は、神が彼らをつかわして日曜日を拒絶する者のまちがいを説得し、国家の法律は神の律法と同様に遵守しなければならないと主張する。霊からの託宣はまた、世の中が非常に悪くなったことを嘆き、道義的に墮落している状態は日曜日の冒涇に原因があるという宗教家たちのあかしを支持する。彼らのあかしを信じようとしなない人々に対しては、ますます激しい怒りがひき起こされる」（103 ページ）。

## 法と秩序の敵

---

---

「聖書の安息日をあがめる者は、法と秩序の敵であり、社会の道徳的抑制を破り無政府と陥落とを引き起こし、神のさばきを地上に招く者であるといって攻撃されるであろう」（104 ページ）。

## 安息日が論争の焦点

---

---

「安息日がキリスト教界で特別の論争点となり、宗教と政治の当局者が結束して日曜日遵守を強要するときに、少数の者は、世間の要求に屈服することを断固として拒むために、全世界ののろいの的となる……ついに、第4条の戒めにある安息日を聖とする者に対して法令が発せられ、彼らは最も重い刑罰に相当する者として攻撃され、人々はある期間ののちには、彼らを殺してもよい自由が与えられる」（126、127 ページ）。

## サタンの出現

---

---

「欺瞞の一大ドラマの最後をかざる一幕として、サタンはキリストを装うであろう……彼は民のうちの病人をいやし、それから、キリストらしくみせかけて、安息日を日曜日に変えたことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福した日を聖とするように命じ



る。彼は、あくまでも第七日をきよく守り続ける者は、光と真理とをもって彼らにつかわされたわたしの天使たちの言うことを聞かないでわたしの名を冒瀆している者だと宣言する。これは強力な、ほとんど圧倒的な惑わしである」(128、129 ページ)。

## 神の民、山にのがれる

---

---

「クリスチャンのいる国々のさまざまな為政者たちが戒めを守る者に反対して出した法令によって政府の保護が取り除かれ、彼らの滅亡を願う者たちの手にまかされると、神の民は、都市や村からのがれ、群れを作って最も荒れはてたさびしい場所に住む、多くの者は山のとりでに避難所を見つける」(130、131 ページ)。

## 多くの者は牢に投げ込まれる

---

---

「あらゆる国のあらゆる階級の人々が大勢、身分の高い者も低い者も、富んだ者も貧しい者も、黒い者も、白い者も、最も不当で残酷なとらわれの身に突き落とされる。神に愛される者たちが疲れきった日を送り、鎖につながれ、牢獄の格子の中にとじ込まれ、死刑の宣告を受け、ある者は暗くいまわしい土牢の中で餓死するままだに放置されているように見える。彼らのうめきを聞く人間の耳はなく、彼らを助けようとする人間の手はない」(131 ページ)。

## 最後に救が来る

---

---

「いたるところで武装した集団の者たちが、悪天使たちにかりたてられて殺害の準備をしている。いよいよどうにもならない今こそ、イスラエルの神が、ご自分の選民を救うために手を下されるのである」(134 ページ)

## 再臨直前天に十戒が示される

---

---

「雲が退き、両側の暗い怒ったような大空とは対照的に、言うに言われぬ栄光の輝く星空が見えてくる。天の都の栄光が広く開かれた門から輝き出る。その時、折りたたんだ二枚の石の板を持った手が空中に現われる。〈天は神の義をあらわす。神はみずから、さばきぬしだからである〉と預言者は言っている(詩篇 50:6)、シナイ山から



雷鳴と炎の中で、人生の指針として宣言された神の義であるあの律法が、今やさばきの規準として人々に示される。その手が石の板を開くと、火のペンでしるされたかと思われる十戒のことばが見える。そのことばは、はっきり書かれていて、だれでも読むことができる。記憶が呼びさまされ、すべての人の心から迷信と異端の暗黒が払いのけられて、簡単で理解しやすく、権威のある神の十のことばが、地上の全住民の前に示される。神の聖なる要求をふみにじった者たちの恐怖と失望とは、描写することができない。……神の律法の反対者たちは、牧師から、一番小さい者にいたるまで、真理と義務について新しい考えをいさぐ。第4条の安息日が、生ける神の印であることを知るが、もうおそい。彼らにはせの安息日の真の性質を知り、自分たちはこれまで砂の基礎の上に築いていたことを知るが、もうおそい。彼らは、神と戦っていたことに気がつく。牧師たちは、人々をパラダイスの門へ導くと公言しながら、魂を滅びに導いたのである」(140、141 ページ)。

## 最後の勝利

---

---

「神のイスラエルは、耳を傾け、目を上の方にそそいで立っている。彼らの顔は、神の栄光に照らされ、モーセがシナイ山から帰ってきた時のように輝いている。悪人たちは、彼らを見ることができない。神の聖安息日を守ることによって神をあがめた者に祝福が宣言されると、大きな勝利の叫びが起こる」(142 ページ)。

# 第1編

## 日曜日こそ新約時代のクリスチャンの 守るべき正当な安息日だと主張する 人々の論旨

### 第3章 D.M. キャンライトの反論

D.M. キャンライトは 1840 年に生れ、1919 年に永眠した人物で、1865 年、25 歳の時 SDA の牧師の按手を受け、1887 年、22 年間の奉仕の後教会を離れた。その間説教者として、また著者としてすぐれた才能を有し、世界総会の常務委員として 2 年間も重要な職責を果たした。1887 年の 4 月、ミシガン州のバプテスト派の牧師となり、2 ヶ年の後引退し、自宅で文筆をもって一書を書き、1889 年「SDA を非難する」(Seventh-Day Adventism Renounced) を著した。その書中で SDA の教義、再臨、律法、預言の霊等を片っぱしから攻撃非難した。SDA 教会の指導者を嘲笑し、SDA 教会は遠からず解散するだろうと言うに至った。彼以前にも以後にも彼ほど組織的に SDA の教理を批判した者はなく、彼の死後も彼の論旨は他の多くの批評家の口に、また筆によって繰り返された。彼の書に対する弁証論は W.H. ブランソン長老によって 1933 年に書かれた。本書は後にブランソン長老の文章を多く引用する。ちなみに、キャンライトがどうして SDA を離れたかは、彼が高慢で同信の兄弟やホワイト夫人からの勧告や忠告に耳を傾けなかったことに他ならない。

まず、キャンライトは何に反対しているのか、何を主張しているのか、特に律法、安息日の問題に関し、その要点を箇条書きにして見よう。彼の主張は他の多くの SDA

の敵となっている批評家に用いられているから、彼の論理について正しく答弁すれば殆んどすべての反論に答えることになる。

1. 律法はユダヤ人のために与えられた。(P.320)
2. 十字架で廃されたから、クリスチャンは守る必要がなくなった。(P. 320)
3. 今や我々はキリストの下にあり、律法から解放された。律法は死んだ。(P. 331)
4. 律法の文字はクリスチャンに対し、何ら強制力を持たない。(P. 330)
5. 我々は十戒よりもっとすぐれたものを持っている。(P. 355)
6. ユダヤ人は律法の文字のみを持っていた。我々はその本質をもっている。(P. 330)
7. 安息日を除いて、他の9条は新約の中にそのままの言葉か、その内容が残っている。(P.362)
8. 主の日である日曜日を守ることによって第4条の戒の精神を満足させることができる。(P.332)
9. 十戒はモーセの儀礼典の一部である。その代表的なものが石の板に書かれたのである。(P.343)
10. パウロは何度も繰返して、クリスチャンは律法の下にはないと云っている(ローマ6:14、15、ガラテヤ3:23-25、4:21、5:18)、これによって、クリスチャンは律法の支配下にないと言うことはもう解決済みの問題で、律法の下になければ、律法に服従する必要のないことは当然のことである。(P.381、382)
11. イエスは弟子に新しい律法を与えられた……我々はその律法を守るべきである。(P.361)
12. キリストは教会の頭として世界を裁かれる(ヨハネ5:22)。彼は裁きの座におられる(ローマ14:10)。彼がその教会に律法を与えられたということは全く当然のことである。(P. 365)
13. キリストは彼を信ずる全ての者の義として律法の終りとなられた(ローマ10:4)。

これで十戒は終りとなった。(P. 334)

14. ローマ7:1-4、これよりもはっきりとしていることはない。我々は死んだ律法から解放された。(P.388)
15. 使徒たちは、律法は死んだと言っている。(P.388)
16. ユダヤ人に2種類の律法が与えられたという事実はない。(P.308)
17. アドベンチストは道德律とか、礼典律とか自由に語るが、それ程違った異なる2つの律法があるなら、聖書にはっきり書いてあるはずだが、何も記されていないのはどういうわけか。(P.309)
18. 律法とはモーセの全ての律法のことだという事を心にとめれば、彼ら(SDA)の用いる反論の句は難なく処理できる。(P.372)
19. モーセの全ての律法は十字架で廃された。これこそ誰も否定できないほどはっきりと新約の中で言われている所である。イスラエルにシナイ山で与えられた全ての法典、道徳的、民法的、儀典的なもの、十戒及び全てを含めて、全部が廃止された。(P.334)
20. 安息日と名ざして語られている所は創世記にはない。またモーセの時代までない。(P.249)
21. 安息日はユダヤ人のみに与えられた。(P.258)
22. ネヘミヤ9:13、14に「あなたはまたシナイ山の上に下り、天から彼らと語り、正しいおきてと、まことの律法および良きさだめと戒めとを授け、あなたの聖なる安息日を彼らに示し、あなたのしもべモーセによって戒めと、さだめと、律法とを彼らに命じ」とあるから、その時以前には誰にも知られていなかったことがわかる。(P.255)
23. 安息日遵守者は今の土曜日が天地創造の時の第7日目安息日であることを証明することがどうして出きるか……最初の安息日を確認する方法など勿論あるわけがない……洪水前の長い年月、文字として何の記録もない家長時代、伝統的な知識は殆んど失われてしまったあのエジプトにおける奴隷時代、無政府状態であった土師時代、それから後の各時代を通じて、一日も失われることはなかったと言えるだろうか。無論、そんなことは証明できないのである。(P.183、184)

24. 十戒の安息日は一部道徳、一部礼典、また実質的に慣習法であって、これが各時代の最高の神学者たちが教えてきた教会の教義である。(P.166)
25. アドベンチストは十戒中には礼典的な条項は全く無く、安息日も決して礼典的ではないと言う。儀式礼典という言葉ウェブスターの辞典でひくと、「儀式、外見的礼典、宗教の外見的形式」と定義づけられているが、それこそ、ユダヤ人の間で安息日が守られてきたそのままずばりの状態である……ある特定の日における安息日遵守は儀礼式行事であった。(P.171)
26. 不思議なことに第7日目を守れと言う言葉は新約聖書のどこにも記されていない。(P.267)
27. 新約聖書中で非常にはっきり、また他のどの事よりも確かなことは、全ての章に、全ての書翰に、全ての文書中に全てのクリスチャンが守り行うべき事が充分教えられている。すなわち十戒の他の9条については名ざしでそれを怠る罪について示されているのに第7日目を守ることにについては一回も述べてない……驚くべき事は第4条については新約中に一回も繰返して記してなく、クリスチャンがそれを守るように命じられている所は全くない。(P.265、266)
28. 全ての教会史家は、エルサレム滅亡後もしばらくの間、ユダヤ系クリスチャンが7日目を守っていたことを認めていることは我々の知る所である。今も生存している最大の教会史家であり、著者であるフィルップ・シャフ博士(1819—1893)は使徒時代の教会のP.118に、「我々の知る限りにおいて、第1代のユダヤ人クリスチャンたちは、少なくともパレスチナにおいて、聖書的に安息日を守っていた」と述べている。(P.277)
29. ペンテコステの日(使2章)は日曜日であったことは各時代のクリスチャンによって信じられ支持されてきた。(P.200)
30. キリストの教会が主の復活の日を記念日として持っていることは現代、世界中における最大かつ最も知れわたった事実である。(P.196)
31. ニューヨーク教区司祭、神学修士、ジョン・アンケイテル氏は1889年7月のアウトルック誌上で主の日である日曜日について次のように書いた。「主の復活後のあの偉大な40日間に、主は使徒達にこの日を与えられたと思われる。しかしこれを確証することはできない」。彼はカトリックの教義そのものを述べている。「この変化は主及び使徒たちによってなされたが、聖書はこの点についてはっきりと述べていない。そのため、新約聖書時代になされたというカトリック教会の権

威に依存するのである。(P.214)

32. 日曜日を守る人々は、日曜日に復活されたキリストを祝っている。この習慣は使徒達から始まり、それ以来ずっと行われている。主の日とは、今一般に週の第1日であるとされ、その日に主の復活を記念するために守られている。こう言うわけで、週の第1日は主の日であると聖書は教えていると信じている。(バプテスト教会指針P.171) そんなわけで、全ての辞典、レキシカン百科全書には主の日は週の第1日だと記されている。(P.186)
33. キリストの復活を記念して教会は日曜日を守っている。これは実定法に基づくものではない。そんな律法はない。(主の日P. 93)
34. 日曜日遵守は東方、すなわちギリシャ教会から始まったもので、西方のローマではない。(主の日P.165)
35. 主の日の全ての最初の証人はローマ人ではなく、東方のギリシャ人である。(主の日P.167)
36. この日を変えたのは使徒たちである。(主の日P. 83)
37. 東方に住むギリシャ人とは、バルナバ、殉教者ユスティヌス、ディオニシウス、クレメント、アナトリウス、オリゲネス、ユウセビウス等である。(主の日P. 167)
38. これまでの数多くの証明によって少なくとも紀元後140年頃までには全てのクリスチャンが日曜日を守ったことがわかったが、それは法王権の基が置かれる200年も前のことである。(主の日P.221)
39. アドベンチストの言う獣の印は馬鹿げたことで、ハリコの虎のようなものだ。おどろくには及ばない。〔主の日P. 239〕
40. 神の民はこの地球上で同じ時間に聖日を守ることはできない。ある人々が守っているその時に、他のある人々は働いている。(P.174)
41. 福音の時代とよばれる新しい時代には、クリスチャンが主の復活を祝う非常に大切な日が新たに設けられた。明らかに又雄大に異なった環境が生じた。(P.176)
42. 大事な点は7日のうちの1日を宗教的な目的のために聖別することである。最高

の善をもたらすために、全ての者は同じ日を守るために一致しなくてはならない。使徒の時代から、教会は一致して、イエスが死より甦られた週の第1日、日曜日を守っている。(P.181)

## 第4章 バン・バーレン教授の反論

ジャン・カーレル、バン・バーレン (Jan Karel, Van Baalen) 教授はオランダのカンペン神学校及びアメリカのプリンストン神学大学で神学を研究し、プロテスタントの牧師となり、かつ分派異端に関する数冊の著書をあらわし、その名を知られるに至った。その中でも 1938 年初版発行以来 1975 年迄に 27 版を重ねた「空しい分派」(The CHAOS of CULTS) は、一般クリスチャン教会及び神学生の分派異端研究の標準的好資料として多く読まれてきた。この書中 P.228 から P.256 までの 26 頁を SDA 批判にさいているが、その中から安息日問題に関する氏の要旨を検出して、どのような点を強調し、どんな問題を提示しているかを考えてみたい。次のような論法は SDA 攻撃の役にたたない。

1. モーセの律法は一つであって、道徳律とか礼典律の区別はない。この一つのモーセの律法は旧約時代にイスラエルに与えられたものである。新約時代のクリスチャンには旧約時代のモーセの律法は不用である。我々は恵みの下にあって、律法の下にはないからである。こういう訳で安息日は廃止された。今我々が守っているのは主の日、すなわち、日曜日であって、これも我々は命令されたから守っているのではなく、我々自らの意志で主の復活を記念しているのである。(前記「空しい分派」P. 240)
2. 1618-19年のドルトの教会会議の決議にあるように安息日の戒めの中には儀典的な要素と倫理的な要素があり、前者は暫定的(一時的)であり、後者は永久的のものである。モーセによって与えられた神の戒である安息日を人間は変更することはできないものだというホワイト夫人の主張は正しい。しかしこの戒の中の一時的のものである形式はさにあらずである。たとえば、我々の屋根の下に外国人はいないだろうし、ロバをもっているものも殆んど皆無であろう。(PP. 240-241)
3. 申命記(5:7-21)に記されている十戒の第4条安息日の項には、出エジプト記(2:3-17)の十戒には書かれていない次の言葉がある。「あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そ



こからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである」(申5:15)。この追加文は後の時代の民がこの事実を忘れないように神が加えられたもので、十戒の原型は出エジプト記20章である。すなわち安息日遵守は神が六日の間に全ての物を創造し、安息日として七日目を定められた神の模範に従う事なのである。安息日は天地創造にまでさかのぼるもので、永久に守るべき制度である。

出エジプト記の16章の事件はこの事をあらわしている。シナイ山で律法を与えられる前にもうすでに安息日を記憶するように命じられている。イスラエルは天地創造を記念するこの戒めをずっと持ち続けていたから、7日目にはマナを集めに出かけてはいけなかったのである。

このことからしてノアもヤコブも日ではなく週によって時をはかっている(創8:10-12、29:27、28)し、神のみ姿にかたどって造られた人間は、代々神の模範に従って安息日から安息日までのサイクルに従って生活したことは明らかである。(P.241)

4. キリストもパウロも安息日という言葉を使っていないという論理は役に立たない。イエスは律法の第2部をしばしば引用された。(マタイ19:18、19、マルコ10:19)、これによってイエスは律法の第1部と第2部とを入れ替えたのであろうか。あるいは主が何も言われなかった部は廃止されたと考えるべきであろうか。沈黙を理由にしてこのようなことを結論づけることは危険なことである。イエスが安息日に善を行うことは合法的であると言われた事、また我が父は安息日にも働き、私もまた働くと言われた事は、イエスは決して安息日を廃止されたのではなく、返って安息日を認めておられることを示している。パウロについても、ワーフィールド博士の考えは正しい。すなわち、氏は言った「エペソ6:2から両親に従うことは正しいことをまず学ばせられる。第5条で両親の権威に服従することの当然な事が既存の義務として黙認されている。次に誰も疑問視しない、この第5条の権威が十戒全体に及んでいることを知らなくてはならない。第5条は他の条と分離したものではなく、他の条と同じ平面に立つもので、ただ長寿を約束されている点だけが違っているのみで、十ヶ条のうち的一条なのである。次にこの長寿の約束も、決して旧約時代的なものではなく全人類、全地球上、各時代に当てはまるものである」と言うことである。

パウロは第5条を引用して、十戒は初代教会において守らなくてはならないと説いている。しかし律法の中であるものは道徳的であり、あるものは礼典的、すなわち、あるものは永久的であるが、あるものは一地方的なもの、また暫定的なものと言って区別をする人々が出てきた。

ヤコブについても、ワーフィールド博士の言うことは正しい。ヤコブの第2章には、律法は一つの体をなすもので、一つの条目を破れば、他の条目も犯すことになる」と記されている。博士は言う「律法のある一ヶ条を破っていて、なお律法を犯していないと言う人は、丁度高価な花瓶の柄や口、また底をこわしておきながら、花瓶そのものは壊れていないと言っているようなものである」と、ヤコブはこれと同じことを言っている。姦淫してはいけないと同時に殺してもいけないのだ。十戒の一つを破ったならば、それは全体を犯しているのと同じである。十戒は十の条目が集って一体をなしているのだから、どの条目も守らなくてはならない。その中には安息日を守る条も含まれていることは無論のことである。(PP.241、242)

## SDA に対する効果的な論法

---

1. SDAは旧約聖書に書いてある通りに安息日を守ることは不可能であることを見出している。昔の神の民がある地域でできたことが現在ではできないと言うことがある。ホワイト夫人も約10年間夕方の6時から翌日の夕方の6時までを守った。その後日没から日没迄が正しいということに気がついたほどである。SDAが発展して困難な問題が生じたことは確かである。例えば、太陽が6ヶ月も沈まない所で、日没から日没までをどうすればよいのだろうか。新約時代の環境にはむしろ夕の6時から夕の6時までの方が合理的ではないだろうか。しかし、もしこれをよしと認めるならば、その瞬間、旧約聖書の命にそむき、安息日の時間を定める方法に変化が生じたことを肯定してしまうのだが、SDAはこれにどう答えるか。(PP.242、243)
2. またSDAは決して変更してはならないものとして第4条を理解していない。例えばホワイト夫人のPP (創世時代と父祖の生活〔人類のあけぼの〕)の英文P.409に次のような説明がでている。「カナンからしめ出されたことに立腹した民の一人が、神の戒にたてつく事を決意し、第4条の戒を公然と犯した。すなわち安息日に木の枝を集めに出かけた。荒野の旅において、安息日に火を焚くことは厳しく禁じられていた。これは酷しい気候のために火を焚くことが時折必要とされたカナンの地に於てはこの禁止は延長されるものではなかった。しかし、荒野においては暖房のために火は必要ではなかった」。しかし、聖書の言葉に留意して見よう。「6日の間は仕事をしなさい。7日目はあなたがたの聖日で、主の全き休みの安息日であるから、この日に仕事をする者はだれでも殺されなければならない。安息日にはあなたがたのすまいのどこでも火をたいてはならない」(出35:2、3)。この言葉は荒野の旅のみでなく、カナン定住の後にも有効であるはずではないか。もしSDAが出エジプト記に記されている通りに戒めを守ろうとするのなら

らば、必要とか必要でないとか言わずに文字通りその言葉を守るべきではないだろうか。問題は安息日に火をたく必要があるとかないとかでなく、そうしたことは備え日(第6日、金曜日)になすべきだと思う。(PP. 243、244)

3. 第4条には道徳的で永久的な部分と、礼典的で旧約時代には有効であるが、新約時代には廃止させるべき要素があると言う点を再検討しなくてはならない。キリストは安息日は人のために造られたので、ユダヤ人のためにではないと言われたが、それは安息日の戒めの全部であろうか、一部分であろうか、新約聖書には安息日の戒めのどの部分は永久的、どの部分は廃止されたとはっきり言っている所はない。すべての礼典律は廃止されたことは間違いない。しかし、モーセの律法のどの部分が廃止されたかについては明示されていない。パウロは異邦人の信者には割礼は不要だと言って論争した。しかし、ユダヤ人信徒の割礼については何も言われていない。旧約の律法のどれだけが有効であるかをきめるのはペンテコステ教会が聖霊の助けを受けてきめるべきことであつたと思う。

SDA教会は他のクリスチャンと共に、過越節を守っていない。ユダヤ人はSDAに対して「新約聖書の中で過越節が廃されたと言っている聖句を示してほしい」と言うことができるだろう。これはSDAが他の者に対して「新約聖書の中で第7日目安息日が廃されたと言っている聖句を示してほしい」と言っているのと同じことである。(P.244)

4. イエスは紀元70年に起つたエルサレム滅亡の時のことを預言し、「あなたがたの逃げるのが冬または安息日にならないように祈れ」(マタイ24:20)と言つた。SDAはこの句を引用して紀元70年の時点でも安息日は守るべき日であると主イエスが明言されたと言う。しかし、キリストはやがて自分が死から甦つた後に大きな変化の起ることを知っていたが、弟子たちはそれを知らず、また信じもしなかった。こうした環境で、キリストは、本当のことを話すことはできなかつたと思う。(P.244)
5. 新約時代の教会は序々に、しかも余り気がつかないうちに、旧約の土曜日から新約の日曜日にかつた。こうした変化は主の復活直後から始まつた。まず復活の1週間後の日曜日に主が弟子たちにあつた。トロアスでは会衆がパンをさくために週の第1日に集つたとパウロは言っている。(使20:7) コリントの教会では日曜日に福祉の献金をたくわえておくように命じられた。(Iコリント16:2)、これはもはや土曜日でなく、日曜日が守られていたことを示すものである。アドベンチストが日曜日に献金を聖別しておくだろうか。最後にヨハネは主の日にパトモス島で幻を受けた。その頃一般クリスチャンは日曜日を主の日として理解していたと思われる。(PP.244、245)

6. コロサイ2:16、17が礼拝日の変化を説明する。「だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されてはならない。これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある」。本体は永続するが、影は消える。例えば、割礼等も心の割礼が本体で肉の割礼は影である。同様に安息日も成就して本体である永遠の安息日に入るものの影にすぎない。(PP.246、247)
7. SDAが主の日は法王の日だときめつける聖書の証拠は全くない。たとえ、ある法王が日曜日遵守を立法化したとしても、その時以前に日曜日が守られなかったことの証明にはならない。325年のニケヤ会議でキリストへの信仰が決定されたが、それをたてに325年以前には教会はキリストの神性を信じなかったと言えるだろうか。(P.246)
8. 古代における多くの教会教父が日曜日安息日について書いている。例えばバルナバ書翰(100年頃)からユージェビウス(324)に至るまでの間、これらの文書によると、初代教会においては、初めの頃は土曜日と日曜日の両方が守られていたことがわかる。丁度ユダヤ人教会で割礼とバプテスマが続けられていたようなものである。そして、時がたつにつれて、その一方が他にとって代った。(P.246)
9. 現在、安息日(日曜日)の守り方が極めてルーズである。スポーツ、娯楽、軽薄な行為がこの日に行われている。我々は、ドルトの会議の言葉にかえるべきである。「第4条の戒めの礼典的な面は、ユダヤに与えられた第7日目を守る点である。その道徳的な面はある特定の日が霊性のために必要だと言う点である。ユダヤ人の安息日は廃止され、その代わりに主の日がクリスチャンに与えられた。そして教会は、初代から、日曜日を守っている。(使徒の時から)」。(PP. 246、247)

## その他の問題

---

1. SDAは日没までと日を数えるから、キリストは週の第1日に弟子と会わなかった。それは週の第2日であったと言う。しかし聖書は次のように言う、「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおお所の戸をみなしめていると、イエスがはいってきて、彼らの中に立ち、『安かれ』と言われた」。(ヨハネ20:19) (P.245)
2. 「八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸

はみな閉ざされていたが、イエスがはいつてこられ、中に立って『安かれ』と言われた」(ヨハネ20:26)、SDAはこれを日曜日ではなく、その次の日だと言う。「八日ののち」と八日目とは違うと言うが、マルコ8:31とマルコ9:31を比較すると「三日の後」「三日目」(A.V.アメリカ改正訳英文)は同意に訳されている。これをSDAはどう説明するか。(P.245)

3. マタイ28:1「さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた」、旧約時代は1日は夕に始まり、夕に終わったが、新約時代に入るや否や、(復活の時から)女たちは夜半から夜半までの数え方にか変わったことを示す。(P.245)
4. SDAは主の日は土曜日であると主張し、その証拠としてマルコ2:28「それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」を引用する。この聖句はダビデがある環境の下では律法に反する事を行うことができたように、主もまた安息日の律法に反する事を合法的に行うことができることを意味している。だから主が安息日をかえることもできる。(P.245)
5. ディダック(Didache)及びイグナティウス(Ignatius)(35-107/117)は日曜日を主の日と言っている。(P.245)
6. SDAは例のホワイト夫人の幻、十戒の第4条に後光がさしていたという薄っぺらな基礎の上にその神学を打ち立てている。そしてベンデン兄弟たち(SDAの伝道者たち)は、大衆に向って日曜日礼拝は法王が始めたもので、悪魔から出たものだと言ふ。これがクリスチャンの態度であろうか。日曜日遵守は原始教会から歴代にわたって行われてきた堅固な土台の上にたっている。SDAはずばらしい働きを全世界で行っている。しかし、その善行も第7日目安息日強要によってキリスト教会に分裂を起しつつあることによって、全てを台無しにしている。また日曜休業令に反対することによって悪魔の働きをしている。今さら、2000年前のすたれた安息日を復興させようとしているとは、全く知識によらない熱心である。少女時代に脳の神経をやられた人物の雑然とした証を棄てて、バルナバやイグナティウス、アウグスティヌス、ルター、カルバン、バンヤン、その他の偉大なクリスチャンの証言を受け入れたらどうか。(P.249)
7. 何よりもSDAは聖書にかえるべきであろう、次の事実をどう思うか。
  - ① 週の第1日におけるイエスの復活(ヨハネ20:1)
  - ② イエスが週の第1日に弟子にあらわれた。(ヨハネ20:1)



- ③ もう1週間たって、週の第1日に11名の弟子にあらわれた。(ヨハネ20:26)
- ④ 聖霊がペンテコステの日、すなわち週の第1日に下った。(レビ23:16)
- ⑤ その同じ週の第1日にペテロがキリストの死と復活に関する最初の福音説教を行った。(使2:14)
- ⑥ その日、週の第1日に3,000人が改宗した。(使2:41)
- ⑦ その日、父、子、聖霊の名によってクリスチャンの洗礼が行われた。(使2:41)
- ⑧ トロアスでクリスチャンが週の第1日に集った。(使20:7)
- ⑨ トロアスで週の第1日に集った人々にパウロが説教した。(使20:6、7)
- ⑩ パウロは週の第1日に献金をするようにコリントの教会に指示した。(Iコリント16:2)
- ⑪ キリストは週の第1日にパトモス島のヨハネにあらわれた。(黙1:10)(PP. 249、250)

8. 1956、1957の両年にわたって2人の福音派の学者ダノールド・グレー・バンハウスとウォルター・R. マルチンがSDAの幹部と再三再四面談し、直接その資料を調査して、SDAは我々と同じく福音主義的信仰、伝統主義に立っている正しい信仰を持っている教会だというその結果をエターニティ誌(Eternity)に発表した。無論、これに対する反対の声は陸続として起った。

SDA及びこれらの学者に対する非難の理由として、(1)SDAは偽預言者エレン・G・ホワイトを依然として信じている。(2) SDAの偽りの教理を放棄していない。(3) SDA以外の者は神の国よりしめ出されることを取り消していない、の3ヶ条があげられた。

SDAは後に720頁にも及ぶ「セブンスデー・アドベンチスト教理の研究」(英文原書)を出したが、その主張は二枚舌の信仰告白で、その内容は八方美人的である。(PP.253-255)

## 第5章 ウィリアム・アービン編集長の反論

1. イエスの処女降臨や聖書の靈感、キリストの神性等に対する信仰が教会の中で失われつつあり、またキリストの名のもとに起った多くの異端、分派によって聖書の根本的な重要教義が誤り伝えられている事を患い、アメリカのインディアン・クリスチャン誌の編集長、ウィリアム・アービン氏は1917年に「異端を暴露する」(Heresies Exposed)と言う一書を書いたが、この書は広く読まれ、1973年には第35版を出すまでになった。異端に対し、忌憚ない論駁がなされており、要領よく種々の誤った教理が指摘譴責されていることは同書の特徴であるが、SDAに対する批判は多くの誤解と曲解に根ざしている不当なものと思われる。
2. SDAはクリスチャン・サイエンス、神知学派等と同じく精神的におかしい婦人が牛じっている教祖であり、また絶大な権力をもつ女がその教義の創始者である。(P.154)
3. バトルクリークのSDAの病院の主任医師であったウィリアム・ラッセルは1869にホワイト夫人の幻は脳神経をおかされた後遺症によるものであると言った。また別の医師(同じ病院の)フェア・フィールドもまた彼女の異象はヒステリー性超絶現象であると証言した。これらSDA信者である医師の宣言は彼女の言葉のうち、に神に対する冒瀆的なものがあり、また真向から聖書に反する言辞があることによって支持されている。(P.154)
4. 夫人の著書「各時代の争闘」はSDAの教義を公式に示したものである。長年彼女と交際していた前SDAの牧師であったD.M.キャンライトは彼女の著書の中には多くの他書からの無断引用の箇所があると言っているにも拘らず過去、現在、未来の善悪の争闘が示されたとは何事であるか。(P.154,155)
5. SDA主義の根ざす泥沼はあの偽預言者ウィリアム・ミラーに始まっているが、彼の一大失策を悔改めて離れようともせず、その謬説におひれをつけてこねあげたのがこの夫人の労であった。SDA主義は始めから迷いの道に入って出来あがったものである。(P.155)
6. ウィリアム・アービンは争闘に描写されている天の聖所の奉仕について非聖

書的なものと非難し、アザゼルであるサタンを罪を負う救い主としていると嘲笑し、これらの解釈は狂人たる女の思いから生じたもので、到底まともなクリスチャンの信じられるものではないと断じている。(P.155,156)

7. さて前おきはこの位にして、安息日問題に入っていくことにする。まずSDAはキリスト以前の律法の下にある状態に信者を導き、その教えによって神の恵から人々を遠ざけている。(P.162)
8. SDAは天上に聖所があると主張し、そこには灯、幕、パンの卓、契約の箱があるのだと言い始めた(実際は無いものを実在すると言い出した)。その上、そこに神の2枚の律法の板があり、その律法は有効であって我々もそれに縛られていると説いている。すなわち十戒は有効であり、その第4条の第7日目安息日を我々は守らなくてはならないと教えている。またプロテスタントはローマ・カトリック教会が紀元後364年のラオデキヤ会議で第7日目の安息日を日曜日(週の第1日)に変えたと言っている。これらは聖書上からも教会史の上から言っても間違っている。(P.163)
9. イスラエル民族と神との間のしるしである神の十戒は神御自身の指で書かれたものであり、その第4条が第7日目安息日に関するものである。これらの律法は新約聖書には「石に彫りつけた文字による死の務」とか「罪を宣告する務」(Ⅱコリント3:7,9)と記され、聖霊によって「消え去るべきもの」(Ⅱコリント3:11,13)と宣告されているものである。その代りに「霊の務」「義を宣言する務」(Ⅱコリント3:8,9)が与えられた。他の所では「だから、あなたがたは……祭や新月や安息日(改訳、単数)などについて、だれにも批判されてはならない」(コロサイ2:16)と書いている。「神は、わたしたちを責めて不利におとしめる証書をその規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた」(コロサイ2:14)とはっきり記されている。また新約時代の我々は律法の下になく、恵みの下にあると度々書き記している(ローマ6:14、ローマ7:4,6、ガラテヤ5:18)、ガラテヤ書はこうしたSDAのような律法主義者に対して書かれたもので、パウロはこう言っている。「しかるに、諸君はなぜ、今われわれの先祖もわれわれ自身も、負いきれなかつたくびきをあの弟子たちの首にかけて、神を試みるのか」(使徒行伝15:10)(P.163,164)
10. SDAは律法の一点一画もすたらない、またいとも小さい律法をも守らなくてもよいと教える者は神の国でいと小さい者となえられる(神の国に入ることができない)と教えている。それならば何故SDAは割礼を守らないのか、またあのエルサレム会議(使徒15)の時、何故安息日を守るべきことがはっきり言われなかったのであろうか。一体新約聖書の中で安息日を守れと書かれている所は皆無で



あることをSDAはどう説明するのか。(P.164)

11. 安息日は日没から日没まで守られた(レビ23:32)。この24時間内では荷物を運んではならなかった(エレミヤ17:21)。また火をつかってもいけなかった(出エジプト35:3)。また料理も許されなかった(出エジプト16:23)。これを行う者は安息日を犯す者として死刑に処せられた(民数15)。今のSDAはこれを守っているだろうか。彼らはその通り守っていないから、もし昔のように死刑が執行されたら、生き残るSDAはいなくなるだろう。人に伝えて自分自身が守らない者の宗教は空しいものではないか。(P.164)
12. まず聖書には道德律とか礼典律とかという言葉もないし、そういう別け方もない。SDAは礼典律は廃止されたが道德律は不変であると言う。こう言うことが本当ならあの使徒パウロはそうはっきり言ったはずだと思う。(PP.164、165)
13. 第4条の安息日はどちらかと言えば礼典に関係していると思う。道德律とは良心に訴えるもので書かれた啓示を必要としない。何の日を守れと言うことは良心は叫ばないし、確かに第4条はすたるべき礼典律である。(P.165)
14. 十戒のうちの全ての条の道德的教えにクリスチャンが従うのは、戒めだからでなく、福音の中にそれがあからである。新約中には神のみを拝せよが50回、偶像を拝するなが12回、神の御名を冒瀆するなが4回、父母を敬えが6回、姦淫が12回、盗みが6回、偽証が4回、むさぼりが9回禁じられている。ルターは「十戒は異邦人やクリスチャンには適用されず、ただユダヤ人を対象とするものである」と言った。だから、パウロは14の書翰中ただの1回も安息日のことを語らず、ただ1ヶ所律法について全ては廃されたと言っているにすぎない。(P.165)
15. 次はラオデキヤ会議でローマ・カトリック教会が第7日目安息日を週の第1日に変えたと言う問題についてである。たとえ何がその時に起ったにしても、人間が神の戒めを変えようと言うことは出きない事である。クリスチャンは第7日目安息日を守らなくてもよい。いわゆる、ローマの権威を認めるクリスチャンにとって第7日目安息日を礼拝日とすることは非合法であると宣言したにすぎないのである。しかし多くのクリスチャンはその時、またそれ以前に週の第1日を礼拝日として守っていたのである。(P.165)
16. 次の諸文書を見ればSDAの言う所は全く間違っていることは明らかである。

① バルナバ書翰(100年頃)

「イエスが死人の中から甦った第8日目を喜んで守っている」

② イグナティウスの書翰(107年)

「何の益にもならない昔話や奇妙な教えに惑わされてはいけない。もし我々が今尚ユダヤ人の律法に従って生活しているならば、我々は恵に浴していないと思う……もし昔の習慣に従って教えられてきた者たちが新しい希望を持つようになったのなら、もはや(ユダヤ人の)安息日を守らないで、主御自身の死により我々の生涯も主によって新しく生きかえった主の日を守って生活すべきである。」

③ 殉教者ユスティヌスの書翰(145-150年頃)

「日曜日と称する日に町や村、国中の人々が一ヶ所に集まって使徒たちの残したものと預言者たちの書を読んでいる……しかし我々が公に集るのは日曜日で、この日こそ神が世界を創造された第1日であり、我々の救主イエス・キリストもこの日に死人の中から復活されたのである。」

④ 第2世紀における使徒信条

「主の復活の日、即ち主の日に、間違いなく集まり、神の御名を賛美し、神がキリストを通して我らに与えられた恵みに感謝を捧げなければならない。」

⑤ イレナエウス(155-202年)

「主の復活の奥義は主の日以外の日に祝うべきではない。この日のみ、我々はパスカルの祝いのパンを裂き、この日を祝すべきである。」(PP.165,166)

17. 週の第1日、すなわち、主の日は第7日目安息日の代わりに制定された日ではなく、主の死と復活を祝う日なのである。これはクリスチャンにとって感謝の日、また自由の日なのである。ヨハネもこの日を主の日と言った。(黙1:10)。イエスが新しい創造の主として復活された。また弟子たちにもあらわれた聖霊もその日に降った。主の日に御国の門が開かれ、3,000人の魂が救われた。主の日に弟子たちは集ってパンを裂いた。(使徒20:7)
18. ユダヤの大学者、ダビド・バーロンは次の如く言っている。ユダヤ人たちに安息日はもう守らなくてもよいと言う必要はない。イエス・キリストの知恵と恵を知れば、もはやクリスチャンはユダヤ人の安息日は新約時代にはその意味を失い、守る必要がない事を自ら悟り知るに至るであろう。天よりの召命を受けた者は時とは関係なく、永遠と関係しているのである。ユダヤ人の安息日は古い呪われた世界、不完全なモーセの時代、エジプトからの救済と結びついている。クリス

チャンは新しい創造の子供であって、もはや律法ではなく霊の時代に属するのである。キリストの復活によって、第7日目安息日は廃止され、新しい創造の力によって与えられた休息日、週の第1日の新しい安息日に、その日の聖別と特権とが移行されたのである。(P.167)

19. 「証人」の編集人はいい事を言った。正確な第7日、または日曜日、または主の日を厳格に守ろうとする者はその計算問題でひっかかる。1582年にグレゴリー13世(1572-1585)はそれ迄の計算違いを発見し、10月5日から14日までを存在しない日とし、また100年毎に3つの閏年を帳消にした。イギリスでは1752年に9月3日から13日迄の11日を落してしまった。と言うわけで、正確にはそれらの日をつかむことは出来ない。(P.167)

## 第6章 ホーケマ博士の反論

プロテスタント教会の比較宗教学の学者のうち、SDA を異端分派として、ものみの塔やモルモンと同列に置く多くの人々のうちで指導的な地位を占めているのが、アントニー・A・ホーケマ博士である。氏の著書はキリスト教的新興宗教に関するものが幾つかあるが、イギリスから1973年に発行された103頁のポケット型叢書「セブンスデー・アドベンチスト主義」(Seventh Day Adventism)を中心に氏の痛烈な批判をかいまみることにした。

SDAの歴史から始めて、神、キリスト、救済、礼典、終末論に及び、付録として調査審判及びアザゼルの山羊、聖所問題、それに続き、SDAの安息日遵守論の批判で終わっている。小冊子ながらピリッと辛いと云った内容であるが、本書において唯安息日問題に関係した所のみを取扱うことは勿論である。

1. SDAは十戒のうち第4条を他の9条よりも重要視している。例のホワイト夫人の幻の影響であろう。(P.51)
2. D・M・キャンライトの言葉を引用している。「アドベンチストは使徒たちと全く違った説教をしていることを長年痛感していた。例えば、安息日問題について常に語り、また書いているが、使徒パウロは全書簡14通の中でたった一ヶ所コロサイ2:16だけで言及し、しかもそれを否定しているだけである」。(SDAを非難する。P.86) (P.51)
3. SDAは終末時代に第7日目安息日を拒む者は獣の印を受けて滅びると説く、船長のベーツは日曜日を聖日として守っている者は獣の印を受けると言った。ところが今ではいろいろなキリスト教会の異なった派の人々でも心からキリストを救主として信じている人ならば、たとえ日曜日を守っていても救われると言う。(Questions on Doctrine P.184) 一体どれが本当なのか、キリスト再臨直前、日曜休業令が布告される。真の安息日の光が世界中を照らす。その時、拒む者は神よりもローマ法王を尊崇する者として獣の印を受けると言う。結局、終りの時には第7日目安息日を守らなければ救われないということは、たしかに律法主

義で、少くとも行為が部分的に救に必要だと言っている。ただキリストを信じるだけでは駄目だと言うことである。(PP.51, 52) 信仰のみによって救われると説くSDAにはこの点が矛盾しているのではないか。(P.89)

4. 安息日はそもそも例の老船長(ヨセフ・ベーツ)がある記事を読んで正しい安息日は土曜日だと言い出した。そして、セブンスデー・バプテストの一信徒(レーチェル・オクス夫人)のニューハンプシャーのグループと接触した。そしてベーツは2つのパンフレットを書いた。1847年にホワイト夫人が幻を見、天の至聖所で特に輝く十戒の第4条を示された。

SDAが安息日を教義として認めるに至ったコースは、れっきとした正当な神学者による聖書研究によらず、何ら神学的素養のない信徒の説をホワイト夫人の異象によって確認したと言うお粗末なものである。こんな貧弱な根拠をもとにして、キリスト教時代の始めから、全教会が守ってきた日曜日安息日を打倒するとはまことに笑止千万である。(PP.89, 90)

5. SDAは、安息日は創造の記念日であって、原始の天地創造に我々の心に向けるもので、未来を示す影ではない、と言うが、私の考えでは、過去の創造と同時に来るべき天国の休息を指していると思われる。ヘブル書第4章9節には「こういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである」。この点SDAの考えは正しいだろうか。(P.90)
6. 十戒の第4条の第7日目安息日は不変の要素ではない。日曜日に変ったことは恵みの時代の大きな特徴である。人間の働きがあって後、休みと言う順序が、新約時代にはキリストの働きによってまず休みを与えられる。来るべきキリストを待ち望んだ旧約時代と、キリストによって始まる新約時代の違いが安息日を第7日目から週の第1日にしたのである。(PP.90, 91)
7. 1647年のウエストミンスター信仰告白には次のように決定されている。「一般に、適当な割合の時間が神の礼拝のために割かれることが自然の法則にあるごとく、神は、彼の言の中に、積極的、道徳的、永久的な戒命によって、特に、七日の中の一日を彼のために潔く保たるべき安息日に指定したもうた。その日は世の初めからキリストの復活に至るまで週の最後の日であったが、キリストの復活からは、聖書の中に主の日と呼ばれ、キリスト教的安息日として世の終りまで継続すべき週の最初の日に変更された(第21章の7)。これが正しい我々の信仰告白である。(P.91)
8. SDAはダニエル7章及び黙示録13章、14章9—12は安息日問題、獣の印、ロー

マ法王権等に関係している預言と理解している。終末時代に第7日目の復興運動が起こることをこれらの聖句は預言していると言うが、そんな考え方がどうして起こるのだろうか。「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った。『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊の前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』(ヨハネ黙示録14:9-12)。この言葉のどこに安息日に関する言及があるのだろうか。一介の老船長がこの言葉の中から日曜日安息日を罵倒する資料を見出しても仕方はないが、SDAの教団がこれを絶対的なものとして取り上げるのだから、事は極めて重大であると言わざるを得ない。こんな無責任な聖書釈義であれば、どんな聖句でも自分の好きなように解釈できると言うものである。(PP.91-92)

9. SDAは新約聖書の記事は第7日目安息日の遵守を支持しているとして、パウロ及びイエスが安息日を守ったことを指摘する。これに対する反論は極めて容易である。イエスは復活までは旧約時代であったから当然の事であり、復活後は2回も続けて週の第1日に弟子たちにあらわれている。これは重大事である。使徒パウロはユダヤ人を救うために彼らが集まっている土曜日の集会に出たまでのことで、それは彼自身第7日目を守った証明にはならない。SDAが日曜日に我々の信者を盗むために我々の集会に出る時、SDAは日曜日を守っているわけではないことは当たり前だ。それにパウロはトロアスで週の第1日の集会に出ている。(PP.92, 93)
10. 新約聖書が示す第7日から第1日に変った次の証拠を検討しよう。①イエスは週の第1日に甦り(ヨハネ20:1)。週の第1日を我々も聖くするように言われた。②また週の第1日の夕方イエスは10人の弟子にあらわれた(ヨハネ20:19以下)。③次の週の第1日、11人の弟子にあらわれた(ヨハネ20:26以下)。④約束の聖霊が週の第1日に与えられた(使2:1以下)。かかる重大事件は日曜日に関わると思われる。⑤同じ日にペテロの説教によって3000人の人が回宗した(使2:14以下、41)。⑥トロアスにおいて日曜日の集会が持たれ、パウロが説教をした(使20:6-7)。(PP.93, 94)
11. 前述のトロアス集会につきSDAの著述家アーサー・E・リッケイ(Lickey)は次のように弁解している。「週の第1日(聖書的の時間)は、土曜日の日没から日曜日の日没で終る。この集会は週の第1日であり、しかも夜であるから、我々が土曜日の



晩と言う時である。第1日は日没から始まるから、こう言う結論になる」(「神は現代人に語る」P.430)。リッケイは、ルカはユダヤ人式に日を数えたとして上のような結論を出しているが、F・F・ブルース(Bruce)は夜半を1日とするローマ式でルカは数えているから、そうすると、これは土曜日の夕方をさすと言っている。リッケイはこの集会は送別会であるから、聖日の例会ではないと言うが、「週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集った時」(使20: 7)、と言う言葉はリッケイの考えが間違っているように思われる。「週の初めの日に」とルカが書いているのは、ちゃんとそれなりの意味があつての事と思う。(PP.93, 94)

12. パウロは献金のことでコリントの教会に命じている。「聖徒たちへの献金については、わたしはガリラヤの諸教会に命じていたが、あなたがたもそのとおりにしなさい。一週の初めの日ごとに、あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じて手もとにたくわえておき、わたしが着いた時になって初めて集めることのないようにしなさい」(I コリント16:1, 2)。週の初めの日(安息日が終わってから)金を数えて、自宅に貯えておくことを言っているので、日曜日の礼拝に献金をささげるようなことは何も言っていないとSDAは言う。しかし我々はクリスチャンの集会在毎週の第1日に開かれていたことと信じる。(PP.94, 95)。
13. ヨハネの言葉について、「わたしは、主の日に御霊に感じた」(黙1:10)。この主の日を土曜日だとして固持しているのはSDAだけである。穏健な註解書やレキシカンには皆日曜日説である。(PP.95, 96)
14. SDAは週の第1日を主の日と称し始めた信頼できる古代文書は2世紀末のアレキサンドリヤのクレメンスだと言うが、事実はそうでないことは次の証明であきらかである。①黙1:10前述の主の日の聖句。②マグネシア人へのイグナチウスの書翰9章「もし、昔の習慣に従って歩んできた人々が、新しい希望に達し、もはや諸安息日を守らず、その生活を主の日に従ってとのえ…その主の日に我々の生命もまたキリストによって甦ったのである」(107年頃のもの、J・B・ライトフット(Lightfoots)の「使徒教父」P.71)。③ディダック(Didache)または十二使徒の教訓(Teaching of the Twelve Apostles)の14章、「そして主の日に、あなたがたは互いに集まり、パンをさけ、また感謝をささげなさい……」(J・B・ライトフット、P.128)。④バルナバ書翰、15章「だから私たちはまた第8日を喜んで守っている。その日にまたイエスは死より甦り、人々に見られつつ昇天された」。70年から130年の間にかかれたもの。(ライトフット、P.152)。⑤ジャスチン・マーター的第一弁証論、67章「しかし、日曜日に我々は皆集会を持っている。なぜならば、神はこの日に暗黒と物質の中に変化をもたらし、世界を創造された。また我らの救い主イエス・キリストもこの同じ日に死人の中から復活されたからである」。155年

頃に書かれた。「ニケヤ後教父」(エルドマンズ、再印刷、1956) (P.186)。これらの文書及び新約聖書の言及は、SDAが言うように、第7日目から週の第1日に安息日を変えたのはローマ法王でないと充分証明していると思う。即ち、法王権が生じるずっと前に、すでにそうした変化はあったのである。

以上の結論として、SDAの安息日に関する見解は、史実にも反し、また聖書的でもないことを宣言したい。(PP.96 - 98)



## 第7章 ウォルター・マルチン博士の反論

SDA はいわゆるキリスト教界の新興宗教(エホバの証人, モルモン, クリスマン, サイエス等)の一つではない。立派に聖書の教義に立つ伝統的福音主義教会である。その信者はプロテスタントの兄弟姉妹であるとその機関紙エターニティー(永遠)に発表して、現代のプロテスタントの世界に一石を投じた学者である。

アメリカにおける比較宗教学の権威で10年以上もラジオを通じて大衆に奉仕し、カリフォルニア・アナハイムのメロディランド神学校で教鞭をとり、クリスマン・リサーチ、インスティテュートの経営者としてキリスト教、非キリスト教の研究に従事している学者である。バン・バーレン教授やホーケマ博士等はマルチン氏を非難している。

マルチン博士は1977年8月出版の改正版自著「分派王国」(The Kingdom of the Cults)の中で次のようにSDAに対する見解を述べている。「私は次の事を確信する。すなわち本当のものみの塔の信者、モルモンの信者、キリスト教科学の信者ユニタリアン、心霊術の追従者であって同時に聖書的なクリスマンであることは不可能である。しかし、多少異なった信条はあるが、本物のSDAは立派なイエス・キリストの僕であり得る」(P.360)。「ルイス・T・タルボート、M・R・デーハン、ジョン・R・ライス、アントニー・A・ホーケマ、J・K・バンバーレン、ハーバート・バード、ジョン・R・ガーストナー等はアドベンチストを異端の一派と言っているが、故ドナルド・グレー・バンハウス、自分やE・シュイラー・イングリシ、その他はそうでないと確信している」(P.360)。

「アントニー・ホーケマ博士はSDAは非キリスト教的な教派と思っている。SDAに好意を持っていない氏がSDAについて興味深いことを言っている。これは決して偏見をもって語ったものではないことは確かである。『私は、SDAは異端の一派で、福音主義的な教派でないと信じている。……しかし、SDAの教義の中で確かに聖書的に健全なものがあることはうれしいことである。アドベンチストが聖書の無謬性を信じて

いること、三位一体及びイエス・キリストの完全な神性を信仰していることは感謝である。また天地の創造神の摂理、キリストの受肉、復活、新生の絶対的必要性、聖霊による聖化及び文字通りのキリストの再臨を信じていることを我々は感謝をもって確認する』(ホーケマ著「四大分派」(The Four Major Cults、P.389, 403)。

ところで、非キリスト教的教団を研究している私にとって、ホーケマ博士の言うように SDA 教会は上記の聖書的教理を公然とその信条の中に含んでいるのに、博士は SDA は非キリスト教だと言う点が、どうしても納得できない」(P.370) とマルチン博士は述べている。

## 安息日問題に対するマルチン博士の批判

---

1. アドベンチストは第7日目安息日が主の日であると主張する。彼らが引用する聖句はマルコ2:27、28と黙示録1:10である。英訳の聖句でなく、本文ギリシャ語によると、主の日とはキリストが所有する日ではなく、キリストが自分の思うことは何事をしてもよい日なのである。ギリシャ語とその文法を見ればSDAの解釈が間違っていることがわかる。主の日は初代教会が主にささげた日であって、旧約のモーセの律法によらず、新約の主の愛の命令によって捧げられた日なのである。主の日が第7日目安息日でないことは聖書からも歴史からも説明できる。(P.395)
2. 上記に関する歴史的証言
  - ① アンテオケの監督イグナチウス(110年頃)既述につき省略
  - ② 殉教者ユスチウス(100-165)、「日曜日と呼ばれる日に、町々や田舎に住む全ての人が一つの場所に集まり、時間の許すかぎり、使徒の追憶文や預言者たちの書が読まれた……日曜日に我々全ての者は公けの集会を持った。この日に神は物質的暗黒に変化を起こし、世界を造られたからである。そして我らの救い主イエス・キリストが死から甦られた日だからである」。
  - ③ バルナバ書翰(120から150年の間)「『新月安息日……わたしは不義と聖会とに耐えられない』(イザヤ1:13)、主の御言を理解せよ、あなた方の今の安息日は我はこれを受入れることはできない。しかし、全てのものに休息を与えたその日、別の世界の始まりである第8日の始まりを与える。だからまた、我々も第8日を喜んでその日を守る。この日こそまた主イエスが墓から甦っ

たその日である。

- ④ リオンの監督イレナエウス(178年頃)「主の復活の秘義は主の日以外の日に祝うべきではない」。
- ⑤ バルダイサン(Bardaisan) (154年生れ)、「我々は誰れであろうと、我々は皆、メシヤの名、すなわち、クリスチャンと言う一つの名で呼ばれている。週の第1日であるその日に我々は集まり、また決まった日に断食する」。
- ⑥ カルタゴの監督キプリアヌス(200-258)「主の日は第1日であり、第8日である」。
- ⑦ ユーセビウス(315年頃)、「全国の他の所(ローマ以外の)にある教会は使徒の伝承によって、今日までその習慣を守り続けてきているので、主の復活の日以外の日に断食を終らせてはならない。この問題について監督の会議や大会が開かれ、皆全員一致で教会令をつくり、全国にある全ての教会に主の復活の秘義は主の日以外の日に祝うべきではないことを伝達したのである」。
- ⑧ アレキサンドリアの監督ペテロ(300年頃)「主の復活の日として我々は主の日を喜んで守っている」。
- ⑨ 使徒たちのディダクケ(70-75年頃)「主のその日に、あなたがたは集まり、パンを裂き、感謝すべきである」。
- ⑩ プリニーの書翰(112年頃トラヤヌス帝にあてたもの)、「クリスチャンたちは次の事を認めた……彼らの罪とか誤りと言うものは、ある特定の日に夜の明けの前に集まり、繰返し、キリストを神としてたたえる賛美歌をうたい、互いに誓いをする(サクラメントを行う)ことにすぎない……これがどこおりなく終ると、散会し、また集まっては食事を共にするという習慣で、全く普通の罪の無いものである。私が閣下の御指示に従い、上記のことをも止めるように命じましたので、その後は彼らはこの事を止めております。私はこのような結社の存在を禁止しました」。(PP.395, 396)

3. 2に述べた歴史的事実によって初代教会は使徒も教父たちも主の日、または週の第1日を守ったことは確かである。アレキサンドリアのクレメント(194年頃)の言葉によれば、ユダヤ人の安息日は労働を行う平日と異なる日ではなかったのである。SDAはこれらの史的事実を故意に否定して、当代学者の通説に耳を傾けないが、SDAがどんなに頑固であれ、安息日が主の日に代わったことは聖書

的にも歴史的にも立証されていることである。(P.396)

4. 最近SDAはラジオ放送の預言の声から31頁のパンフレットを「安息日及び日曜日に関する権威ある引証」と題して発行し、日曜日が土曜日に代わったこと、及び321年にコンスタンチン帝によって異教の法令が出されたことを強調している。ところがSDAが引用している文献を調べて見ると、SDAの期待に反して、第7日目安息日は主の日ではないことが明らかに証明されている。(P.396)
5. SDAが引用した同じ著者たちの言葉を自分も引用してSDAの考慮を促したいと思う。
  - ⑪ 「主の日は安息日に代った日ではない…主の日は単なる教会の一つの制度にすぎない…初代教会の信者たちは主の日に何んでもかんでも(どんな働きでも)やっていた」。(ジェレミー・ティラー監督、Ductor Dubitantium、第1部2巻2章、規定2、節51、59) (P.396)
  - ⑫ 「主の日(日曜日)を守ることは神の命によったのでなく、教会の権威できめたことである」(カトリック、安息日指針、第2部1章10節に引用されたアウグスブルグ信仰告白) (P.396)
  - ⑬ 「日曜日が旧約の安息日に代ったので、イスラエルの民が第7日を守ったように日曜日を守るべきであると教えることは間違っている」。(J・T・ミュエラー、「安息日と日曜日」(PP.15, 16)、(PP.396,397)
  - ⑭ 「カトリックは公然と十戒に反して安息日を日曜日すなわち主の日に変えたと主張し、その変更を何よりも誇っている」。(マルチン・ルターアウグスブルグ信仰告白、28条、節9) (P.397)
  - ⑮ 「昔日曜日は主の日とか太陽の日とかと異なった呼び方をされたが、決して安息日と呼ばれたことはなかった。安息日は常に土曜日、または第7日目にのみ用いられて、これは聖俗両方の作家、著作家によって行われていた」(クラーク、バック神学辞典1830年版P.537) (P.397)
  - ⑯ 「主の日(日曜日)が使徒の権威によってユダヤ人の安息日に代わったという説は、聖書にもキリスト教の古代史に根ざしていない」。(サー・ウィリアム・スミスとサムエル・チーサム著、「キリスト教古代史」第2巻、P.182、安息日の項)(P.397)

- ⑰ 「クリスチャンの主の日または日曜日は第7日から第1日に計画的に変更されたクリスチャンの安息日であるという考えは、ずっと後になって起ったものである……ラオデキヤ会議(364年)ではクリスチャンのユダヤ化とユダヤ人の安息日に休むことを禁じ、ただし、出きる限りクリスチャンとしての休日休むことを奨励している」(ブリタニカ百科辞典、1899、第23巻、P.654)(P.397)

以上のような引用文によって SDA は主の日は始めから日曜日であって、その日は使徒たちの時から引き続いて守られてきた事を証明してしまった。

6. SDAは前記パンフレットの13頁にある宗教百科事典から引用しているが、自分に都合の悪い所はぬかしている。これはアドベンチストの常套手段である。

「日曜日(dies-solis、ローマのカレンダー、太陽の日、太陽崇拜の日)、初代のクリスチャンが礼拝日として採用した。ラテン人の太陽崇拜の日を『義の太陽』の日と解釈した。

(ここからぬける)天地創造の祝祭日であったユダヤ人の安息日のように、日曜日はキリストの復活を力強く祝う週1回めぐってくる日であった。日曜日は主の日とよばれ、その日に初代教会はパンをさくために集っていた(使20:7、I コリント16:2) (ここまで)新約聖書にはその日を守る規定は見出されないばかりか、その日を守るようにとの命令もない。しかし、クリスチャンはこの日を使徒の権威を模倣して、全国的に祝う日にしてしまった。第2世紀には全国的に守られるようになった」。(シャフ・ヘルツォグ宗教知識事典、1891、第4巻、日曜日の項) (P.397)

7. SDAはマルチン・ルターの文を引用しているが、ルターは音に聞こえた反ユダヤ人安息日論者で、かのカールシュタット博士との論争は有名な事件である。このようなルターの言葉を引用しているところをみると、SDAは案外ルター神学に通じていないことを暴露したとしか言えない。(PP.397, 398)
8. マルチン氏はその著のP.398からP.403にわたって反安息日聖句を引用し、SDAの誤りを訂正しようと論戦を展開している。下に記すこれらのみ言葉はもはや旧約時代の7日目安息日は廃止されたと言うのである。

① コロサイ2:13-17

② ガラテヤ4:9-11

③ ローマ13:8-10

④ ローマ14:4-6、10、12、13

(これらの聖句はすでに出てきたし、また今後も出てくるので聖句そのものは省略する)

## 第8章 パウロ・K・ジェウエット博士の反論

アメリカ、フラー神学大学・組織神学教授パウロ・K・ジェウエット博士はミシガン州グラント、ラピズの福音文書印刷所から1971年に「クリスチャンの礼拝日に関する神学指針、主の日」と題する170頁程の書を書いた。

氏の書は4章にわかれており、第1章ではユダヤ人の安息日、第2章は主の日、第3章は主の日の神学、第4章は主の日の守り方となっており、現在の一般神学者の考えを組織的にもれなく口述してあるように思われるので、その必要なる点を摘出して読者の参考に使いたいと思う。

1. 序文にはヒトラー政権下のドイツに於て、最後迄日曜日に敬虔な礼拝と祈りとをささげて殉教者となった告白教会牧師デトリッヒ・ボンヘッフアーの物語に続いて、この地球上において、キリスト復活後教会は日曜日を聖なる礼拝日とし、今日では世界中どこでも、また皮膚の色や言語の違いにもこだわらず教会は日曜日を守っていると言うことを強調している。その序文の中で、古代に於て、あるクリスチャンは土曜日と日曜日の両日に礼拝を行っていた。また今日あるクリスチャンは土曜日のみに集会をしている。しかし、このような仲間はずれのクリスチャンは極めて少数であり、また微力であって目立たない存在だと書いている。(PP11、12)
2. ごく少数のクリスチャンがユダヤ人の安息日を正しい礼拝日として守っているが、多くのクリスチャンは週の第1日をクリスチャンの安息日として守っている。(P.13)
3. 日曜日はユダヤ人の安息日とは全く異なるものとして理解している者でも、ユダヤ人の習慣に従って7日目毎(日曜日から次の日曜日まで)に神を礼拝している。(P.13)
4. 聖書の古代の記録では創世記2:2-3に安息日の起源についての記事はあるが、出エジプト記まで安息日を守ったとの記録はない。(P.13)



5. 「安息日を憶えよ」との神の御言葉はエジプトの奴隷生活の内にイスラエルが忘れてしまった安息日を思い出すようにとの言葉であろう。(P.14)
6. イスラエル史の再生を試みているウエルハウゼンらの近代学者は、天文学の進んだバビロン人から安息日の制度を学びとったとの説をとなえている。(P.14)
7. アッシリア、バビロン文化は月暦の第7日、第14日、第21日と第28日がアッシュルバニパルの時から重要視されるようになったと伝えている。しかし、ヘブルの歴史はアッシリア、バビロンよりも古いから、これが安息日の初まりとは考えられない。(P.14)
8. ユダヤ人哲学者フィロ等の考えによれば、ギリシャ数学者や詩人は7の字を起源のない字として神秘化し、これが創世記の記事にも関係があると説いたが、実際は創造が先であろう。(PP.14、15)
9. 古代のケニ人の中で土星を尊崇する習慣があつて、それがユダヤ人の間にとり入れられたのではないかとの説があるが、土星等の遊星の名前が週日につけられたのは、キリスト教時代であるから、ケニ人説も信じられない。(P.15)
10. 7日を1週としたのは古代の商業市に起源を持つのではないかと説く者があるが、アモスやネヘミヤ等が安息日に商売をする者をきびしく禁じていることを考えると、これは不当な説であると思われる。(P.15)
11. 週のサイクルは何ら天文学的、または社会学的根拠によらないから、モーセによって始まったことを否定する根拠はない。(P.16) (エゼキエル20:11-12, ネヘミヤ9:12-14参照)
12. イスラエル国家がモーセの時に建設されたが、その時に安息日のきまりも見出されるとは学者たちの一致した意見である。(P.16)
13. 一般に礼典律と呼ばれる出エジプト記34:14-28と道徳律と言われる申命記5:12-15がある。(P.17)
14. 出エジプト記20:8-11の十戒は一般に知られているが、天地創造の記念日として第7日目を守ることが明記されている。申命記5:15と出エジプト記20:11との差は、前者は贖い主としての神、後者は創造主としての神を強調している所にある。(P.18)

15. クリスマンと安息日の関係は、安息日の戒が礼典律に含まれている他に、偶像礼拝や殺人、姦淫等を戒めている道德律にも含まれているので非常に複雑である。(P.28)
16. 神が直接御手をもって書き、御子が御自身、自分は律法を廢するために来たのではないと宣言された。神が合わせられた十の戒めを、人間が分離することが出来るだろうか。まして「憶えよ」と神は仰せになっている。十戒は不変である。こうした考えはオランダ改革派、特にイギリスにおけるピューリタンや分派教会に強く保持されていた。(PP.29、30)
17. これに対して、週の安息日は、安息年と同様キリストによって成就し、廢止されたと説く者が多かった。パウロの「新月や安息日などについて、だれにも批判されてはならない」(コロサイ2:16) や「ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである」(ローマ14:5) など言葉を引用してその証拠とした。

初代教会のユスティヌスはユダヤ人は週に一日何もせず、それでいかにも敬虔ぶっていると責めている。また自分たちは週に一回ではなく、毎日を安息日として守っていると言った。

また教父たちは割礼と安息日を同一視し、アブラハム以前には割礼はなく、モーセ以前には安息日は無かった。そして両者はキリストによって成就したから、もはや不必要であると説いた。

また16世紀の宗教改革者であるルターやカルバンの証言にも、この目的を説いているものがある。最近のクリスマンはいかなる日も守る必要はないが、キリストの体の為には日曜日が役立てばそれでよいという考えをもつに至っている。ヨーロッパ大陸の教会、特にルター派、スイス、フランスの改革派に多い。またある者たちは日曜日礼拝という時代錯誤もはなはだしい習慣を棄てて、時代にふさわしい積極的伝道、日曜日に海岸やゴルフ場に出かけて行って魂に働きかける方が良いという意向をもっている。神は日曜日だけの神ではない。神は時や場所を超越した方であると彼らは言う。(PP.30、31)

18. 「イエスと安息日」の項でこの著者は次のように述べている。安息日は厳格に守られていた。金曜日は備え日とよばれ、十字架上の強盗やイエスの体も十字架からおろされて、安息日を汚さないようにした(マルコ15:42)。使徒の時代にも安息日の道のり(使1:12)の記録はあるし、モーセと預言者の書は安息日に会堂で読まれていた。(使15:21) (P.33)

19. 安息日の守り方の論争でイエスは時折、パリサイ人らと衝突し、それが彼を十字架の死に導くこととなった。麦の穂を摘んだ事(マルコ2:23)、病人の癒しの件(ルカ13:10-17)等。(P.33)
20. イエスは敬虔なユダヤ人として、十戒を厳しく守られた。イエスが自由の名の下で律法を一切廃されたとの考えは全く現代的思想である。(PP.34、35)
21. イエスは安息日を否定したことはない。ただユダヤ人の守り方、その伝説的方法で彼らと対立した。イエスの復活そのものが安息日を変えたのではなく、イエスの言葉があったのだらうと思われる。イエスの来臨によって安息日の休息が実現したと考えたのであろう。弟子たちはユダヤ人の安息日にかわって日曜日を守るのが主のみ旨と考えたに違いない。(PP.35、36)
22. ユダヤ人クリスチャンは復活後も引続いて昔からの安息日を守っていた事は明らかである。割礼を行い、清い食物を食していたように、第7日目を守っていた。(P.43)
23. パウロは安息日に会堂でクリスチャンを見出した(使9:1-2)。ヤコブはエルサレム会議の時、至る所で毎安息日モーセの書が読まれている(使15:29)と書いている。時がたつにつれて、モーセの律法により忠実であるように奨励された。これはパリサイ人や祭司等がキリスト教を信じたからであろう。(使21:20)  

そうこうするうちに、熱心なユダヤ派のなかで、モーセの律法を守らなければ救われないと異邦人クリスチャンにも割礼を強いる者が出てきた。(ガラテヤ4:10、コロサイ2:16) 勿論、安息日もこの中に含まれている。パウロは異邦人クリスチャンは安息日を守る必要はないとはっきり宣言した。(PP.43、44)
24. コロサイ「2:16祭や新月や安息日などについて、だれにも批判されてはならない」「2:17これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある」。このパウロの宣言には毎週の第7日目安息日は含まれないと昔のピューリタン、今ではSDAが主張している。しかし、原語ギリシャ語の語法では第7日目安息日もその中に含まれていることは明らかである。(P.44)
25. ユダヤ人クリスチャンは異邦人クリスチャンの数が増すにつれて、安息日問題に関して強剛な態度をもつようになった。この事は共観福音書の中にも見られる。例えば、ルカは異邦人クリスチャンの側に立って、安息日からの解放を指向し、マタイはユダヤ人クリスチャンの立場をとって、律法の傾向を示している。(P.45)

26. エルサレム滅亡の時(紀元後70年)、マタイは「あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ」(マタイ24:20)と書いているが、同じ時のイエスの言葉として、マルコもルカも安息日のことを記していない。SDAはこれを以ってキリストの死後40年たっても安息日を守るようにキリストは言われたではないかと反論している。(PP.45、46)
27. ユダヤ系クリスチャンの間に読まれたある経外聖典には「安息日を守らない者は父を見ることができない」と言われている。またヘブル人の福音書には、マルコ3:1-6の安息日のいやしが詳細に描かれている。しかし異邦人クリスチャンの間ではやった経外書、トマスの福音書には、子供の時、イエスは安息日に土のハトをつくった。ユダヤ人がイエスの父に文句を言うと、イエスはそのハトをとばしたがその羽音が大きかったので、ユダヤ人たちは驚いたと書いてある。(PP.46、47)
28. ユダヤ人クリスチャンは安息日問題で一步も譲らなかったことはわかるが、では古代の異邦人クリスチャンはまるで安息日を守らなかったかと言うと、土曜日安息日と日曜日の両日を守った記録が残っている。イグナティウスのマグネシア人の手紙91に最も古い記録がある。「安息日を守らないで、主の日に従って生活しなさい」。「安息日を守らないで」と言う言葉の裏には、紀元110年頃、小アジアにはユダヤ人の第7日目安息日を守っていた異邦人クリスチャンがあったことが示されている。(P.47)
29. 不思議なことに、東方ローマにおいて、3世紀から4世紀にかけて、異邦人クリスチャンの第7日目安息日に関する関心が深かった。テルトウリヤヌスは「クリスチャンたちは日曜日のように、土曜日にもひざまずかなくなった」と言っている。当時のクリスチャンは土曜日にはひざづいて神に祈り、日曜日には立ったままでキリストに祈った。テルトウリヤヌスは、土曜日に断食をする習慣には反対した。またエチオピア教会は3世紀頃、土・日の両日に礼拝が行われていたと言及している。(エジプト教会規定)
- 土・日の両日が礼拝日であったとは奇妙なことであったが、土曜日はキリストを創造主として、日曜日は贖罪主として礼拝していたらしい。安息日礼拝はコンスタンティヌス帝後大いに盛んになり、6世紀頃に火が消えたようになった。9世紀のアルクインの頃になると、西方教会では、土曜日はマリアの日と呼ばれた。マホメット教徒によってキリスト教の領土は広く失われたが、アビシニア教会は孤立した状態で今まで土・日両日の礼拝が守られてきている。(PP.47、48)
30. 第7日目安息日がいつから教会で忘れられるようになったかは、はっきりわから

ないが、コンスタンチヌス大帝の勅令によって日曜日遵守が強要され、ユダヤ人の安息日が序々に軽視されるようになったことは確かである。(P.48)

31. エジプト及びエチオピア教会で正しい安息日が守られていた事は事実だが、詳しくは次の段階を経てきたようである。①ただ第7日目安息日だけが守られた(使徒時代からニケヤ会議まで)。②土・日・両日が守られた(ニケヤ会議から100年か200年の間)。③日曜日のみが守られた。(今日まで)

日曜日を守ることは、かなり古い時から教会で行われてきた様であるが、問題は、日曜日は安息日としてではなく、週の第1日としてデビューしたことである(使20:7-12) (P.49)

32. 1世紀の終り頃に「主の日」という名称があらわれ(黙1:10)、2世紀に「8日目」という言葉が用いられた。異教の「日曜日」という言句は、ユスティヌスが用いたのが始めてであるが、教父たちもこの「日曜日」という文句は余り歓迎しなかった。「安息日」とか「クリスチャンの安息日」などという言葉は教会の礼拝日には用いられなかった。第7日目の安息日よりもすぐれた日として「第8日目の日」という言葉が日曜日をあらわすものとして用いられた。バプテスマは日曜日に行われ、割礼は第8日目に行われた。しかし、「第8日目」と言う言葉はいつしか消えてしまった。(PP.50、51)

## 第9章 ジェウエット博士の「主の日」論

1. 16世紀の宗教改革の時、安息日の代りに主の日を守るようにしたのは、教会の権威によるとのローマ教会側の主張を、プロテスタントは頑強に拒否した。(P.52)
2. 学者の一致した見解は、初代のクリスチャンは週の第1日を主の復活の記念日として守り、日曜日遵守はイースターから始まったということである。(P.53)
3. 何時、何処で、どういう事件によって始まったかという点については聖書記者も教父たちも確言していない。(P.53)
4. 初期のクリスチャンは安息日に宮や会堂に行って聖書を読んだり、祈ったり、説教をきいたりした後、家に帰ってから、使徒の教えを学び、パンを裂いたりしたのではないかと推測する人々もある。(P.53)
5. パンを裂くことは毎日行われたと聖書は記録している(使2:46、5:42)。ハロルド・リゼンフェルトの説によると、ユダヤ人的安息日は依然として守っていたが、その夕、または晩、信徒たちは集まってパンを裂いた。これらの集会は安息日の延長、また継続そして安息日を完成、成就するものと思われたのではないだろうか。時には晩の集会は翌日曜日の朝まで続き、それが日曜日の復活と関係づけられたのではないか。こうした事があっても、クリスチャンが日曜日を聖別するようになったのは、まだ後の事であろう。クリスチャンはその時でも第7日目安息日をユダヤ人式に守らず、主の自由のもとに守ったものと思われる。(PP.53、54)
6. リゼンフェルト説は推測の部分が多くて、そのまま信じるわけにはいかない。むしろ古代教父たちの言葉によると、キリストが約束された安息日の休息は、クリスチャンを安息の日を守ることから解放したとの考えが信じやすい。(P.54)
7. 一方学者の説に、初代クリスチャンは、キリストを受け入れないユダヤ人と会堂礼拝を共にする事ができず、日曜日に独自に礼拝をするようになったと言うのがある。その言わんとするところはわかるが、何故土曜日に独自の集会を持たなかったかという疑問が残る。(P.55)



8. 上記の説に関し、結局は、ユダヤ人とクリスチャンの精神的決裂が本当の理由ではないかと言われている。ユダヤ人に殺された主が墓の中にいるそのユダヤ的安息日は、もはやクリスチャンには悲しみの日でこそあれ、喜びの日ではなかったのではないか。それにしても、他の日ではなく、特に日曜日を守るようになったのは、どういうわけかとの問いが未解決で残されている。(P.55)
9. 宗教史学者によると、クリスチャン時代前における日曜日遵守の研究がなされた。初代教会が日曜日を守る以前に、すでにこの日が何らかの特別の日と考えられていたのではないかと言う。ところが、例のクムラン洞穴文書によると、エッセネ派の暦なるものが発見されたが、クリスチャン時代以前に、特別な重要な日とされていたのは、水・金・日曜日であった。しかし、これらの日に、人々は日常の働きを休んで、祈りや祝いに時間をさいたと言う事は一切言われていない。クムランの一団はユダヤ人の第7日目安息日を厳格に守っていたのである。後のクリスチャンが彼らの暦を利用したことはあり得ない。おもしろい事には1年中の50日の収穫祭は日曜日に始まり、日曜日に終わっているが、毎週の日曜日を守ったクリスチャンとは関係はないと思われる。(PP.55、56)
10. 日曜日聖守に関する聖書の言及は次の3つの個所を挙げるのが普通である。①パウロがコリントの教会に献金を日曜日に自宅で貯えておくように指示したこと(Iコリント20:7)。②週の第1日のトロアス集会(使20:7)。③主の日にヨハネが幻を見たこと(黙1:10)。(P.56)
11. 上記の全ては皆異邦人クリスチャン側からのものである。また聖書にはパウロ・バルナバの異邦人伝道旅行以前に、日曜日を守ったと言う、そのものずばりの言及はない。それならば、日曜日はパウロから始まったのであろうか。決してそうではないと言う他はない。日を守ることを警告した唯一の新約記者はパウロその人であった。(コロサイ2:17、ガラテヤ4:10、ローマ14:6)。もし、パウロが異邦人信徒に日曜日を守るように勧めてまわっていたら、あのエルサレム会議(使15)で厳しく糾弾されないわけがない。割礼の問題だけでもあの有様であった(使21:21)。(P.56)
12. 一方、週の第1日を守ることは、ユダヤ人や異邦人クリスチャンからではなく、ユダヤ系クリスチャンの間で始まったとの説がある。ユーセビウスの教会史(3、27)の中で第7日目安息日を厳格に守り、パウロの権威を否定していたエビオン派は、ヘブル人への福音書のみを用いていた。しかし、主イエスの復活を記念して日曜日を守っていたとの記事がある。これによると、日曜日を守ることは案外古くからあったことがわかる。またエビオン派は異邦人クリスチャンとも分離したから、日曜日を彼らから引ついだということとはあり得ない。ただ一つ、つじつ



まのあわないのは、2世紀末のイレナエウスのエビオン派の記述の中で、日曜日を守っていることについて何も言っていない事である。こうなると、ユダヤ人クリスチャンは異邦人から日曜日を守ることを導入したという結論になるが、この場合、異邦人教会から離れてしまったエビオン派が、どうして日曜日を守るという異邦人の習慣を固定したかがわからない。(P57)

13. 古代の文書には、週の第1日と主の復活の関連は意外に強調されていない。初代教会においてイースターの物語が読まれたという証拠はない。西方教会ではアンブロシウス(339-397)から始まった。初代の信徒が日曜日の朝集ったということもはっきりしない話である。プリニーがトラヤヌス帝に送った書翰(紀元112年)には早朝の集会のことが書かれている始めである。とにかく、日曜日について書かれた記事に復活の話は出てこない。ユスティヌスの異端論駁書にも、日曜日遵守の理由として、天地の創造が始った最初の日、そしてそのあとでキリストが復活した日と書かれている。クリスチャンの礼拝日として、その名も「週の第1日」「主の日」「日曜日」「第8日」そして最後に「復活の日」と称えられている。(PP.57、58)

14. 黙1:10の「主の日」クリアケヘメラとヘメラトウクリウーは似た様な意味であるがその相違も無視できない。黙示録は来たるべき主の大なる日に関するからこの言葉を使ったと説く学者もいるが、70人訳や新約中に使われている主の日(終末の)という語句とも違っている。

また後に「主の日」という言葉は日曜日の意味で用いられたが、ヨハネもまたその意味で使ったと思ってもよいではないか。(P.59)

15. 使20:7-11のトロアス集会は、パンを裂くために集った日曜日の集会であった。それがたまたまパウロの旅行の予定が、その翌日に重なったというわけである。日曜日に礼拝を行ったというはっきりとした証拠を示す聖句である。

ただ問題は、それが土曜日の晩か、日曜日の晩かということである。ユダヤ式に夕から夕までと日を数えたか、またはローマ式に夜中から夜中までと数えたかにかかっている。ニュー・イングリッシュ・バイブルは土曜日の晩と訳している。しかし、これは問題の誤訳であろう。多くの学者は日曜日の夕方と考えている。(PP.60、61)

16. ヨハネ29:19以下に記されたイースター・サンデー(復活の日の日曜日)にキリストは復活後の弟子たちとの晚餐を持たれた。使20:7はこれが毎週ひき続いて行われていたことを示しているのではないか。(PP.65、66)

17. I コリント16章の週の第1日に各自家に献金を準備するよとのパウロの勧告は、1世紀の中頃から、クリスチャンは週の第1日にパンを裂き、復活の主を祝っていたこと、その為献金をしていたことを示すものと解釈する外はない。(P.68)
- 各自の家の集会で、聖餐が持たれたことは当時のクリスチャンにとって最も重要な事であったに違いない。(PP.68、69)
18. ユスティヌスは(2世紀の半ば頃)クリスチャンは日曜日の午前中に集まっていたと記しているが、どうして夕方から朝の集会にかわったのであろうか。プリニーのトラヤヌス帝への書翰(109年)では総督はビテニア州のクリスチャンに夕方の集会を禁じたと記しているから、こんな理由で夕から朝に集会の時間がかわったのではないか。(P.69)
19. 主が日曜日に復活された。そして日曜日の夕べに弟子たちと食を共にされた。その夕べの集会が日曜日の昼になって、今日までつづいて行われてきている。(PP.74、75)
20. クリスチャンはキリストにあって安息に入ったので、ユダヤの第7日目安息日は廃止された。クリスチャンはもはや第7日目を守る必要はなくなり、週の第1日を記念とするようになった。しかし、救済史における永遠のしるしとして7日目毎の週期は守るのである。(P.82)
21. ユダヤ人は古い世界の創造を祝う第7日目安息日を守った。しかし、キリストにあって造られる新しい世界の創造を祝うためクリスチャンが主の日(日曜日)を守るのは当然である。(P.86)
22. 日曜日を守ることは神の十戒に違反すると言う者があるが、オスカー・クルマンはこれに対して次のように答える。「クリスチャンの日曜日は、キリストの復活を記念する主の日である。神の安息に入る安息日はキリストの復活によって成就したから(ヨハネ5:17参照)。このような考えは、全て旧約の条項を完全に成就させたキリストの救済の定めにもとるものである」(安息日と日曜日、P131)。(P.87)
23. 中世の天使博士と言われたトマス・アキナス(1224-1274) はスンマ・テオロジカの中で次の如く語った。週の7日制は天の法則である。第7日目聖日のモーセの律法は廃止されたが、毎週のサイクルは聖なるものとして残っている。教会といえどもこの週期を排する権限はない。教会はその命令によって第7日から第1日に聖日をかえた。この日(日曜日)には全ての者は働きを休まねばならない。

ユダヤ人が第7日目に忠実に集会を持ったように、全ての人は日曜日のミサに出席しなくてはならない。(P.92)

24. アルフレッド・デ・クエルウエンはイスラエルの安息日は神との契約のしるしであった。神がエジプトの奴隷制からその民を救ったしるしであった。この日は大いなる喜びの日であった。同様に、主の復活の日曜日は新約のしるしであり、クリスチャンにとっては大いなる喜びの日である。キリストにある神の救いをあらわしている。このふたつの日は人間が定めた日ではない。共に神の救いに基をおいている。(P.93)
25. 復活の記念日である日曜日は、ひとまわりの始めの日に当って、前週の終りと新しい週の始まりを区ぎり、我々が人間としての自分の業に依存することなく、全ての心づかいから我々を解放し、我々の所有物、時に金銭の欲より救い、父なる神と主イエスを礼拝する事の出きる日である。

勿論、日を守ることに我々の救いがあるわけではないが、クリスチャンの祝祭日である日曜日は、よきおとずれのしるしであり、我々に救いをもたらす日なのである。宗教改革以来、日曜日に対する信仰告白こそ、極めて重要なものである。聖礼典であると共に、神の言につかえることである。この日の祝福と休息は神の言と聖礼典にあらわれている事に対する感謝の表示である。(P.95)

26. デ・クエルウエンは I コリント 16:2 の聖句を引用して教会は使徒時代から日曜日に集まって礼拝をし、貧しい兄弟たちに愛の業を行った。献金は礼拝と切り離すことの出きない事である。キリストのみ体である教会に集まって同じ体の一部分である信徒たちが交り、再臨の主の出現を待ち望む時、自由を意味する日曜日こそ最もふさわしい日なのである。日曜日は全世界に、特に異邦人の世界に、永遠の御国は決して人間の力で建設出きるものではないことを証明するものであると語っている。(P.97)
27. カール・バルト(1886-1968)はヘブル人への手紙の著者と共に安息日の休息は人類救済史上の最後の永遠的救済をさしていると言う。旧約の「主の日」(終末論的)、新約の「主の日」は共に関連した意味をもっている。初代のクリスチャンがキリストの誕生日でなく、また死の日でなく、復活日である日曜日を選んだことは、休息の日の約束が成就したことを意味するからである。自分の選んだ休息でなく、神が与え給う休息に新しい人は自分の救済のうちに新しい喜びを見出す。(PP.98, 99)

28. 西洋中世のローマ教会は無数の祭日、祝日を設けた。プロテスタントの改革者たちはこれらの日と共に主の日をも排除するか、無視する態度をとった。キリストにあって自由を与えられた者には、これらの日を祭る必要はないと叫んだ。(PP.101、102)
29. カルバン(1509-1564)は第4条の戒は礼典的なものではない。ただ第7日目を守ることが礼典的である。7つのうちの1つを聖別することが道德律の言わんとする所である。(アルベルトス・マグナス、トマス・アキナス等も同じ意見)と説いた。(P.103)
30. ケーカー教徒の立場を弁証するバークレー(1648-1690) は次のように語る。「我々はユダヤ人の安息日を今も続けて守るべきだと言う程迷信的ではない。また週の第1日が本当の守るべき日であるとも信じない。またカルバンのように本当のクリスチャンの安息日を精神的に守ればよいとも考えない。第4条の戒、または他の戒のうちに週の第1日や他の日を守るように命じている道德の律令を見出さないものである」と。(P.103)
31. ルター派及びオランダ改革派は信条には「安息日は福音によって廃されたので、どの日も守る必要はなし、しかし、人々が集って共に礼拝する日が必要であるからある一つの日(日曜日)が定められた」と明記されている。最もカトリック色の強いスイス信仰告白、すなわち第二スイス信仰告白にも同様の事が言われている。(P.104)
32. アメリカのジョナサン・エドワーズ(1703-1758) は全ての事に時あり(伝道の書 3:1)と言われているように、クリスチャン・異教徒を問わず、人間はある時に宗教的行事を行う本能を有する。フッカー(1554-1600) は啓示によらず、人間の理性こそが、主の日を守る基となったと言う。(P.104)
33. SDAはプロテスタントの宗教改革は不徹底であったと言う。中世の腐敗した教会の諸制度、諸信条と共に偽りの安息日である日曜日も、化体説、煉獄、マリヤ礼拝等と共に破棄すべきであったと、そして日曜日はもともと異教徒の太陽の日であったものを背教クリスチャンが教会に導入したのだと言う。何たる冷酷な批判であろう。(PP.113、114)

## 第10章 ジェウエット博士の「主の日」神学

1. ユスティヌスが紀元後150年頃にローマ皇帝に書いた書簡の中で始めてクリスチャンとして「日曜日」という言葉を使った、すなわち、その弁証論1(67、37頁)でその日にクリスチャンが礼拝をするというのである。(P.114)
2. 日曜日はすなわち太陽の日である。キリストは週の第1日に光を創造した。キリストは日没の日のように墓にくだり、日曜日に世の光として甦った。キリスト自身世の光として、天よりの栄光をもって来られる。キリストは日曜日に再臨するとの伝説があって、クリスチャンは日曜日に東方に向かって、立ったまま礼拝した。(第7日目安息日の礼拝の時にはひざまづいた)日曜日、太陽の日がクリスチャンの言葉となったのは4世紀からの事である。(P.115)
3. 英国清教徒(English Puritans)の考えは長老派、組合派、メソジスト、バプテスト、その他の小さな教派に支持され、改革派や第7日目安息日派と違って、次の見解を有した。①十戒は不滅であって、その7日の週期と7日に1日の聖日は聖なるものである。②天地創造からキリストの復活まではユダヤ人的第7日目安息日が正しい。③キリストの復活後は週の第1日に変更され、その日は「主の日」と称せられて、クリスチャンの安息日となり、世の終りまで続く。(PP.115、116)
4. 出エジプト記20の十戒は道德律、出エジプト記34の十戒は礼典律であろうか。道德律と礼典律の相違は旧約の中にある場所によって定まるのではなく、キリストの初臨と聖霊の降臨という、全く新しい事件によってきまるのではなからうか。すなわち、新約の言によって規定されるべきものである。シナイの言は予備的なもの、イエスや使徒の言は本格的、最終的なものと思ふべきである。(PP.118、119)
5. クルマン(1902～1999)の考えでは事柄とその解釈、新しい事柄と再解釈と言う方式が用いられている。これを安息日問題に適用すると、①始めの事件は、イスラエルのエジプト脱出(出エジプト記12章以下)、②その事柄に対する解釈は神がエジプトから民を救出し、約束の地カナンにおいて休息を与える、そのしるしとして毎週の安息日が与えられた。(申命記5:14) ③新しい事件はイエスの誕生、生涯、死、復活、昇天である。④新しい解釈は、イエスはヨシヤが約束の地で



その民に与えることが出来なかつた罪よりの解放と休息を与えることにある。キリストの復活と聖霊の降下により、主の日は与えられ、新エルサレムでその民が  
いこう日までに及ぶのである。(PP.119、120)

6. 神が天地を6日の間に創造し、7日目に休んだという記録は、文字通り科学的に  
起つた事実ではなく、神学的に解釈すべきである。天地創造の物語は人々が考  
えたように、それを確証するために啓示を受けたわけである。アダムやノアの守  
り方とイザヤやエレミヤ、そして今のクリスチャンが主の日を守るのとは違つた  
やり方だつたと考えるのが正しい。(P.121)
7. 日曜日に労働を休むべきことをはっきりと言つた最初の人物はテルトリアヌス  
(紀元後200年頃)であつた。日曜日にひざまずいて祈らず、サタンの誘惑に負  
けないように労働を休むが、ペンテコステにも同じようにしていると言つてい  
る。(P.124)
8. 紀元後321年3月7日、ローマ皇帝コンスタンティヌスが發布した日曜休業令は  
労働よりの休みを命じた最初の法令であつた。この法令では、農夫以外の全て  
の人々は「この尊ぶべき太陽の日」に仕事を休むように命じられている。

従来これはコンスタンティヌス大帝がキリスト教を信奉した皇帝として、その  
熱心のあまり、このような法令を出したものと考えられていた。ユウセビウスの言  
うように兵士は徳の高い皇帝を尊び、救い主キリストを信じ、教会に出席して神  
に祈りを捧げたのは事実であるが、大帝の動機が純粋なキリスト信仰に根ざし  
ていたかという、はなはだ怪しい面もある。

まずその法令で農夫を除外したことは、旧約の神の命と全く違つている。この  
法令が出た時、ローマ帝国内の大部分のクリスチャンはコンスタンティヌスの敵  
であるリキニウスの領土に住んでいた。彼らにとってこのような法令は大きな  
魅力であつたに違いない。

また当時、ローマ帝国内に流行していた太陽教ともいふべきミトラ教徒は太  
陽の日という法令の言に、好感を持ったことは確かである。皇帝は全ての異教の  
大僧正であつた。ミトラ教徒は4世紀頃、週の第一日に太陽礼拝を行つていた。

以上の事を結合すると、コンスタンティヌス大帝はこの法令によってクリスチ  
ャンとミトラ教徒双方を喜ばせる効果があつたので、これは極めて政治的な布  
石だと言わざるを得ない。

この時からユダヤ人の安息日観とクリスチャンの「主の日」観が同化し始めたのである。第5世紀になると安息日の休みは殆んど完全にクリスチャンの休みに移行してしまった。

「主の日」と「主の聖餐」とは聖なるもの、主に属するもの、他の日、他のものと異った聖別されたものと言う観念が昔から存在した。日曜日に主の聖餐が行われてきた。俗的な労働を休む日となってきた。(PP.124-127)

9. 中世に入ると、主の日の話は一層神話化し、日曜日に三重の栄光があると考えだした。①光が日曜日に輝き出した創造の日。②救い主キリストが死の墓より甦った。③勝利の主から聖霊がこの日に降臨した。(P.128)
10. オリゲネス(185-254)は昔マナが日曜日から降り始め、土曜日には降らなかった。これは天よりの恵みが日曜日に下って、土曜日には下らなかったから、もう旧約時代に日曜日は土曜日よりもすぐれた日であったと言った。(P.128)
11. ウィリアム・トマスは17の日曜日の特徴をあげたが、これらは8世紀から10世紀頃の人々に受入れられた。①光の創造された日、②物質の造られた日、③天使も造られた(この日に)、④紅海を分ける奇跡の日、⑤マナが降り始めた日、⑥イエスの受肉宣告の日、⑦イエスの誕生の日、⑧イエスの受浸の日、⑨カナの婚宴の日、⑩5000人を養う奇跡の日、⑪エルサレム入城の日、⑫復活の日、⑬世界伝道に使徒たちを任命した日、⑭ペンテコステ聖霊降下の日、⑮パトモスの幻の日、⑯キリスト再臨の日、⑰世の終りに世界を再創造される日……(P.129)
12. 紀元400年より早く、パウロの黙示録という偽書があるが、これによると、地獄の刑罰も日曜日には休むと書いてある。(P.129)
13. 9世紀のアイルランドの伝説では、ユダ(イスカリオテ)は日曜日には上の世界を訪ねることを許された。また日曜日には地獄からその日だけ解放された魂が鳥の形をして空をとんでいたと言われた。(P.129)
14. 紀元788年頃、天からエルサレムに落ちてきた書翰があった。イエスの名が記されており、日曜日には一切の労働を休んで、昔のユダヤ人の戒のように、これを聖とせよと命じてあったと言う。その結果、日曜日は主の復活の日として永遠の昔から定められていた。何故なら日曜日は他のどの日よりもすぐれているからであったと。(P.129)
15. 6世紀頃から10世紀頃まで、ヨーロッパ、とくにアイルランドやイギリスでは異教



の神話的要素が日曜日信仰に導入された。この日にしてはならない事がきびしく守られるようになった。そして復活の喜ばしい日という土台が薄れてきた。次の事柄が禁止目録に記された。①字を書かない、②旅に出発しない、③売らない、④契約しない、⑤裁判沙汰をおこさない、人を訴えない、⑥裁判をしない、⑦床屋に行かない、⑧ヒゲをそらない、⑨顔などを洗わない、⑩入浴しない、⑪悪事を働かない、⑫目的なしに走りまわらない、⑬穀物をひかない、⑭、パンを焼かない、⑮液体をかきまぜない、⑯材木を割らない、⑰掃除をしない、⑱牛馬や人間にものを運搬させない、⑲奴隷を働かせない、⑳定められた場所から外に出ない(正当な理由がある者はこの限りではない)。(PP.130、131)

コンスタンティヌス大帝の日曜休業令以来、人々は日曜日に何もせず怠惰に過すようになった。教会は異端的な行事を人々に強要したり、上記のような行事を禁じた。6世紀頃には日曜日の遵守に関する政治的規正が命じられた。違反者には罰則が適用された。538年のオルレ안의第3回会議では日曜日を昔の土曜日安息日のようにする上記の傾向に抗争する事項が決議された。しかし、その時はもうすでに施すすべはなかった。306年のスペインのエルビラの会議でクリスチャンは必ず日曜日には教会に出席するべしとの教会法が定められた。そして永久的教会法の土台となったが、日曜日に固く禁止されたものは①労働、②裁判、③公共的集会、④旅行、⑤売買、⑥狩猟、等であった。(PP.131、132)

## 第11章 政治と日曜日休業

1. 7世紀中頃ヨーロッパ西部地方において、日曜日休業を強制する命令が王たちによって出された。自由人が三度違反して日曜日に働きをした場合、その財産は没収され奴隷とされた。また奴隷は肉体的の苦痛を強要され、それでも従わない時には右の手を切断された。694年スペインのビシゴスの王は日曜日休業をユダヤ人に命じ、クリスチャンの休日を尊ぶように強制した。ユダヤ人が働いているのを見つかりと頭髪をそられ、100度の鞭打ちの刑に処せられた。697年イギリスのケント国王は奴隷を働かせた主人にその奴隷を解放し、かつ多額の罰金を払うことを命じた。(PP.132、133)
2. 13世紀から16世紀のヨーロッパにおいては厳しい日曜日休業令がクリスチャンにかせられた。単に忠実なクリスチャンに日曜日を聖く守ることを強制するばかりでなく、ユダヤ人やマホメット教徒にも日曜日に働くことが厳しく罰せられた。これは国家と教会の二つの権力によって課せられたものである。教会員で違反した者は除名された。聖トマスによれば、たとえ異教徒が回心しなくても、主の日を汚すことは許されるべきではないとの事であった。(P.133)
3. 12世紀頃になると、迷信が流行し、必要上日曜日を犯して例外として許されることもあった。例えば、漁夫は魚のとれる時刻を利用してとつてもよいが、近くの教会に多額の献金をすることが求められた。ペナフートの聖レーモンドの規定(1275年頃)は中世日曜日の守り方の規準とみなされた。夜中から夜中で終る日曜日の時間をきめたのも彼であった。また正義の戦争とか、聖堂建築、貧者への奉仕、教職の手伝いとかの場合、日曜日に働いてもよいとの例外が認められた。(P.133)
4. 16世紀になると日曜日の守り方は楽になった。時代の流れと人間の考えの変化のせいであろう。病人用の薬は日曜日にも買ってよいとされ、原稿の写本を作成すること、特に聖典のそれは認められた。また修道士が修道院の中で像を彫むことはさしつかえないと規定された。またシシュウもその職人以外は許された。ミサに出れば、狩猟も漁獵もよいと認められた。また日曜日の大部分の時間を聖なる黙想に過せば、僅かな違反は黙許された。貧乏人には例外をみとめる大きな理由ありとされたし、また多額の物質や献金を教会に献げれば、うるさい事は言

われなくなった。(P.134)

5. 教会出席強制令が306年エルヴィラ会議で出されたが、三度続けて教会を欠席すれば除名すると脅迫した。しかし、6世紀までは一般的ではなかったが、その頃から教会も国家も日曜日に教会へ出席することを強制し、違反者には罰則が適用された。(P.134)
6. 755年ピピンは当時流行していた日曜日聖守派を奨励して、日曜日休業令を發布した。また789年にはシャルルマーニュ王もまた、フランス国内の全民を対象にして日曜日休業を強制した。1016年にはハンガリー王聖ステファンは全国民が日曜日に教会に出席することを命じた。これに違反した者は頭髪をそられた。12、13世紀のフランスでは日曜日のミサ出席は強制的であったが、これはアルビ派弾圧の手でもあった。(P.135)
7. 16世紀には日曜日の守り方もかなり寛容になった。教会に出て司祭の話をきかなくても、ミサを受ければそれでよいとか、日曜日の集会の3分の1出れば一応出席と認められるとか、ミサに関係した事に従事しておれば、ミサに出席したものとされるとか、ミサの説教のうち聖書朗読の時欠席しても、後でその所を読めばよいとか、たとえ、会堂の中にいなくても忠実な信徒と同じ思いで、同じ行動をすればよいだろう等と考えられるようになった。(P.135)
8. 病人で動けない者にはミサの欠席がみとめられた。また教会からの距離ということがうるさく論じられた。(病状と共に) 3里以上もあれば、欠席してもよいとされた。しかし、山岳地方の坂道と、平原の平らな道とでは距離に違いがあった。天候の関係、交通機関の有無も考慮に入れられた。日曜日夕礼拝の出席は奨励されたが、絶対的に命令されたことはなかった。(P.136)
9. プロテスタント側では、いわゆる「主の日の低神学」(low theology of the Lord's Day)というものが主張された。これはかなり寛容なものであったが、カルバン(スイスの)の厳しい日曜日聖守によって修正された。しかし、日曜日の守り方は、時代の自由思想が反映して、イギリスでは日曜日は他のどの日よりも神の意志に反する日だとの大衆の批判をまきおこした。反カトリック主義で通したエリザベスの時代には、カトリックの厳しい労働禁止の反動として、日曜日に労働することも命じられた。エリザベス女王は、日曜日は他の休日(祭日、祝日)と同様、禁酒節制を禁じた。また観劇や狩猟、スポーツ等も許可したようである。(P.136)
10. 一方ピューリタン主義(清教徒)が盛んになり、「クリスチャンの安息日」という名称で週の第1日と呼び、日曜日という名は異教くさいとして嫌った。主の日を守

ることが、十戒の第4条の安息日を守ることでであると主張したのがピューリタンであった。(PPI 36、137)

11. イギリスの王政復古(1660)の直前、イギリス・ピューリタン日曜休業令が1656年9月17日に制定された。これは13頁程のものであるが、それ以前の休業令を徹底的に修正、拡大したものであったが、結局何ら効果的に履行されずに埋没してしまった。(P.137)
12. 王政復古と共に、ピューリタンの勢力は衰え、日曜日の守り方はイギリスに於いては非常にルーズになったが、やがてメソジストの改革と共に再び人の注目をひくに至った。ウェスレーたちは主の日を厳格に守った。(P.137)
13. スコットランドにおける1658年6月6日の文書によれば、テリオチュー県のアレキサンダ・ケアニーという農夫は嵐の日曜日、一匹の羊を農場から自宅に運んできた事で裁判され、二度と繰り返さないように警告されたという事実が伝えられている。スコットランドにおけるこの様な厳しさは、イギリス・ピューリタンの影響である。(P.138)
14. スコットランドの厳しい安息日(日曜日)の守り方は今でもあまり昔とかわっていない。プリンストン神学校校長ジョン・マッケイ博士(スコットランド出身)はある一婦人は卵を鼠から守るために日曜日に籠に入れたが、月曜日になるまで家の中に持ち込まなかったと言っている。またこの婦人の家族の一員がある人からの手紙をこつづかつて7里の道を歩き、日曜日に持ってきたので、彼女はそれを日曜日に運んできたとの理由で断乎受取りを拒否した。その手紙はもとの人にかえされたが、その婦人は休みののち、自分で歩いて行って受取ったという。また日曜日に車代を払うことを拒んだ一牧師は、母親が遠方から日曜日に汽車に乗って来たというので、その子供に洗礼を施すことを拒絶したとの事である。(母親は汽車の外に方法は無かった) (P.138)
15. いわゆる巡礼父祖(1620年に渡米)によって新大陸アメリカに持ち込まれた日曜日休業令はブルーローズ(青色律法)と呼ばれた。(当時コネチカットの法律は青色のカバーに入れて製本されたからこの名がついた。)サムエル・A・ピーターズ牧師は「日曜日には母親が子供にキスをすることさえ許されない」と書いている。確かに初期アメリカ植民地時代には日曜日は、喜ばしい福音よりも、戦々恐々とした律法にふれることをおそれる日曜日という感であったらしい。(PP.138、139)

16. 1667年、ボストンの大審院は一人が近隣の十家族の中に日曜日安息日違反者や悪質飲酒者の有無を調べるため警察官の権限を与えた。安息日にもものを運んだり、大きな音をたてたりした者は逮捕され、籠に入れられて、市場で見せ物にされた。その人物の裁判が終り、刑がきまるまで釈放されなかったとの事である。(P.139)
17. マサチューセッツ州の法律はクェーカー派の集会を禁止した。特に日曜日に持たれる同派の集りには官憲が目をひからせた。戸が開かれない時は、こわして入り、クェーカー教徒を逮捕した。1679年には日曜日違反は一層厳しい取りしらべを受けた。土曜日の夕刻になると、ボストン市の入口には警察が立って、理由のない人間や乗物をストップした。子供や下僕ら、遺族や友人等が歩きまわるといので、葬式は日曜日にきびしく禁じられた。1741年には、日曜日に道路や田畑をうろつく人間には1回目注意を受けるとき20シリングの罰金を払わねばならなかった。(P.139)
18. コネチカットではもっとひどかった。日曜日の夜盗は体刑に処せられた。始めは耳の一つをそがれ、二回目にはもう一つの耳、三回目はもう切り落す耳がないので、死刑となった。悪いと知りつつ、あえて神の戒を犯す者は、人々に対するみせしめとして死刑にされた。(PP.139、140)
19. 安息日(日曜日)の神聖を汚したかどで死刑にされた者は無かったらしいが、ピューリタンの法律で女、子供、老人、若者の区別はなく、罰金刑、投獄、足かせ、鞭打ち刑に処せられた者の数は甚だ多い。しかし、ピューリタンたちは、1755年のインディアン戦争や、天災地変の起ったことを自分たちが神の戒を破り、子女の教育をおろそかにしたために与えられた神からの警告・天罰であると解釈した。こうして日曜日を汚す者に対する罰則は一層きびしくなった。(P.140)
20. ブルー・ローズの実施にも拘らず一向に犯罪は減らず、むしろピューリタンのパリサイ化(律法主義)が露骨的になったことを示している。しかし、ここで注目すべき事は、この厳格な日曜日に関する律法は決してピューリタンが発明したものではないという事である。新大陸アメリカで最初に施行された安息日法は1617年英国国教会が権限を有していたバージニア州においてである。これは巡礼始祖のアメリカに上陸する3年前のことである。バージニアの住民で理由無く教会に出席しない者はタバコ2ポンド分の罰金に処せられた。(PP.140、141)
21. 自由の存在したロード・アイランドでは、教会出席は強制されなかったが、日曜日にしてはならないことは明らかに公示されていた。クェーカーの州ペンシルバニアにおいてさえも、日曜日に労働するものは20シリングの罰金刑に処せられ

た。アメリカの独立まで、植民地に於ける日曜日休業令はピューリタンによって作られたものではなく、1676年において英国王と議会在が作ったものに他ならない。全国民の日曜日における教会出席、また日曜日に全ての人が労働や就業によってその日を汚さない事。またあらゆる商品の販売行為の禁止等を規定したものであった。(P.141)



## 第12章 最近の日曜休業令

1. 今まで教会や信仰が中心になって進められてきた日曜日聖守運動が、クリスチャン信仰に関係ない、一般人による社会的文化運動として推進されるようになった。こうなるとは主の日の意味も何も忘れられてしまって、まるで元も子もなくなってしまう。この極端な例は、フランス革命やロシア革命等に見られる。フランス革命においては1週7日制を廃して10日としたが、結局人々はそうした人造の週制にあき、短期間の後に10日1週制は破棄され忘れられてしまった。(PP.141、142)
2. 宗教的な日曜日が俗化して社会的、文化的の休日に変ってきた過程はヨーロッパやアメリカにおいて明らかにみられる。中世ヨーロッパでは安息日の戒めは教会法として、また国家的律法として強要された。神政政治はイギリス、スコットランド、アメリカ植民地におけるプロテスタントによって強力に推進された。(P.142)
3. アメリカ植民地ではパプテスト派によるロード・アイランド、クェーカー教徒によるペンシルバニア等に於て政治宗教合体の体形が実施された。日曜日の教会出席は自由にまかされたが、日曜休業は法令によって強制された。これらの植民地の法律は日曜日に平常の労働を禁じた。(P.142)
4. しかし、主の日の観念が教会人の心から薄らぎ、信仰に無関心な労働大衆がひもと自由を獲得するにつれ、クリスチャンでない者にとって日曜日はどうすればよいかという問題が起ってきた。民主主義にあおられた大衆は、観劇やスポーツ、旅行の自由、その他人間としての楽しみの日、休日を求めるに至った。(PP.142、143)
5. 結局、普通の週日と違った自由の日、全く宗教と関係のない快樂の日としての立法が人間本位と自由を確証するために制定された。(P.143)
6. このような情勢の下、もはや中世やピューリタン式安息日の強制は神の国の主旨にもとると考え、教会は序々に俗化した日曜日休日主義に協力するようになる。結局、文化的にしる日曜日休日に人々は教会に出席して信仰を受入れるで



あろうと考えるからである。1791年アメリカ憲法が修正され、宗教に関係した立法が禁じられた時、神政政治的日曜日の強制は終わった。しかし、1961年5月29日最高裁判所が日曜日休業令を裁決したことは、社会的日曜日の公認の日として記念されるべきものであった。(P.143)

7. 過去70年間に150件に及ぶ日曜日休業令が国会に提出されたが、連邦としてはその1件も法律化されていない。しかし1961年の5月にアメリカの3つの州における日曜日休業令を大審院は認めた。日曜日は宗教的礼拝日としての休日とすること、単なる商行為、雇用上の休みの日にすることの間には大きな相違がある。宗教的礼拝日としてははっきり違憲であるが、会社や団体が全住民の総意としてある日に仕事を休むことは合憲であるとした。こうした決定は教会にとっても有益であり、神の祝福が与えられるものとしてキリスト教会の支持を受けているのが現状である。(PP.143、144)
8. 日曜日休業といっても、交通機関や新聞、劇場、スポーツ等には休みはない。これに対し近来、プロテスタントとカトリックが手を組んで、全ての人に休みをと叫んで運動を展開している。(P.144)
9. かつて労働組合が教会と力を合わせて、日曜日休日をかちとるために共同戦線をはったことがあった。しかし機械化が進み、週4日就労等が可能になると、組合はもはや教会との共同活動に興味をもたなくなった。(P.146)
10. アラスカ、ハワイ等の7州を除き全州に日曜日休業令が実施されている。7州のうちでもアラスカ、ハワイは完全に自由であるが、他の5州には多少日曜日休業令の傾向が見られる。例えば、1883年に日曜日休業令を否決したカリフォルニア州において、ボクシングを日曜日にやらせることを禁じているし、ネバダ州では床屋は休業することになっている。(P.151)
11. ブリタニカ大英百科辞典1968年版「日曜日」の項(P.566)にイギリスとアメリカにおける日曜日休業の歴史が記されているので、その要点を紹介することにする。週の第1日である日曜日はキリストの復活の記念日として礼拝日として聖別された。コンスタンチン大帝の時以来、多くのキリスト教国家は教会の教えを労働(農業は例外)禁止の日曜日休業令を発令してこれを補強した。(P.566)
12. イギリスにおいては7世紀以来、ある種の労働や娯楽を禁ずることがあったが、本格的な日曜日休業令はエドワード6世(1547-1553)の時に出された統一令(1551)をもって始めとする。1558-59に出された法令によると故なくして日曜日に教会へ行かなかった者は12ペニーの罰金に処せられた。この法令は1846年

迄正式に廃止されなかった。英国の法律では今でも聖公会の会員は日曜日の聖なる礼拝に出席する義務を有しているが、実際には長年強制はされていない。

1677年の日曜日遵守令によって商人、職人、労働者は日常の仕事を禁止された。その後時代や習慣の相違による不便さを考慮して1677年の法令は何度も修正された。例えば、日曜日の朝9時以前と夕4時以後の時間には牛乳を売買してもよいことになったし、飲食店や魚のテンプラ屋で食物を売ってもよろしいと認められた。1871年の法令によって日曜日の売買に関する主の日の法令は実際は骨抜きになってしまい、1677年の法令に対する違反者の処刑もむづかしくなった。1901年の工場仕事場法令の結果、工場や仕事場で日曜日に女子青少年を働かせることが禁止された。1912-22年に布告された店舗令によって、その頃になっても1677年の法令が一般に適用されていたことがわかる。ユダヤ教の信者は次の条件の下で日曜日に仕事をするのが許可された。①土曜日に休んでいる。②地方庁にその旨届け出していること。③その店にその旨はり出していること。認可令によれば日曜日における酒類の販売は5時間以内に限られた。日曜日になされる釣については、釣り竿と糸をもって鮭をつる以外はよろしいとされた。(1861年のサケ釣りに関する法令)1831年に出された狩猟令では兎を除き、日曜日にはいかなる動物を捕え、また殺すことも許されなかった。1781年の日曜日遵守令には日曜日の娯楽や行為について規則が定められたが、金銭をとっての演芸は禁止され、1932年の日曜日演芸令が出るまで修正されなかった。この時許可済の映画上映、または音楽や娯楽が催される場所、展覧会、画廊、動、植物園、水族館、または講演や討論会のもたれる場所に関し、1781年の法令の適用を除外した。

非常時には日曜日にも国会は開催されることはあったが、普通の時には国会が公共の集会は日曜日にふさわしくないと考えられており、土曜日徹夜の集会でも日曜日の早朝には散会した。国事犯、重罪、治安妨害等以外は令状の執行も逮捕も行われなかった。しかし裁判所や警察は必要ならば逮捕状または捜索状を出すことができた。普通の法律による場合、有効な日曜日の契約書も、1677年の日曜日労働令やその他同様な法令によって無効を宣言されたものが多くあった。日曜日に振出された小切手は振出人の責任を問われた。日曜日に両替を行う事もうるさく言われた。両替法に詳しく規定されていた。令状も日曜日には作ってもらえなかった。裁判所の令状の日付でも、日曜日ははさまらない様に週日に終るように書かれた。

スコットランドとイングランドでは大体同じような法令と習慣が存在したが、

イギリスの場合、習慣を尊重して、特殊のケースだけが特殊の環境下のみ、許容された。

13. アメリカ大陸(北)における日曜休業令は、植民地時代には極めて一般的で、バージニアにおいては1629年にこうした法令が布告された。全ての植民地政府は何らかの日曜休業令を施行して、日曜日における行動を抑制した。普通、事務、職業、労働、商取引、職業的業務(慈善的また、必要な仕事を除く)、娯楽、スポーツ(他の日ならば全く無害なもの)を規制した。これらの禁令に反対するものもしばしばあったが、宗教の自由を保障する憲法に違反するという理由で、いつも不成功に終わった。1858年にカリフォルニア最高裁判所は、ある特定の信仰者が聖日と称える日曜日を遵守する法律は違憲であると決定したが、3年後には廃止されてしまった。(1861年)それ以来、日曜日法令はいつでも万場一致で支持されてきた。始めは宗教的な理由によったが、次第に、法律によって労働を週毎に1日休みを与えることは必要有益であるとの社会的理由によって支持されてきた。

理論的には日曜日遵守令違反は次のような4つの罰則が与えられた。①法律にうたわれている刑事犯としての服役。②日曜日に履行されるべき契約の不実施。③民法上の不能力者とする。④禁じられた行為によって他人に損害を与えた場合、その損害を賠償しなくてはならない(日曜日でなければ無罪であるもの)。しかし、この様な法令の罰則の履行は非常にルーズに行われた。かつて、日曜日に旅行中、または働きに従事していて負傷した人物は天罰を受けた者として治療をしなかった2、3の植民地政府があったそうだが、それらも後には廃された。バーモント州の最高裁判所では、日曜日にその法令に違反して狩猟に従事し、あやまって同僚を負傷させた者を民法違反として罰している。しかし他の裁判所の判決は反対であった。あるいくつかの州では日曜日に契約を結んだり、また実施したりすることを無効とし、たとえ刑法違反はなくても無効であると宣言している。

20世紀の中頃より日曜日に関する法令は多くの州や都市でその厳しさを失い、ある行為は寛容をもって許されている。昔の表面的ピューリタンの解釈と異なった考えのもとに自由主義的に支持されてきている。(PP.566、567)

## 第 13 章 日曜日派の反論総括

第 3 章から第 10 章迄にわたった日曜日こそ、新約下におけるクリスチャンの守るべき正しい安息日であると主張する代表的論拠について詳細にわたって検討してきた。第 14 章から土曜日こそ正当な安息日であると信ずる人々のよって立つ所を学ぶ前に、今までの論点の要旨をまとめておくことが有意義であると思い、本章で総括することとする。

### 律法に関する反論

---

---

1. 律法はユダヤ人の為に与えられた。(キャンライト)
2. 十字架で廃されたから、クリスチャンは守らなくてもよい。(キャンライト)
3. 律法は死に、恵みによって生きる時代に入ったから、クリスチャンは律法から解放された。(キャンライト)
4. 律法の文字はクリスチャンを拘束しない。(キャンライト)
5. クリスチャンは十戒よりもっとすぐれたものをもっている。(キャンライト)
6. 十戒はモーセの礼典律の一部、その代表的なものである。(キャンライト)
7. イエスは弟子たちに新しい律法を与えた。我々はその新しい律法を守るべきである。(キャンライト)
8. キリストは信ずる者を義とし、律法の終りとなった。(キャンライト)
9. 使徒たちは律法は死んだと言った。(キャンライト)
10. 道徳律と礼典律という2種類の律法はない。(キャンライト)
11. 律法はモーセの時代に与えられた。(キャンライト)

12. 十戒の中にある部分は礼典的である。(バンバーレン)
13. SDAは旧約時代のように厳格に律法を守っていない。また守ることはできない。(バンバーレン)
14. SDAは十戒の第4条を他の9条よりも重視している。(ホークマ)
15. 出エジプト記34:14-28 は礼典律、申命記5:12—15は道徳律と言われている。(ジェウエット)
16. パウロは異邦人のクリスチャンは安息日を守る必要はないと宣言した。(ジェウエット)
17. ユダヤ人クリスチャンは第7日目を4世紀頃まで守っていたが、コンスタンチヌス帝の日曜休業令以来序々におとろえてきた。(ジェウエット)
18. 始めクリスチャンは第7日目をユダヤ式ではなく、クリスチャン式に自由のもとので、守っていた。(ジェウエット)
19. キリストを拒絶したユダヤ人と共に礼拝出きず、日曜日に独自の礼拝をした。(ジェウエット)

## ユダヤ人の安息日

---

---

1. 十戒の9ヶ条は新約ではっきり教えられているが、第4条については一カ所もない。(キャンライト)
2. 昔の安息日は今ではどの日かわからない、日が失われたからである。(キャンライト)
3. いろいろの暦の変化のため、今は正確な日を確認することはできない。(アービン)
4. 律法の第4条は明らかに礼典律である。(キャンライト)
5. ユダヤ人の安息日はすたるべき影であって、本体ではない。(バンバーレン)

6. 第4条の戒は天地創造の記念日であって、未来を示す影ではないとSDAは言うが、ヘブル書4章によると、来たるべき天国に於ける安息をさしていると思われる。(ホーケマ)
7. 第4条は不変の要素ではない。旧約時代は週の終りに安息日があったように、キリストの救いを未来に望んだが、新約時代はまずキリストに救われて後、働きが続くのである。(ホーケマ)
8. 安息日の始まりは、モーセによるイスラエル国家の始まりの時と同じであるとは学者たちの一致した意見である。(ジェウエット)

## 日曜日

---

---

1. 復活後主の使徒たちにこの日を与えた。しかし、その確証はない。(キャンライト)
2. 日曜日はキリストの復活を祝う日である。(キャンライト)
3. 主の日は日曜日であると聖書は教えていると初代のクリスチャンは信じた。(キャンライト)
4. 教会は復活の記念日として日曜日を守ったが、そんなことを命じている律法はない。(キャンライト)
5. 日曜日の遵守は東方のギリシャ教会から始ったもので、西方のローマではない。(キャンライト)
6. 140年頃までに全てのクリスチャンが日曜日を守っていた事が数多くの文書によって証明されている。(キャンライト)
7. 復活の日、またその1週間後、主は弟子と会合された。またその1週間後、トマスと共に弟子の全員にあらわれた。トロアスの集会、コリント教会における献金の聖別等のことが皆日曜日に起った。この他、聖霊の降下やヨハネがパトモス島で幻を与えられたのもまた日曜日であった。これらは皆日曜日が特殊の日であることを示している。(キャンライト)
8. 古代のクリスチャンは土、日の両日を守っていた。そのうち土曜日を守ったのは

少数派で、あった。(ジェウエット)

9. 日曜日遵守はイースター(復活祭)から始まった。(ジェウエット)
10. 何時、何処で、どう言う事件によって日曜日が始まったかは聖書記者も教父も確言していない。(ジェウエット)
11. パウロ、バルナバの異邦人伝道旅行以前に、教会が日曜日を守ったという、そのものずばりの記録はない。(ジェウエット)
12. しかし、日曜日をパウロが宣伝しなかったことはエルサレム会議で問題にならなかった事からおして間違いないことである。(ジェウエット)
13. 日曜日、太陽の日がクリスチャンの言葉となったのは4世紀のことである。(ジェウエット)

## 主の日

---

---

1. 主の日は日曜日である。(キャンライト)
2. クリスチャンは命令されたから守っているのではない。自分たちの意志で主の御復活を記念しているのである。(バンバーレン)
3. SDAは主の日はローマ法王のきめたものと言うが、それ以前に守る人がなかったことを証明するものではない。(バンバーレン)
4. 主の日は初代教会が主にささげた日、旧約のモーセの律法によらず、新約の愛の命令によって捧げた日である。(マルチン)
5. 主の日は第7日目安息日でないことは、聖書も歴史も証明している。(マルチン)
6. 西洋中世に入ると主の日は一層神話化され日曜日には三重の栄光があると考えられてきた。①光が輝き出した創造の日、②救い主キリストの復活の日、③勝利の主から聖霊が降った日。(ジェウエット)



## その他

---

1. アドベンチストの言う獣の印は馬鹿げた話である。(キャンライト)
2. 地球上の神の民は同時に聖日を守ることは不可能である。(キャンライト)
3. 7日に1日という制度が重要なのである。(キャンライト)
4. 全人類は同じ日(日曜日)を一致して守らなくてはならない。(キャンライト)
5. 使徒の時から今まで教会はキリストの甦りを記念して日曜日を守り続けてきた。(キャンライト)
6. 日没から日没までという規定は6ヵ月も太陽が沈まない極地で守ることはできない。(バンバーレン)
7. 旧約の土曜日から新約の日曜日への変化は徐々に、目立たない状態で実現した。(バンバーレン)
8. バルナバ(紀元後100年)とユージェビウス(324)の間、初代教会は始め土、日の両日を守っていた。(バンバーレン)
9. ユダヤ人の安息日にかわって主の日がクリスチャンに与えられた、昔のユダヤ人のように我々は主の日を同じように厳しく守るべきである。(バンバーレン)
10. 旧約時代の1日は夕に始まり、夕に終わった。新約時代は夜半から夜半迄である。復活の朝女たちはこの方法に従った。(バンバーレン)
11. マルコ2:28の聖句は、人の子は安息日の主であると言っているが、この意味はキリストは思うように安息日を変える権限を持っているということである。(バンバーレン)
12. 今は律法の時代でなく、霊の時代である。旧約の安息日は廃され、キリストの復活による新しい安息日に同じ聖別と特権とが移された。(アービン)
13. SDAは使徒たちと全く違った説教をしている。余りにも律法的である。(ホークマ)
14. 安息日を守らなければ救われないと説くSDAは、信仰により、恵みによって救わ

れるという真理に違反している。(ホークマ)

15. 教父たちは割礼と安息日を同一視した。アブラハム以前に割礼はなく、モーセ以前に安息日はなかった。そしてこの両者はキリストにより成就し廃された。(ジェウエット)
16. 神は日曜日だけの神ではない、どの日も聖日として守るべきである。日曜日には教会で礼拝するより、教会の外に出て伝道すべきである。海岸やゴルフ場等に出て行って魂に呼びかけるべきである。(ジェウエット)
17. イエスが自由の名の下で、律法を一切廃したという考えは全く現代的思想である。(ジェウエット)
18. 初め日曜日は安息日としてではなく、週の第1日として言及されていた。(ジェウエット)
19. 1世紀に「主の日」という言葉、2世紀に「8日目」という言葉が用いられた。「日曜日」という異教徒的な言葉は余り歓迎されなかった。バプテスマは日曜日に行われ、割礼は8日目に行われたが、この8日目という言葉はいつしか忘れられてしまった。(ジェウエット)
20. 安息日の代りに主の日を守らせたのはローマ教会の権威によるとの主張を、プロテスタントの改革者たちは拒否した。(ジェウエット)
21. 古代の文書には、週の第1日と主の復活との関連性について余り強調されていない。初代教会においてイースター(復活祭)の物語が読まれたという証拠はない。(ジェウエット)
22. アンブロシューズ(339-397)が始めてイースターを語った。また初代の信徒が日曜日の朝集ったということもはっきりしない。(ジェウエット)
23. ユダヤ人の安息日を今守るという事は迷信に属する。と言って、週の第1日を守るべきだとは思わない。またカルバンのように安息日を精神的に守ればよいとも思わない。(ジェウエット)
24. コンスタンチヌスの法令後、ユダヤ人の安息日観とクリスチャンの「主の日」観が同化し始めた。(ジェウエット)

## 日曜日に関する聖句

---

1. 律法の下にない ローマ6: 1 4、ガラテヤ3:23-25、4:10、21、5:18、ローマ7: 4、6
2. 律法の終り ローマ10: 4
3. 死んだ律法 ローマ7:1-4
4. モーセによって与えられた ネヘミヤ9: 1 3、14
5. 冬または安息日 マタイ24: 2 0
6. 献金をたくわえておく 1コリント16: 2
7. 日曜日にパンをさく 使徒行伝20: 7
8. 来るべきものの影 コロサイ2:16、17
9. 復活1週間後の集会 ヨハネ20:19
10. その次の1週間後の集会 ヨハネ20: 26
11. 復活の朝早く マタイ28: 1
12. 人の子は安息日の主 マルコ2: 28
13. イエスの復活 ヨハネ20:1
14. ペンテコステの聖霊降下 使徒行伝2: 14
15. 福音的説教、3千人改宗 使徒行伝2: 41
16. 父、子、聖霊によるバプテスマ 使徒行伝2: 41
17. トロアス集会 使徒行伝20:7
18. パトモスの幻の日 黙示録1: 10

19. 石に彫りつけた文字の死の務 IIコリント3: 79
20. 消さるべきもの IIコリント3: 11、13
21. 霊の務、義を宣言する務 IIコリント3: 8、9
22. 安息日について批評されるな コロサイ2: 16
23. 十字架でとり消された証書、規定 コロサイ2: 14
24. 先祖も負えられなかつたくびき 使徒行伝15:10
25. 天国でいと小さい者 マタイ5: 19
26. 安息日の休み ヘブル4: 9
27. 日について ローマ14:5、6
28. 十字架の死体、安息日前に下す マルコ15:42
29. 安息日の道のり 使徒行伝1: 12
30. 聖書を会堂で読む 使徒行伝15 : 21、29
31. 麦の穂をつむ マルコ2: 23
32. 安息日に病人をいやす ルカ13 : 10-17、マルコ3:1-6
33. パウロ会堂に出席 使徒行伝9:1-2
34. 日や月や季節や年などを守っている ガラテヤ4: 10
35. 愛は律法を全うする ローマ13:8 -10
36. 毎日パンを裂く 使徒行伝2:46、5:42

## 日曜日に関する歴史的文献

---

1. ディダクセス十二使徒の教訓(70年後) —主の日に互いに集り、パンを裂き、また感謝をささげよ。
2. バルナバ書翰(100年頃)—イエスが死人の中から甦った第8日目を喜んで守っている。
3. イグナティウス(110年頃)—ユダヤ人の律法に従って生活しているならば、我らは恵に浴していない。我らは主が甦った主の日を新しい希望を持って守り生活すべきである。
4. プリニーの書翰(112、トラヤヌス帝にあてたもの)—ある特定の日に夜の明ける前に集まり、イエスを神として賛美歌を歌っていた。
5. 殉教者ユスティヌス(145—150)—日曜日に町や村、国中の人々が集まって、使徒や預言者たちの書を読んでいる。公に日曜日に集まり、創造の第1日、主の復活のその日を祝っている。
6. イレナエウス(178年頃)—主の復活の秘義は主の日以外に祝うべきではない。
7. 使徒信条(2世紀)—主の復活の日、即ち主の日に神の御名とイエス・キリストの恵みに感謝すべきである。
8. バルダイサン(154—200頃)—週の第1日であるクリスチャンの日に我らは集まり、きまった日に断食する。
9. アレキサンドリアのクレメント(194年頃)—ユダヤ人の安息日は労働をする平日と同じであった。
10. テルトルアヌス(200年頃)—日曜日に立って祈り、労働を行わない。
11. キプリアヌス(200—258)—主の日は第1日であり第8日である。
12. オリゲネス(185—254)—昔マナが日曜日に降り、土曜日にふらなかったことは、その時すでに日曜日は土曜日よりもすぐれた日であった事を示す。

13. アレキサンドリアの監督ペテロ(300年頃) —主の日を復活の日として喜んで守っている。
14. ユウセビウス(315年頃) —主の復活の日には断食を終わっており(断食は土曜日に行なった)、主の復活を全国で行なうように指令した。
15. コンスタンティヌス帝(321) —日曜休業令、尊ぶべき太陽の日に全ての者(農夫は例外)は労働を休み……。
16. アンブロシューズ(339–397) —イースターの物語を教会で読んだ。

## 暦の変化

---

1. 1582年ローマ法王グレゴリー13世(1572–1585)は10月5日から14日までを存在しない日とした。また100年毎に三つの閏年を帳消しにした。
2. イギリスでは1752年ジョージ2世(1727–1760)の時、9月3日から13日迄の11日を切り落した。

## 第2編



# 十戒は不変の道德律であって現代のクリスチャンもなお第7日目安息日を天地創造の記念日として守るべきであると主張する者 (特に SDA) の論旨

## 第14章 律法の不変性

神の十戒はユダヤ人の為に与えられたもので、新約時代のクリスチャンはもう律法からは解放されたのであるから、律法を守る必要はないという反対者の主張に対し、SDAは十戒は不変であると強く反論している。神の十戒(モーセの諸法を中心である)は人間の守るべき道德を示したもので聖にして義であり、完全なものである。またこれは決して廃止されるべきものではない(キリストの十字架によって廃止されたのは十字架の血により人類は救われるというキリストの贖罪を予表し、預言した諸礼典、犠牲制度、祝祭日に関するモーセの諸律法である)、と言う事は、決してSDAだけの主張ではない。次にプロテスタントの諸指導者や各派の見解を見てみよう。

### 1. バプテスト教会指針第12条

「神の律法は神の道德的行政の永久かつ不変の原則であることを我々は信じる」



## 2. 長老派の創始者ジョン・カルバンの言葉

「キリストが来られて我々は律法の權威から解放された等と想像してはならない。信仰的な聖なる生活の永遠の原則である。従って神の公義のように不変のものであるに違いない。律法はこれを含み、常に存在し、同じ調和を保つのである」(福音の協和の註解書第1巻P.277、マタイ5:17とルカ16:17のカルバンのコメント)

## 3. メソジスト教会指針1904年P.23

「クリスチャンは誰でも、道徳的であると言われる戒めに従わなくてもよいものはない」(ウエスレー指針及び英国国教会指針も内容は同じである)

## 4. ドワイト・L・ムーデー師(1837－1899)

「ホレブの山でモーセに与えられた神の戒は、人々の前で宣言されたその時と同じく現在でもなお守らなくてはならないものである」(「量られて足りない」P.15)

「無神論者は律法を与えた神を嘲笑し、その呪いから我々を救われた方を拒絶する。しかし神の戒は正しいことを認めないわけにはいかない。レナンは神の戒は全人類に対するもので、各時代を通じて神の戒として存在すると言った」

「もし神がこの世を創造されたとすれば、それを管理する律法が必要である。生命の安全のために良い律法がなくてはならない。太陽の下にある全ての国で、法律を持たない国家は一つもない。さて、この神の戒は高きところから与えられ、その純聖なことは無神論者も懐疑論者も認めざるを得ない」(「量られて足りない」P.11)

## 5. チャールズ・H.スポルジョン師(1834－1892)、有名なバプテスト派説教家

「神の律法は永久的なものである。廃止や修正はあり得ない。人類の罪深い状態に合わせるように調子を落してはならない。主の義なる審判の各条は永久に存在するものである……神は律法を廃棄する意志をもたれないことを示すため、我らの主イエスは全ての律法の命令を御自身の生活に実行された」(1898年ロンドンの説教)

## 6. アダム・クラーク博士(1762－1832)メソジスト聖書註解者

「人間は主の戒によらなければ罪の正しい認識を持つことはできないと思われる……律法は使徒時代のユダヤ人だけにこうした働きをしたばかりでなく、今時の異教徒に対しても同じように必要なのである。道徳律を説きそれを力強く訴える時、本当の悔改めが行われる。ただ福音だけを罪人に説教する者は我が民の娘の傷をほんの少しいやすにすぎない。忠実な牧師の手中にあって、罪人を警告し目覚めさせる偉大な器は律法である。彼は全ての罪人は律法の下にあり、呪いの下にあるが、福音によって提供される望、すなわち避難所にのがれて救われることを示すことができる。この意味で、信ずる者にとってイエス・キリストは義認を行い、律法の終りとなられるのである」(聖書註解、クリティカル・ノート、ローマ7:13 1851年)

#### 7. メソジスト監督シンプソン(1811-1884)

「偉大で厳粛な命令を持つ神の律法ははっきりと示さなくてはならない。大衆はシナイ山のふもとに集められその山頂より永久的で不変の本質をもつ十戒を語られる神の声をきくようにしなければならないのである……

ある者は律法の峻厳さにさからって、耳ざわりのよい事を預言してくれと言うかも知れない。しかし我々は律法を説教しなくてはならない。そうするとき、罪人は神の聖なる律法を犯してきた自分の罪を認識し、自己にふりかかってくる恐るべき運命を悟るのである。律法の次に福音が続かなくてはならない。目ざめた罪人には救主を指し示す。そして違反の傷跡はいかに深くとも、キリストの血はそれを全て洗い去ることができるように教えなければならない。

多くの説教者は好んで福音のみを説く、父なる神についてやさしく、美しく語る、結構なことである。単に結構どころか、それは必要な事である。しかし、時折余分な事を語ってしまう。律法はもっと野蛮な過去の時代のもので、今は語る必要はない等と言うのである。

「このような福音は立派な家を建てるかも知れないが、その土台は砂の上である。神に対する悔改めによって深くほり下げた土台無しで本当の建物が建つはずが無い。次に岩であるキリストについて話すべきである。建物がイエス・キリストに対する信仰によって出来あがる、福音なしの律法は暗く、望みないものであるが律法なしの福音は効力と力とに欠けるものである」(「説教講義」1906年第4課P.128、129)

#### 8. アルバート・バンズ博士(長老派)(1798-1870)

「それで次の事を学ぶ、①神の律法の全てを、クリスチャンは守らなくてはならない。ヤコブ2:10。②クリスチャン牧師は神の戒めの全てを適切に説教すべきである。③神の戒めのうち、あるものは余り重要でなく服従しなくてもよいと言うような事を語るものは神の国にふさわしくない。④本当に敬虔な者は神の全ての戒めを尊ぶ。詩119:6と比較せよ」(註解書、1868年マタイ5:19の項)

#### 9. 日曜学校タイムズの編集者の証言

「神はいつまでも存在される。そして神の道德律もまた神の生命にあずかるすべての者に服従を要求する。神の道德律は永久的である。神の御品性の表われである。神が廃止されることがないのと同様に律法も廃止されることはない」(1914年1月3日日曜学校タイムズの社説)

#### 10. カンバランド長老派信仰告白

「道德律は理性的人間と創造者なる神及び人間相互の関係から直接生じてくる義務を規定するものである……律法は全世界の者が永久に守らなくてはならないものである……律法は福音によって排除されるものではなく、むしろ確立される……だから律法は行為の規準として威力を十分に発揮するものである。(長老派信仰者告白P.43-45)

#### 11. ジョン・ウエスレー(1703-1791)

「モーセがイスラエルの子らに与えた礼典律には神殿の犠牲や奉仕に関係した全ての定めが含まれている。我らの主はたしかにこれらの規定を解体し、滅ぼし、全く廃止された。全ての使徒たちもその証人となった。『神は、わたしたちを責めて不利におとし入れる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた』(コロサイ2:14)」

「しかし十戒に含まれている道德律、また預言者たちもそれを守るようにすすめた律法は、主は廃止されない。その一点一点たりとも取り消すことは主の御来臨の意図ではなかった。この律法は決して破ることの出来ないもので、天における忠実な証人として固く立っている。道德律は礼典律とは根本的に全く異なるものである。……律法の全ての部分は全人類に対し、また各時代を通じて有効である。変り易い時や場所や環境に支配されず、神の御品性や人間の性質、そして神と人との間の不変の関係の上に立つものである」(いろいろな機会における説教第1巻P.221、222)

「キリストの福音の最大の敵の中に、律法そのものを審き、公然とまたははっきりと律法をののしり、その中の一つだけでなく、小さいものも大きいものも、また一挙に全ての戒めを破るように人々に教える者たちがいる。(ギリシヤ語のルーサイとは解体する、ときほぐす、その義務を解く等の意味)、またこれらの人々は『主は律法をどうされたか、主はそれを廃されたのである』と言うことをはっきりと教え、ただ信ずるだけが我々の義務であると言う、これこそ高慢な言い過ぎである。これこそ主に面と向って立ち向い、自分の使命を伝える方法を知りませんねと言うようなものである。おお主よ、どうぞこの罪を彼らのせいにしなさい。父よ、彼らを赦して下さい。彼らはなす所を知らないからです」

この強力なまどわしの背景をなす事の中で最も驚くべき事は、この事に全力を尽くしている者が、神の律法を放棄することによってキリストをあがめ、その教えを無に帰しながらその働を尊くしていると本心から信じている事である。彼らはユダのように、主よと叫びながら接吻をしているのである。このような者一人一人に、主はあなたは接吻によって人の子をうらぎるのかと言われる。キリストの血について語るかたわら、その冠をはぎとったり、福音の発展のためと言って、その律法の一つでも軽視することは、キスによって主を売ると何にも違わない行為である。信仰について服従のどの線でも直接、または間接に無視するように説く者はキスによって主を売ると言われても仕方がないのである。神の戒の最も小さいものをも取り消したり、弱めたりする傍ら、キリストを説く者も同様である」(ウエスレーの働き、1833年第1巻P.225、226)

## 12. ウィリアム・H・ブランソン牧師は言う

「我々は無法時代に住んでいる。人間は神の律法の束縛から逃れようとするばかりでなく、神そのものを追放しようとしている。無神論が公然と講壇から叫ばれ、懐疑思想が会堂内に満ちている。人間は昔感じたような罪の意識を持っていない。罪を赦して下さいる救主を必要と思わないようになった。その結果、贖罪の計画、主イエス・キリストの神性、処女降誕等の教えを拒絶する。そして、イエスは、その仲間より優れているが、一個の人にすぎないと言う、進化論は創造主である神の栄光を横取りし新生(再創造)を人間に与える神の御力の証拠を取り除いてしまった。これらの異端説を受入れる人間は、当然、彼らの思いの中には存在しない、神から与えられたと言う律法を排除することを望むのである。無律法の教義は、近年、溢れみなぎる洪水のようにキリスト教界に蔓延した進化論や現代思想と相通するものである。

「神の道德律はクリスチャンの日常生活を導くものであると言うことを全く棄ててしまった指導者たちによって背教した今の教会は昔より聖くなったと言えるであろうか。この世をキリストにと言う聖戦は以前よりも速やかに進行しているであろうか。神の十戒は宇宙の審判の座における規準であると言われた昔より今の改宗者たちは質においてすぐれたクリスチャンであるだろうか。無律法・無贖罪が教えられている今の世界は前よりも良くなっているであろうか」(ブランソン信仰弁証論P. 26、27)

### 13. ウイリアム・T・エリス師の嘆きと訴え(1919年)

「地震の波のように地球を履っている現在世界の動乱は何に原因しているのか。人間は偉大な書を棄ててしまった。これを忘れ、これを尊ばなくなった。……全ての問題のもととはこれである……人類が神の律法を離れたから、一切の事がうまく行かなくなってしまった。人間がシナイ山から語られた神の十戒をはっきりと悟り、これを守る勇気を持つまでは決して正道にもどることはない」

「真理を告白しよう……我らは正しい道からそれてしまったのである。現代の社会は十戒のどの点でも全く違犯、破戒の限りを尽くしている。……」

「全世界が神の十戒をもし守るならば、現代の緊張は立ち所にやわらぎ、暴動も直ちに鎮静する。そして平和な良き日が実現する。……」

「シナイ山の大理石の山はだから光明がさしてくる。そして主の声が聞こえる。『神の戒を守れ、すみやかにその全ての戒に服従せよ……十戒は宇宙における正義を示すものである』と。」(1919年7月15日ワシントン・ポスト紙)

## 第 15 章 聖書と律法

1. D・M・キャンライト牧師は晩年SDAの教会を離れて教会の敵となり、SDAを組織的に攻撃して数冊の書を著した事は第1編の中で述べた所である。彼は有力なSDAの働き人であり、また多くの力強い著書を書いてSDAの為に尽くした。聖書と律法について彼が書いたパンフレットは今尚、SDAの信仰と教義を証する宝玉のように輝いている。ブランソン長老の例に従い、この問題についてSDAの信仰的勇者であり、指導者であった時の彼の声をきいてみよう。
2. 「神の律法は私たちの行為の基準であり、未来における神の裁きの規定であることは確かである。この律法はどんなもので、その由来はどうであろうか。聖書によれば、生ける神がいと厳粛な権威をもってシナイ山上に降られ、全国民を前にして、自らその律法を語られた。その時に地は震動した。(申命記4:12、13へブル12:26)

「神の律法とは十戒の事である。それをしらべてみよう。第1条、あなたは私の外に何物をも神としてはならない。第2条、何の像をも造ったり、拝んだりしてはならない。第3条、主の名をみだりにとなえてはならない。第4条、安息日を覚えて、これを聖くしなさい。第5条、あなたの父、母をうやまいなさい。第6条、あなたは殺してはいけない。第7条、あなたは姦淫してはいけない。第8条、あなたは盗んではならない。第9条、あなたは偽証をたててはならない。第10条、あなたはむさぼってはならない。何と簡潔であり、また何と包括的であることか。始めの4ヶ条は人間が神に対する義務を示し、後の6ヶ条は我々の隣人に対する義務を完璧に語っている。

「この律法が今の社会で完全に守られたならば、どんなに立派な社会が実現するであろうか。そこには、偶像礼拝はなくなり、神を罵る声は消えうせ、安息日を汚す者はなく、両親にさからう子供はなく、殺人も、姦淫も、盗みも、またうそをつく者もなくなってしまふ。こんな社会を望まない者があるだろうか。この律法について私たちは今考えているのである。この原則は神がこの世界を創造された時から存在していた。この戒はノアの洪水前の人々も、またユダヤ人も皆従わねばならなかった。そして同じ戒は昔と同じように現在でも我々に服従を求めているのである。



「どんな国家でも、世代でも、また個人でもこれらの戒を犯して害を受けない者はあり得ない。神の律法は創造主同様永久に不変なのである。ヨハネは『不義はすべて罪である』(Iヨハネ5:17)と言った。また『すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である』(Iヨハネ3:4)と言っている。パウロは『律法のないところには違反なるものはない』(ローマ4:15)、『律法以前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪として認められないのである』(ローマ5:13)。人間は昔から不義であり、罪を犯しているから、律法は昔から人間が服従する義務があったものであることがわかる。

3. 聖書には、はっきりと、また繰り返して全ての戒は永久に存在することを宣言している。『すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立ち』(詩111:7,8)、『わたしは早くからあなたがこれをとこしえに立てられたことを知りました』(詩119:152)、『あなたのみ言葉の全体は真理です。あなたの正しいおきてのすべては、とこしえに絶えることはありません』(詩119:160)。
4. 「新約聖書中で神の律法は廃止されたり、変更されたり、無視されたりするのはなく、かえって、キリスト自身、また全ての使徒たちによって最も厳粛に確認され、確立されているのである。イエスはそのお働きの始めに『わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない』(マタイ5:17)と言われた。この最も重要な問題について、人々が間違った考えを抱かないように望まれた。彼は決して律法を滅ぼすために来たのではない。これは彼の使命ではない。悪魔や悪人は神の律法を憎み、その廃止を喜ぶ。しかし、イエスの働きはこれとは正反対であった。『廃するためではなく、成就するためにきたのである』(マタイ5:17)。『成就するとは服従することである』とウエブスターは言う。パウロの言、『互に重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう』(ガラテヤ6:2)をよく考えて見よう。キリストは律法を無くする為に来たのではなく、それに従うために来られた。そして彼の生涯に於いてこれを実行されたのである。」

「イエスについて預言者は語った。『主はおのれの義のために、その教(律法)を大いなるものとし、かつ光栄あるものとするを喜ばれた』(イザヤ42:21)、キリストの一生は律法を守り、その行為と教えによって律法を尊び高められた。彼自身、『わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおる』(ヨハネ15:10)と言われた。聖なる神のみ子はみ父の律法の十ヶ条を最も尊ばれた。そしてその全てに対し献身的に服従された。これ以上、われわれにとって力強い模範となるものはない。使徒は言う、『彼を知っているといたしながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにはない。しかし、彼の御



言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである。彼におると言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである』(Iヨハネ2：4-6)、この御言は全くはっきりしている。クリスチャンは誰でもキリストのように生活するべきである。キリストは神の律法を守られた。だから彼の弟子と言いながら、神の律法を守らない者があれば、それはウソつきである。

「キリストは最大の力をこめて次のように言われた。『よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである』(マタイ5：18)。これ以上強力に表現し得るだろうか。天地が過ぎ去っても、律法の一点一画もすたらないう。神の国が実現するまで律法はその一点一画さえも変更廃棄されることはあり得ない。主は更に言葉をついで言われた。『それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう』(マタイ5:19)」。

5. ヤコブの言葉を考えて見よう。「なぜなら、律法をことごとく守ったとしても、その一つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである」(ヤコブ2:10)。ヤコブはどの律法について語っているのだろうか。これは十戒であることはヤコブの次の言葉であきらかである。「たとえば『姦淫するな』と言われたかたは、また『殺すな』とも仰せになった。そこで、たとえ姦淫はしなくても、人殺しをすれば、律法の違反者になったことになる。」
6. イエスのもとに走ってきた青年が、「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいのでしょうか」との質問を發した時、イエスは答えられた。「もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」(マタイ9:17)。永遠の生命を受ける条件として主が神の十戒を守ることを示された事は極めて重大である。
7. 主はまた人間の伝説によって神の律法を無視するパリサイ人にきびしい譴責の言葉を与えられた。「なぜ、あなたがたも自分たちの言伝えによって、神のいましめを破っているのか。この民は口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる」(マタイ15：3、8、9)。我々が神の戒めを無視しながら、神を礼拝することは空しい事であると聖書は語っている。
8. 新約聖書の中で十戒は最高の言葉で語られている。パウロは言う、「律法そのものは聖なるものであり、戒も聖であって、正しく、かつ善なるものである。わたしたちは、律法は靈的なものであると知っている」(ローマ7:12、14)、パウロは紀元

60年にこう叫んでいる。パウロは律法は聖であった、正しくあった…等とは言っていない。律法は聖なるもので、霊的なものであると言っている。彼は「私は神の律法を喜んでいる」(ローマ7:22)と告白している。「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」(ローマ8:7)。

読者方よ、神の律法は聖にして善なるものである。問題は我々の肉の思いである。これは神の律法を嫌い、また決して服従できないものである。あなたは喜んで律法を瞑想し、それに従って生活しているであろうか。その戒めを喜んで守っているであろうか。あるいは十戒を破った生活をしているか。十戒の第4条は第7日目安息日を守ることである。この十戒のうちの一つの戒めを自ら無視し、これを尊び人々に教えている我々を有罪なりと宣言しないでほしい。我々は聖書の言葉に従って忠実に真理を証しているのである。神は世の終りに、一つの運動を起し神のすべての戒めを守る民によって終りの使命を全世界に伝えさせられるのである。「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」(黙示録14:12)。この働きを行っているのがSDAである。(D・M・キャンライト、「神の律法」)

9. SDAのキャンライトは語り続けて次のように言う。「詩篇には『主のおきでは完全であって、魂を生きかえらせ、主のあかしは確かであって、無学な者を賢くする』(詩19:7)と書いてあるが完全なおきでは完全な神がつくられたものである。また伝道の書には「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」(伝道の書12:13)。全ての人の道徳的責任義務がここに教えられている。旧、新両約時代を通じて、全ての人間の道徳的義務がここに簡潔に明記されている。一切の教えの基礎となっている道徳的源泉がここにある。主は言われる、「わたしの定めを彼らに授け、わたしのおきてを彼らに示した。これは人がこれを行なうことによって生きるものである」(エゼキエル20:11)。
10. パウロははっきりと神の律法は廃止されないと立証した、「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか、断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」(ローマ3:31)。パウロは律法は断じて無効にならないと言っているが、これが我々の立場であるべきである。
11. ヤコブは「だから、自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行ないなさい」(ヤコブ2:12)と言っている。人間はこの律法、十戒によって審かれるのである。「自由の律法」とは、これを守っている者は罪に定められない、すなわち有罪とされない。罪とは関係なく、罪から自由なのである。ダビデは詩篇でこう言っ

ている「わたしはあなたのさとしを求めたので、自由に歩むことができます」(詩119:45)。

12. ヨハネは「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」(Iヨハネ5:3)と証言している。主イエスは再臨の時に生存している己の民について、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」(黙示録14:12)と言われた。イエスを信じる信仰とはイエスの教えである福音を信じることである。神の戒めとは父なる神の戒めであり、彼の道德律、すなわち十戒である。イエスは黙示録の終りに「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者(別訳一神の律法を行なう者)たちは、さいわいである」(黙示録22:14)と言われた。イエス及び使徒たちは常に律法を尊び、これを高め、またそれを教えた。神の律法は生活の基準、品性の試金石、そして審判のルールである」(D・M・キャンライト「二つの律法」(1886) P.87-97)。
13. イザヤの言葉「どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のようになり」(イザヤ48:18)。
14. ダビデの言葉、「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ、主のあかしは確かであって、無学な者を賢くする。主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする」(詩19:7, 8)。「彼らはあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です。それゆえ、わたしは金よりも、純金よりもまさってあなたの戒めを愛します。それゆえ、わたしは、あなたのもろもろのさとしにしたがって、正しき道に歩み、すべての偽りの道を憎みます」(詩119:126-128)。
15. ソロモンの言葉、「戒めはともしびである。教は光である。教訓の懲らしめは命の道である」(箴言6:23)。
16. イエスのみ言、「律法の一画が落ちるよりは、天地の滅びる方が、もっとたやすい」(ルカ16:17)。「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない。廃するためでなく、成就するためにきたのである。よく言っておく、天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」(マタイ5:17, 18)。「もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」(マタイ19:17)。
17. パウロの言葉、「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったであろう」(ローマ7:7)。

「律法それは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」(ローマ7:12)。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」(ローマ3:31)。

18. ヤコブの言葉、「なぜなら、律法をことごとく守ったとしても、その一つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである。たとえば、『姦淫するな』と言われたかたは、また『殺すな』とも仰せになった。そこで姦淫はしなくても、人殺しをすれば、律法の違反者になったことになる。だから、自由の律法によってさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい」(ヤコブ2:10-12)。
19. ヨハネの言葉、「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にいるために、神の律法を行う者たち(別訳)は、さいわいである」(黙示録22:14)。

## 第16章 道德律の諸問題

1. 律法はユダヤ人だけに与えられたと言う問題をまず考えてみよう。

律法がユダヤ人だけに与えられたとすると、ユダヤ人以外のものは律法を守らなくてもよいわけである。すなわち、盗んでも、姦淫しても、ウソをついてもかまわないと言う事になる。クリスチャンも異邦人もユダヤ人以外の者は全く自分の欲のままに何でも出きることになる。キャンライト氏はその組織的な律法攻撃の中で律法はユダヤ人だけのものと言いきったが、まさか、ユダヤ人以外のものは、偶像を拝んでも、神をののしっても、両親にさからっても、盗み、姦淫、殺人など何でもしたい放題が許されると言うことには賛成しないだろう。

使徒パウロは、「律法のないところには違反なるものはない」(ローマ4:15)、「律法がなければ、罪は罪として認められないのである」(ローマ5:13)。ヨハネは「すべて罪を犯す者は、不法を行なう者である。罪は不法である」(Iヨハネ3:4)。ユダヤ人以外は律法もないし、それを守る必要もないしまた罪もない。完全な自由(?)が与えられていると言う。殺人、強盗、偶像礼拝、姦淫を自由に行ない、しかも罰を受けない自由の世界があるとすれば、誰がこんな社会に住んでみたいと思うであろうか。それこそ悪鬼が自由に横行し、悪人の群がたむろする恐るべき社会である。神の律法は関係ない。自分たちのしたいことを御自由にどうぞ。こういう世の中を誰が肯定するだろうか。

2. ユダヤ人は律法にしばられていたが、我々はもっと良いもの、すなわち律法の本質(essenseまたは精神)をもっている。キャンライトの一説である。ユダヤ人はきびしい律法でしばられていた。しかし、クリスチャンはずっとゆるやかなエッセンスを守ればよいのだ。律法も不要、行為の基準なるものはない。ただその精神に従えばよいと言う。このエッセンスなるものは具体的にある行為を命じたり、禁じたりするものではなく、各自が道德的だと考えるように生活してよいわけである。憲法も民法も刑法もなんにもなく、国民はただ自分たちが正しいと思うことを自由にやれる国家が世界のどこにあるだろうか。このような国家には立法府もなければ、警察も刑務所もないだろう。律法がないから、罪悪も裁判もあり得ない。人権も財産権も保護されない。ただ律法の精神のみで国家や社会の平和と安寧が保たれるのであろうか。

3. 律法は不要、エッセンスだけが大切だと言うすぐそのあとで、キャンライト氏は不思議なことを言った。「安息日の問題を除き、他の9ヶ条は新約時代にもそのまま残っている。第7日目の代りに、日曜日が守られればそれでよい」(キャンライト、SDA反駁論P.362、332)。

エッセンスはほんのしばらくの間生存したが、また律法の姿にもどり、第7日目安息日以外はそのままでよいのだと言う、エッセンス説は安息日をとりかえるための手品師のトリックだったのだろうか。

これについてキャンライト氏がSDAであった時、彼は次のように言った、「この説を称える人々は神の律法の10ヶ条は十字架で廃されたが、そのうちの9ヶ条は直ちに復原されたと言うが、これは安息日はもう不要になったと言っているのにすぎない。ある人々は律法は十字架の時代に廃止され、第4条を除いて50日後のペンテコステの日に再有効となったと言う。というこの50日に犯した一切の罪は、律法が無かったから、罪もなく、また罰を受けることもないということになる。

この世は一丸となって神の戒めにそむいた。そのため神はみ子をつかわし、この世との和解を計られた。「すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである」(2コリント5:19)。

この世において、律法の条文が廃止された場合もはやその文は裁判に使用されない。古い立法の廃止は極めて厳格に決定され、またその廃止なり変更なりは明らかに公表される。十字架において神の律法が廃止されたとすれば、昔のユダヤ人たち、モーセからキリストまでの人々は、この廃止された律法によって裁かれ、有罪とされることはないことになる。刑法の場合、廃止された律法は、昔から存在しなかったものとされる。

人間の運命を決定する神の律法は確かにシナイ山において厳粛な光景のうちに与えられた。それに対し、この律法の変更、廃止について、また反律法論者が言う古い戒めから新しい戒めに変わることを示す、神の側の明らかな宣言が聖書の何処に記されているのか。何時、何所で、十戒の全文か、その一部分か、誰に、またその新しい律法の条文は、それを犯した者の罰則はどこに記されているのであるか。この大事件は、キリストの御在世の時か、またはその死の時か、または復活の時か、それは神殿において、あるいは海辺、どこで宣言されたか、個人的に、また全公衆に対して、新律法は9ヶ条か、12ヶ条か、こうした事に対し、明らかな宣告がなくてはならない。ところがそれがどこにもないのである。



4. 愛は律法を全うする。愛があれば律法はいらない。愛が新約時代のエッセンスである。これに対するみ言葉として次の聖句を引用しよう。『「心をつくし、精神をつくし思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」(マタイ22:37-39)。

愛について考えて見よう、心を尽くして神を愛する者は偶像を拝まない。他の神につかえない。神のみ名をみだりにとなえない。安息日を尊ぶ。キリストは最初の4ヶ条をまとめて、神を心から愛する者はこの戒めを守ると教えられた。しかし、キリストはこの言葉を約1600年前のモーセの言葉から引用されたのである、「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」(申命記6:4, 5)。愛が律法のエッセンスと言うのは新約時代の話であるばかりでなく、キリストの時代の1600年前にもエッセンスであった所を見ると、この愛があれば律法はいらない所か、愛がなくては律法を守ることができないし、また愛があれば律法を行なわないではいられないことが明らかである。

5. 新約聖書には十戒の第4条を除いた他の9ヶ条は繰り返し教えてあるが、安息日については何も言われていないと反論する者がある。これはウソである。実際は新約聖書を通じて59回は言及されていて、他の9ヶ条のどれよりも回数は多い。そして安息日の戒めの榮譽と純聖さを格下げするような箇所は一つもない。
6. クリスマンは律法の下になく、恵の下にあるから、律法は守る必要はない、と主張する人々が多い。では律法の下とか恵の下とか言う言葉の本当の意味はどこにあるのだろうか。(ローマ6:14、15、ガラテヤ3:23-25、4:21、5:18)、単的に答えると「律法の下」とは「律法によって有罪とされる」という意味である。律法を守る必要がないとの意味ではなく、律法に照らして罪人として、断罪されない。それはキリストの贖罪の恵によるからとの意である。どうしてキリストにあるものが偶像礼拝や、親不孝や、姦淫、殺人、偽誓等を禁ずる戒めを無視することができるだろうか。

キリストを信ずる事により、我々は律法の罰をのがれ、キリストの恵みによって救われるに至るから、律法の下から恵みの下に移されたわけである。こうした変化は、旧約の古い戒めから新約の新しい戒めへの移行ではなく、古い人から神によって新しい人に生れかわる個人の体験を言っているのである。パウロは次のようにこれを論じている、「罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか……キリスト、イエスにあずかるバプテスマを受けたわ



たしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである」(ローマ6: 2, 3)。これは悔改めた人の経験である。「わたしたちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられた。それは罪のからだが減び、わたしたちがもはや、罪の奴隷となることがないためである」(ローマ6:6)。これは改心の体験の事で、決して古い契約から新しい契約への移行を語っているのではない。「このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト、イエスにあって神に生きている者であることを、認むべきである。だから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従わせることをせず、また、あなたがたの肢体を不義の武器として罪にささげてはならない……なぜなら、あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるので、罪に支配されることはないからである」(ローマ6:11-14)。「それでは、どうなのか。律法の下にではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきであろうか。断じてそうではない」(ローマ6: 15)。

7. 「キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである」(ローマ10:4)。だから、律法の時代は終わったとする者がある。終りという言葉はいつも「期間の終り」を意味するものではない。この場合は「目的を果たす」の意味である。キリストは完全に律法を守られた。彼は律法を成就するため、また律法を行なうために来られた。律法の目的はキリストによって完全に果たされ、彼は信ずる者の義となられたのである。
8. パウロの論理の誤用が反論によく用いられる。その一例がここにある。「それとも、兄弟たちよ。あなたがたは知らないのか。わたしは律法を知っている人々に語るのであるが、律法は人をその生きている期間だけ支配するものである。すなわち、夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって彼につながれている。しかし、夫が死ねば、夫の律法から解放される。であるから、夫の生存中に他の男に行けば、その女は淫婦と呼ばれるが、もし夫が死ねば、その律法から解かれるので、他の男に行っても、淫婦とはならない。わたしの兄弟たちよ。このようにあなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して死んだのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち、死人の中からよみがえられたかたのものとなり、こうして、わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのである」(ローマ7:1-4)。これをもって我々は死んだ律法から解放されたのだと説く。

ある男女が結婚し、国の法律によって正当の結婚として保護される。この一對の男女はお互いの生存中は互いに夫婦としての義務を持つ。しかし、夫が死ねば妻はその死んだ夫からは解放され、他人に嫁しても罪とはならない。夫が死んでも国の法律は変わらない。ここに①女、②夫、③国法の三つが出てくる。夫

は死んで妻は自由となるが、国の法律は少しも変わらない。このパウロの例での最初の夫、2番目の夫とは何であろうか、第一は罪深い時の欲の生活、第二は救主キリストによって生れ変わった生活を意味している。いずれの場合も律法は不変である。律法不要論者には何の役にも立たない論理である。

## 第 17 章 道徳律と礼典律

1. 聖書には極めてはっきりと区別される二つの律法がある。その一方は神御自身がシナイ山の燃える火と煙の中から宣言され、また御自らその指で石の板に書き記してモーセに渡されたものであり、もう一方のものはモーセに与えられモーセが書いたもので、第1のものは道徳律、すなわち十戒で、これを破るものは罪人とされた。第2のものは儀式礼典また犠牲に関するもので、第1の律法を犯した結果必要となったもので、キリストの贖罪をさし示し、十字架によって廃されるものであった。この2つの律法についてはプロテスタントが公然と認めていたものであった。
2. 律法反対者を代表して、キャンライト氏は、まずこうした二つの律法はない。また聖書にはそれを示すみ言葉はない。あるのはただモーセの律法が一つあるのみで、それはユダヤ人のみに与えられた。このモーセの律法は全部十字架で廃止されたと大胆に主張した。
3. キャンライト氏はSDAに在籍の時、この同じ問題について、立派なパンフレットを書いているので、彼自身にその弁明をしてもらおう。

「安息日の問題が論争されるようになる前は伝統的諸教会は神の十戒は不変であってクリスチャンはどの戒めも守らなくてはならないと信じ、またそのように教えていた。(第14章参照)ところが十戒が不変であると、第7日目安息日である土曜日を守ることが正しいと言う結論に到達せざるを得なくなった。そして今まで各自の教会の信条にも、指針、信仰告白、筆や口でうたってきた上記の信仰を急に変更するようになった。土曜日安息日に対する反対論が、結局、聖書にはモーセの律法一つしかなく、それは十字架で廃されたと言う詭弁となってあらわれてきた。

4. パウロは十字架によって廃された律法と不変の律法の2種あることを語っている。「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」(ローマ3:31)。「数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである」(エペソ2:15)。一体、この一見矛盾する相異なる律法をどう説明するのか。言うまでもなく、パウロ

は二つの違った律法について語っているのである。

世の始めから並行して存在した2つの律法があった。アダムからキリストの死まで存在し、一つは廃止され、一つは確立されたのである。すなわち、この地球が創造され、万物、そして最後に人間が聖く幸いな者として造られた。単純な一つの禁令に服従していたならば人間は永遠の生命を与えられるはずであった。しかし人祖は愚かにもその唯一つの戒めにそむいてしまった。そして罪を犯して楽園から追放された。その時、神の律法は存在していた。法がなければ、不法である罪は存在しない。「このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである」(ローマ5:12)。その時、人類の義務を示した道德律が存在したことは確かである。(これがシナイ山で有文化されたのである)。

このままであれば、罪人となった人類は律法の違反者としてその罰である死があるのみであった。神は無限の愛の故に、キリストの贖罪死によって、罪人を救う道を備えられた。それが十字架をさし示し、罪の悔い改めと赦しとを約束する礼典律の制定となった。罪を犯して打ちふるえる人祖の前でその救いの宣言がなされた「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに。おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創3:15)。そしてイエスは「世の初めから、ほふられた小羊」(黙13:8)となられた。キリストが人となり、人類の救いの業を完成し、御自身の生命を人のために献げるまでには数千年の時が残されていた。それで救い主キリストをさし示すために、きずのない獣をささげる制度がエデンの時から定められた。この型や影となった献物や祝祭日等を規定した戒めが礼典律であった。祭壇、祭司、神殿等の規定もこの礼典律に含まれている。

礼典律は、人祖が道德律を守っていたならば設けられる必要はなかったのである。道德律は人間の違反以前から存在したものである。礼典律は罪人を救い主につれかえる贖罪の計画に人間を参与させるものである。

これらの律法が始めからあったことは聖書の各所に散見される。人祖が罪を犯した直後「主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」(創3:21)。これはキリストを表徴する獣が殺されたことを示すものである。アダムの子アベルは信仰によって、その群の羊をほふって献げた(創4:4、ヘブル11:4)。来るべきキリストの死を信じて獣を壇上にささげた。それに対し、兄のカインはキリストに対する信仰を持たず、献物として、畑の野菜をささげた。(創4:3)神は信仰のない彼の献物を受け入れられなかった。

こうして、ノア(創8:20)、アブラハム(創12:7、8)、イサク(創26:25)、ヤコブ(創31:54)等は皆信仰によって来るべき救い主、キリストに対する信仰と感謝とを表わした。道徳を示す不変の律法と、罪人に救い主を示す礼典律とをこれらの人々は忠実に守って生活した。

しかし、アブラハムを祖とする選民イスラエルは蕃族が住むカナンや、偶像礼拝の盛んであったエジプトに長年住みついて、神の律法を忘れ、神(真の神)を知らない民の悪い習慣、風俗をまねるに至った。そこで神は大いなる奇跡と力とを持ってその民をエジプトより導き出し、シナイ山において律法を文字で書き、永久に忘れられないような厳粛な光景のうちに民に律法を与えられた。

「三日目の朝となって、かみなりと、いなずまと厚い雲とが山の上にあり、ラッパの音がはなはだ高く響いたので、宿営における民はみな震えた。モーセが民を神に会わせるために、宿営から導き出したので、彼らは山のふもとに立った。シナイ山は全山煙った。主が火のなかにあつて、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた」(出エジプト記19:16-18)。「そこであなたがたは近づいて、山のふもとに立ったが、山は火で焼けて、その炎は中天に達し、暗黒と雲と濃い雲とがあつた。時に主は火の中から、あなたがたに語られた……主はその契約を述べて、それを行なうように、あなたがたに命じられた。それはすなわち十戒であつて、主はそれを二枚の石の板に書きしるされた」(申命記4:11-13)。言語に絶する火と煙と黒雲といなずま、いなびかりの中から神は十戒を御自ら語り、それを石の板に記して、モーセに与えられた。その律法が十戒であつた。モーセは山で別な規定を神から示され、自らこれを書いた。これが礼典律であつた。

5. 十戒は、①神御自身が天より語られた(出19:16-19、申命記4:12、13)。②神の指がそれを書かれた。2回にわたって同じものを書かれた(出31:18、32:16、申10:1-5)。③神が石に刻まれた(出32:16)。④至聖所の柩の中に保管された(出25: 16、22、申10:1-5)。

モーセの律法、礼典律は、①モーセが山にのぼり、天使の命により、モーセが自分で書いた(出24:14-18 申31: 9、24)。パウロが「天使たちをとおして、仲介者の手によって制定されたものにすぎない」(ガラテヤ3:19)と言ひ、また「モーセの律法」(使15:5)とよんでいるものである。モーセの律法とはモーセが制定者ではなく、神よりモーセを通して民に与えられたことを意味している。モーセを仲介者として与えられたから、モーセの律法と称せられるが、十戒はモーセの律法とよばれたことは一回もない。②モーセは礼典律を書き物に書いた(申31:24)。③「モーセはイスラエルの人々にむかつて、主が彼らのため彼に授けら

れた命令を、ことごとく告げた」(申1:3-5、31:1、32:45、46)。「モーセがこの律法の言葉を、ことごとく書物に書き終った時、モーセは主の契約の箱をかつぐレビびとに命じて言った。『この律法の書をとって、あなたがたの神、主の契約の箱のかたわらに置き、その所であなたにむかってあかしをするものとしなさい』」(申31:24-26)。<sup>④</sup>モーセの礼典律は箱のかたわらに保管された。

6. 上記の区別は旧新両約聖書を通じて、はっきり区別されている。神御自身もこの二つの律法を区別しておられる。「もし、彼らがわたしが命じたすべての事(道德律、十戒)、およびわたしのしもべモーセが命じたすべての律法(礼典律)を守り行なうならば、イスラエルの足を、わたしが彼らの先祖たちに与えた地から、重ねて迷い出させないであろう」(列王下21:8)。また預言者ネヘミヤもこの両者をはっきり区別している。「あなたはまたシナイ山の上に下り、天から彼らと語り、正しいおきてと、まことの律法および良きさだめと戒めとを授け、あなたの聖なる安息日を彼らに示し、(以上道德律)あなたのしもべモーセによって戒めと、さだめと、律法とを(これは礼典律)彼らに命じ」(ネヘミヤ9:13、14)。

新約聖書中、この両者について語っている所の例を示すと、エルサレム会議で問題になった割礼であるが、「パリサイ派から信仰にはいつてきた人たちが立って、『異邦人にも割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきである』と主張した」(使15:5)、この割礼はモーセの礼典律に定められたもので、十戒の中には割礼の二字はどこにもない。ところがパウロが「律法は罪なのか。断じてそうではない、しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったであろう。すなわち、もし律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりなるものを知らなかったであろう」(ローマ7:7)と言ったのは、モーセの律法ではなく、「神の律法」(ローマ7:22)なのである。神御自身も、旧新両約聖書も、預言者も使徒たちも2つの律法を区別している。この事実を反対者たちはどう見るべきであろうか。

7. 旧約の祭司職、犠牲、割礼、社会生活を規定する民法等は十字架によって廃される性質のものであった。十戒、すなわち道德律は決して廃止されるべきものではない。本体であるキリストの影であったモーセの礼典律が効力を失ったのである。「だから、あなたがたは、食物と飲み物につき、あるいは祭や、新月や安息日(週毎の安息日でなく、祭りの時の特別な安息日)などについて、だれにも批評されてはならない。これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある」(コロサイ2:16、17)。救い主キリストが、各時代に献げられた犠牲の本体として十字架の上に血を流された時、これらのものは全て必要性を失った。それ故に廃止されたのである。



しかし道徳律はどうであろうか。偶像礼拝、神に対する不敬、安息日汚聖、両親への不服従、殺人、姦淫、偽証を禁ずるこれらの戒めが十字架の前と後で変化するべき性質のものであろうか。キリストの模範と死によって神の十戒に何ら変化はないのみでなく、これらのものは以前よりもまして忠実に守り、服従すべきクリスチャンの義務を示すものであろう。



## 第 18 章 安息日の起源

1. 安息日(それが記されている神の律法、十戒)はモーセによって初めてイスラエルの民に与えられた。すなわち、ユダヤ民族のみに与えられたと言う人々があるが、事実はどうであろうか。キャンライト氏はSDAから離れて後、上記のような事を本に書いてSDA攻撃者のチャンピオンになったが、彼がまだSDAであった時、安息日問題について多くのパンフレットを書いた。ここに再びキャンライトSDAが書いたものを紹介し、いずれが正しいか読者の判断にまかせたいと思う。
2. 「全ての道德律の戒めの原則は人類の墮落前に存在し、人間が罪を犯さなくても、それらは存在し続けるものであった。安息日も同様である。それに反し、礼典律は全て、墮落後に制定され、人類の贖罪を示す影であった。……道德律、またそれに含まれる安息日は、何時、誰が、何処で犯してもそれは罪を形成するものである。道德律は人祖が神に叛く前に存在したが、礼典律は罪を犯してから作られた。人類が罪に陥らなかったならば、礼典律は全く不必要なものであった。これが本質的な相違である。さらば、安息日はこの両者のどちらに属するものであろうか。
3. 上の質問に対する答はただ一つしかない。安息日に関する事実並びに原則は、アダムの罪以前に存在していたことは明らかである。創造週は終り、神は第7日を祝福し、聖別し、この日を休息の日とされた。「こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終えて第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終えて休まれたからである」(創2:1-3)。天地創造の大業が一つ一つ順々に行われ、第七日目を聖なる安息日とされた。聖別という言葉は「聖なる目的のために用いる」(ウエブスター)ことを意味する。安息日はエデンの園で始まったのである(出エジプト記16:23、20:8-11、31:17、マルコ2:27)。天地創造を記念する安息日は、創造の業が完成した時から始まった。

安息日は他の道德律の戒めと同じく、全ての国民、全ての時代の全人類にあてはまる。道德律は全てどの一国、どの一国民、どの一時代に限定されず、また環境や状況によって変わらないものである。

4. 安息日は天地創造の記念日であって、贖罪を示す影のようなものではない。昔の天地の始まりをさしており、来るべき十字架を予表するものではなかった。(出エジプト20:11参照)
5. エデンにおいて与えられ、永遠に続く制度として立てられた、新天新地において安息日は全ての人が聖とする日となるのである。(イザヤ66:22、23)
6. 安息日はユダヤ人のために作られたものではない。ユダヤ民族が生れる2300年も前の天地創造の日に定められ、人間はこの日を守るように命じられた。
7. 安息日は全人類の先祖のアダムに与えられた(使17:26参照)。キリストは「安息日は人のためにある」(マルコ2:27)と言われた。キリストは安息日はユダヤ人のために与えられたとも、異邦人のためともクリスチャンのためとも言われない。
8. 安息日はいつでも天地創造の事実にかかひのぼる。決して来るべきものの影ではなく、永久不変の制度である。神の安息日である第7日はその直後であれ、数千年後であれ、現在であれ不変である。
9. ジョージ・ブッシ(長老派)ニューヨーク市立大学、ヘブル語、東洋文学教授、「創世記注解」第1巻P.48、49の証言、「神が第7日目安息日を聖別された。それで人類もまたこの日を聖別するように命じられた。これは時代や所や国々によって違うものではない。全人類がいつでも、どこでも聖く守る義務がある。第7日目安息日は世の終りまで守らねばならない。ユダヤ人時代にも、クリスチャン時代にも廃止変更されず、全人類はこの日に神を礼拝し、神への奉仕をするべきである。」
10. アモス・ビニイ(メソジスト)「神学概論」P.169の証言、「創造の業が完成した時、神御自身が模範を示し、人が俗事を止めて安息をするように制定された日である(創2:1-3)。神はつかれたからでなく(イザヤ40:28)、人間に従わせるように、安息日の守り方を示された(出20:11、31:17)。神の祝福と聖別とがこの日に与えられたことは、これは一般の日と違った聖なる日であって、天地創造の神を拝する者に対して永遠の記念日であり、また徴となるのである。」
11. 「聖書記者の靈感の筆が『神は第七日を聖別された』と書いているのだから、私は次のように理解せざるを得ない。神はこの日を他の6日間の働く日から聖別されたから、人類はこれを聖なる目的のために用いる(宗教的の目的)べきである」(J. ニュートン・ブラウン(バプテスト)牧師「安息日遵守」P.48)。

12. 「ヘブル語のピエルと言う言葉は聖くする、聖いものとして聖別する、と言う意味である。例えば、安息日(創2:3)また人物(レビ20:8、21:8)」(エドワード・ロビンソン・ゲセニウス「ヘブル、英語レキシカン」P.294)。
13. 「制定されたが直ちに実施されなかったという何かの記念日の例が聖書の中にあるだろうか。…旧約の割礼、新約のバプテスマや聖餐式等定められてから何百年もの間実施されなかったであろうか。最も栄光に満ちた天地創造の記念日が制定されてから2000年以上も守られなかったのであろうか。万物の始めの時に制定され、ユダヤ人のためではなく、全人類のためにきめられたこの日が創造の直後から守られていなかった訳はない」(ダニエル・ウイルソン「主の日の神的権威と永久的義務」P.46、47)。
14. 「神は安息日を祝福し、聖別された。この様なことは他の何物にもなされなかった。天にも地にも、またいかなる被造物も御自身のために聖別されなかった。それは第7日目安息日のみである。これによって第7日目が聖なる礼拝に最も相応しい日であることを我々が知るためである。「聖別とは他の一切の被造物から分離し、神に献げられたの意味である。聖なる目的や神の礼拝のために用いることを意味する。モーセがよく言ったように神殿の器具のように聖なる事のために用いられるのである。聖句から、アダムはたとえテストにパスし、罪を犯さなくても、第7日目を守ったことは確かな事である。たとえ人間は罪を犯して、神を忘れても、神は安息日を人間が守るように望まれた。人間は第7日目に神の言を伝え、神を礼拝することが神の御計画なのである」(マーチン・ルター「創世記講解」F・W・バゲ訳P.62、63)。
15. 「諸事実から私は安息日は全人類に与えられたものであり、ヘブル人も律法がシナイ山で与えられる以前にすでに守っていた。古代には安息日遵守はおそらく全世界的であったとの結論に達した」(フランシス・ウエイランド(バプテスト)、「道徳科学の要素」P.91)。
16. 安息日は全人類に与えられたもので、全世界的、また永久的な祝福をもたらすのが神のみこころであった。ある特定の群や人種のためではなく、全人類、全種族、全人類家族のためであった」(A・E・ワッフェレ「主の日」(受賞論文)P.163)。
17. 「第4条の戒めが『憶えて』という言葉で始まっている事を考えると週休の第7日目安息日は決して新奇な戒めではないことがわかる。シナイ山以前に人々は第7日目安息日を守っていた。モーセ以前の永い年月にわたって人々はこの日を聖別していた。近頃発掘された古代アッシリアの文書によってアブラハムの先祖の地において第7日目安息日が厳格に守られていたことが明らかになった」(

ヘンリー・T・スコール博士(長老派の)「ニューヨーク・クリスチャン新聞」12月24日1913年)。

18. 「これは最も太古から存在する制度である。神はそれを記憶しなさいと命じておられる。すなわち、私が天地を創造した時、安息日を制定した。何故私がそうしたか、その目的は何であったかを記憶しなさいと主は仰せられるのである」(アダム・クラーク・コンメンタリー第1巻P.402)。
19. 「第7日目はアブラハムの時から、否、それより先の天地創造の時から守られていた。ユダヤ人はその民族史を安息日制度と結びつけて考えた。家長たちは安息日を愛し尊んだのである」(キリスト教の証明、ロバート・オーエンとアレキサンダー・キャンベルとの論議)P.302)。
20. ドワイト・L・ムーディは「量られて足りなかった」の中で次のように書いている。「安息日はエデンの園で守られていた。それからずーと人々はこの日を守った。『安息日を憶えて』と言う言葉で始まるこの戒めは、シナイ山で神が石の板にそれを書かれたその時より先に存在したことを証拠づけている。どうして人は十戒の九つは今尚有効であるが一つだけこの戒めは廃されたと言うのであろうか!

安息日の問題は全世界にとって極めて重要であると信じる。それは現在における論議のまよになっている大問題である。もし安息日を無視すれば、教会は衰えてしまう。教会を忘れてしまえば、家庭が駄目になる。家庭が墮落すれば、国家は亡びるに至る。問題は我々はどちらの方向に向っているかである。

神の教会は力を失いつつある。そのわけは人々が安息日を守らず、自分の利益のためにその聖い日を俗事のためにすごしているからにほかならない。」  
P.47

## 第 19 章 旧約時代と安息日

1. 聖書の年代計算から言えば、約6千年前にこの地球は創造されたことになるが、その時から今まで果たして、時は正確に計算されてきただろうか。その長い間に時や日は失われて、現在の第7日目創造の時の第7日目であるとは断言出きない。例のノアの大洪水前の長い未知の時代、それに文字のなかった家長、族長の時代、またイスラエル民族があのエジプトに住みついた何百年間、その間先祖から引継いだ多くの遺産を失ってしまった時代、荒野を放浪して後カナンに定住し、あの無政府状態の士師の時代、それから移り変わる時の流れの間に、安息日は忘れられて、今では正確な安息日をきめる方法はない……と説く人々がある。こうした説に対して答は意外にはっきりしているが、本章ではこの問題をとりあげることにしよう。
2. 結論を言えば、天地創造の時から現在まで、週日のサイクルは一日も失われていない。創造の第7日目は現在の第7日目と全く同じであって、これは何よりも確かな事実であるということである。
3. まず天地創造の時、神は6日の間に万物を創造し(地球及び太陽系)、(また50億年前に地球は出きたとする進化論は、全世界的に人々によって信じられているが、聖書の創造説と決して両立するものではない。これは不信仰な人間の弱点から生じた謬論であって、神がこの世界とそこにある一切の物を創造されたとする厳然たる事実を敢えて否定するもので、こうした人々はきまって第7日目安息日、創造の記念日を排撃する。その理由は週の第7日目安息日は実に有力な創造の記念的証拠であるからである。) 神はその時から今までの週のサイクルを失われないように導いてこられたことは疑う余地はない。この問題について、例のD・M・キャンライトが未だSDAの有力な働き人であった時、彼自ら書いたトラクト(1873年「時は失われたと言う説について」)からその要点を引用させてもらおう。
4. 「神の定めた聖なる安息日を守りたくない人々が考え出した一説に『時は失われたから、安息日を守ることは不可能だ』と言うのがある。万策尽きた時、この説を持ち出して言いわけにする。第7日目安息日が確かに創造の記念日であることに間違いはない、また自分たちもその日を守りたいが、正確な安息日を現在



では見出し得ないと説く。

5. かつて日曜学校の教師たちは、土曜日は天地創造の時の第7日目であり、キリストの復活された日は週の第1日目の日曜日であるとはっきり子供たちに教えていた。しかし、週の第1日は間違っている。決して創造の第7日目ではないとの正しい安息日説が問われるようになった時、急に人々は安息日問題について確信を失ってしまった。『時は失われたから、正しい安息日はわからない』と言う説が出まわったのもその頃であった。第7日目安息日はわからないと言うこの人々は、週の第1日の日曜日、キリストの復活の日については、決して時は失われたとは言わない。日曜日と土曜日とは隣りあっているので、日曜日が確かならば、土曜日も確かなはずである。土曜日以外の日は全く正確で問題はないが、第7日目となると急に不安定になるのはどう言うわけか。ある幼児が豚を数えて「お父さん、6匹の豚はおとなしかったけれど、もう1匹は動きまわっていて数えられなかった」と報告したとの笑い話があるが、この類ではなからうか。
6. まず創造の神は人類に十戒と言う道德律を与え、第7日目安息日を創造の記念日として守ることを命じられた。不正確で、どの日が第7日目安息日であるかわからない日を神が守れと言われるわけではない。そのように思い、また教える者はまず、神の全知全能の力に対して攻撃しているのにはほかならない。また日曜日(キリスト教徒)や金曜日(マホメット教徒)こそ正しい安息日だと主張する人々も自らの無知を暴露しているのである。彼らは決して時は失われたから、正確な日曜日はわからないとは言わない。神の定めた正しい安息日を守りたくない人々は、いつか裁きの日に創造主の前で申し開きをしなくてはならないことを憶えているべきである。
7. 天地創造の時から各時代にわたって週期と安息日を人間が守ってきた記録は沢山ある。その始めの記録はもちろん創世記の第2章である。「こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである」(創2:1-3)、これが安息日の始まりである。神はもちろん、人間がこの日を聖く守るように命じられた。それ以来、昔の家長たち、またユダヤ人たちはこの日を守り続けた。7日の週期に関する記録は聖書の中に多く見られる。ノアに関する聖句を見よう。「七日の後、わたしは四十日四十夜、地に雨を降らせて、わたしの造ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります」(創7:4)。「それから七日待って再びはとを箱舟から放った」(創8:10)。「さらに七日待ってまたはとを放ったところ、もはや彼のもとには帰ってこなかった」(創8:12)。ラバンの言葉、「

まずこの娘のために一週間を過ぎなさい。……ヤコブはそのとおりにして、その一週間が終わったので」(創29:27, 28)。これらの例を見ても洪水前にも洪水後にも7日の週期、そして安息日が守られていたことがはっきりわかる。

8. ギルフィラン氏はアメリカ、トラクト協会から出した「安息日」と言う大冊の中で次のように書いている。(P.364, 365)「スカリガーの言葉をかりれば、太古の時代、東洋人の間には7日間の週期が行われていた」また「学長デゴグーは、1週間と称する7日の週期は人間が時を分けまた量った第一歩であった。このサイクルは想像も及ばない大昔から世界の国々で同じように用いられてきている。イスラエル、アッシリア、エジプト、インド、アラビア、東洋の国々の人々が7日間と言うサイクルを利用してきた。この同じ習慣が、また古代のローマ人、ゴール人、ブリトン人、ゲルマン人、北方の国々、またアメリカ人の間にも見出されている」。またラプレースはこう言った。「週は人間の文化(知識)の最も古く、また否定できない記念塔であろう」。「今でこそ中国人は安息日を守っていないが、昔には週の第7日を守っていたのだ」。
9. 全地球上の諸国民は皆ノアの子孫であるから、安息日をノアから伝統的に引きついでに違いない。アダムからアブラハムまで安息日は正しく守り続けられたことは明らかである。人祖アダムが死ぬ前243年間、子孫のメトセラと共にいたし、メトセラはその孫のセムと100年間、そしてセムはその子孫アブラハムと共にいたから、アダムからアブラハムまでの2000年間は、安息日は伝統的に守られていたことがわかる。
10. イスラエルがエジプトにいた数百年の期間安息日は失われたであろうか。エジプトから出てきた民に対して神は言われた。「見よ、わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう。民は出て日々の分を日ごとに集めなければならない。こうして彼らがわたしの律法に従うかどうかを試みよう。六日目には、彼らが入り入れたものを調理すると、それは日ごとに集めるものの二倍あるであろう」「彼らは、おのおのその食べる所から従って、朝ごとにそれを集めたが、日が熱くなるとそれは溶けた。六日目には、彼らは二倍のパン、すなわちひとりに二オメルを集めた。そこで、会衆の長たちは皆きて、モーセに告げたが、モーセは彼らに言った。「主の語られたのはこうである。『あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残ったものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と。彼らはモーセの命じたように、それを朝まで保存したが、臭くならず、また虫もつかなかった。モーセは言った。「きょう、それを食べなさい。きょうは主の安息日であるから、きょうは野でそれを獲られないであろう。六日の間はそれを集めなければならない。七日目は安息日であるか



ら、その日には無いであろう」。ところが民のうちには、七日目に出て集めようとした者があったが、獲られなかった。そこで主はモーセに言われた。『あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか。見よ、主はあなたがたに安息日を与えられた。ゆえに六日目には、ふつか分のパンをあなたがたに賜わるのである。おのおのその所にとどまり、七日目にはその所から出てはならない』こうして民は七日目に休んだ。「イスラエルの人々は人の住む地に着くまで四十年の間マナを食べた。すなわち、彼らはカナン地の境に至るまでマナを食べた」(出エジプト記16:4、5、21-30、35)。

主なる神は40年間の荒野の生活で、民に第7日目安息日を聖く守るように特別に教えられた。例え、それまでに人間が安息日を忘れたとしても、この40年間に、神御自身によって安息日は回復されたことは確かである。神御自身が定め、また教えられた安息日は正しい第7日であったに違いない。

11. マナが定められたように降り、数百万と言われたイスラエルの全国民が安息日を守っていたその最中に、神はシナイ山から十戒を自ら石の板に書いて民に与えられた。律法の第4条がそれである。「安息日を覚えて、これを聖とせよ、六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記20:8-11)。この安息日は創世記に記された第7日目安息日と同じ日である。すなわち、天地の創造から、イスラエルがカナンに入る約2500年間は本当の安息日が守られていた事は証明できたわけである。
12. 約束の地カナンでイスラエル人は約800年間を過した、その間イスラエル人は強大な国家を形成した。その間、神の律法はきびしく守られた。もちろん、国家全体が安息日を守っていた。神は預言者を通してしばしば民に語り、安息日を聖く守るよう勧告された(Ⅱ列王4:23、Ⅰ歴代9:32、イザヤ56:2-6、58:13、エレミヤ17:24-27、エゼキエル20:10-24、アモス8:4-6)。サムエル、ダビデ、ソロモン、ヒゼキヤや其の他名の知れたイスラエルの王たちがこの時代に活動した。こうした時代に安息日は忘れられたのであろうか。決してそんな事はあり得ない。
13. 次は紀元前600年頃から始まるイスラエル民族のバビロン捕囚時代である。70年間ユダヤ人は亡国民として異国バビロンで日を過したが、この間に安息日は失われたであろうか。聖書の記録によると、彼らが捕囚になった理由は、安息日

を忠実に守らなかったからに他ならない(エレミヤ17:17-24、ネヘミヤ13:15-18)。ダニエルは70年間の捕囚期間中、バビロンにいたが、彼は律法を忠実に守っていた(ダニエル6:5)。またバビロンからエルサレムにもどったユダヤ人たちは、安息日を正しく守ることを誓った(ネヘミヤ10:31、13:15-18)。紀元前500年頃ユダヤ人たちはユダヤに帰り、紀元後70年のエルサレム滅亡までユダヤに居住していた。預言者ハガイ、ザカリヤ、マラキ等の活動したのはこの時であった。新約と旧約の間時代にも、またユダヤは国力を回復した。マカビス時代には安息日を非常に厳格に守り、敵が安息日に攻めてきても、防戦しなかったほどであった。もちろん安息日を失うことは無かった。そしてキリストの時代に入ったが、当時の人々は安息日の守り方が非常に厳しく形式化し、また迷信化して、キリストに強く譴責されている(マタイ12:1-12 ヨハネ5:5-19)。

## 第20章 新約時代と安息日

1. キリストの来臨より以前の4000年間には安息日は失われなかったことを前章で学んだ。いよいよ、新約時代に入り、神の御子キリストが果して安息日をどう見られたかをしらべてみよう。神の子、キリストは全ての事を知っておられた。もし、当時の安息日が間違っていたならば、きっとそれを是正されたに違いない。しかしキリストはユダヤ人が間違った安息日を守っているとされた事は全くない。また彼自身ユダヤ人と同じ日を守られた。キリストは、また自分は安息日の主であると言われた(マルコ2:27、28)。
2. キリストが十字架にかかった直後の聖書の記述をしらべてみよう。「この日は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだが入められる様子を見とどけた。そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ。週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った」(ルカ23:54-56、24:1)。これらの聖句は重大な幾つかの事実を語っている。①まず備え日、すなわち6日目がある。(出エジプト16:5)、②これに続いて、戒めに言われている第7日目安息日がある。③その次は週の第1日である。この時点で安息日は失われていない事は確かである。また使徒行伝には何回も安息日について言及されている(使13:15、15:21、16:13、17:2、18:3)。
3. 新約時代にはユダヤ人の離散の後、異教ローマ時代、コンスタンチヌスからのキリスト教ローマ時代、そして中世ヨーロッパにおける大暗黒時代が続いて起こった。紀元後70年にエルサレムが滅亡し、ユダヤ人は再び諸国に散らされ、預言を成就させた。(ルカ21:20-24、申命記28:25、37、64)。それ以来、1900年の年月がたったが、ユダヤ人は世界中の至る所に居住したが、どんな環境にあっても彼らは土曜日安息日を忘れなかった。ウエブスター大事典は「ユダヤ人の安息日は土曜日」であると言っている。またM・A・ベルクの「ユダヤ人の歴史」P335には、「ユダヤ人の計算によれば、安息日は日没から始まる。金曜日の夕方、日没の約1時間前に一切の商売と俗事を中止し、日没から24時間を聖なる安息日の祝いに献身するのである」と書かれている。数千年間、世界の至る所に散らされたユダヤ人は同じ安息日を忠実に守り通した。決して正しい安息日に

対する問題は起こらなかった。現在5百万以上のユダヤ人が世界中で第7日目安息日を守っている。彼らはキリストを殺し、あらゆる点で神に反逆したが、一つだけ生命がけで守りとおしたのが安息日であった。神はユダヤ民族全体を用いて第7日目安息日の正しいことを全世界に証明しておられるのである。

4. アメリカの有名な学者であるオハイオ州シンシナティのラビ、M・ワイズ氏は「紀元前の800年から現在迄、ユダヤ人の中で最も尊く聖なる安息日に関して問題が起こったことはなかった。「(安息日の混乱について)、安息日が失われたという事ほど馬鹿げた憶測はない」と言った。
5. キリストの死後3世紀頃クリスチャンは週の第1日を聖なる日として祝い出した。そしてその習慣は短期間に全世界に拡まった。キリスト教会は今三つの大きなグループに別れている。ギリシャ教会、信徒教66,000,000、ローマ教会170,000,000、プロテスタント教会88,000,000、合計324,000,000人である。(この数字は約100年前のもの)

これらのクリスチャンは異句同音に日曜日は週の第1日であり、キリストの甦った日であり、土曜日は昔のユダヤ人時代の第7日安息日であると固く信じている。

これに対し、サラセン人、そしてマホメット人は第6日目、金曜日を自分たちの安息日として守っている。160,000,000人のマホメット教徒は皆金曜日を聖日としている。マホメット教徒も自分たちが守っている日は週の第6日目であり、土曜日の前日、また日曜日の前前日であることを信じている。

結局、何億という熱心な宗教家たちは、金曜日は第6日、土曜日は第7日、日曜日は第1日であることを証言しているのである。

6. 天文学的に数千年前の日蝕、月蝕と同じく、数千年後の日蝕、月蝕まで数分、数秒の差はあっても極めて正確に算定することができる。もし一日でも失われていれば、こういうことは不可能である。過去数千年前の算定では、無くなった日は一日も無かった事は確かである。

米国軍工兵隊付天文学者F.キャンプ博士は「太陽の蝕の計算によって年の正確なことは証明された。紀元前500年のプトレマイオス朝の時から、一日も失われた日がないことは間違いがない。春分、秋分の計算から過去にさかのぼって行くと、古代の記録とぴったりである。例え1分間の相違でも、はっきりわり出せる」と証言している。

7. 旧約に記されているヨシュアの奇跡に関し、あの時に日が失われたのではないかと質問する人がある。「主がアモリ人をイスラエルの人々にわたされた日に、ヨシュアはイスラエルの人々の前で主に向かって言った。『日よ、ギベオンの上にとどまれ、月よ、アヤロンの谷にやすらえ』。民がその敵を撃ち破るまで、日はとどまり、月は動かなかった。これはヤシャルの書にしるされているのではないか。日が天の中空にとどまって、急いで没しなかったこと、おおよそ一日であった」(ヨシュア10:12-14)。この日は2日間ほどの長さがあったようである。しかしそれは1日間であり、太陽は1回没しただけである。神は7日目を守るように命じられたので、週の7分の1ではない。1日は日没まで数えることは聖書の各所に記してある(創1:5、レビ23:32、申命記16:6、マルコ1:32)。この同じ原理はヒゼキヤ王の時にあてはまる。『見よ、わたしはアハズの日時計の上に進んだ日影を十度退かせよう』、すると日時計の上に進んだ日影が十度退いた」(イザヤ38:8)。この日は普通の日よりやや長い日であったが、しかし1日には違いない。
8. ローマ皇帝ユリウス、カエサルは紀元前46年にユリウス暦を作った。この暦によると1年は365日からなり、毎年4年目に366日となる。この昔の暦で行くと、年は1年に11分程長くなり、数世紀の間にはお彼岸の日にかなりのくい違いが生じてくる。この点を改正したのが新式のグレゴリウス暦である。法王グレゴリウス13世(在位1572-1585)はユリウス暦を改正した(1582年)。325年ニケヤ宗教会議と同じ日の春分とするため、10日間を削除する必要が生じた。そこで、1582年10月の10日間を切りとったが、それは10月5日を10月の15日と改称したにすぎなかった。

1582年		10月			1582年	
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

イギリスはこのグレゴリウス暦を1751年に採用した。そして合計11日を削除した。1752年9月の日を11日取り除いた。9月3日を9月14日にした。河野旧式ユリウス暦から新式グレゴリウス暦によって週のサイクルに何らかの変化が起こったであろうか。全然週のサイクルには何の影響も生じなかった。

9. 安息日の歴史の結論をまとめてみると、次のようになる。①天地創造の時、人祖に安息日が与えられた。②アダムからアブラハムまで代々安息日は引継がれた。③出エジプト後40年間荒野の奇跡によって安息日は守られた。マナの奇跡によって正しい安息日は確認された。シナイ山で十戒が与えられたのもこの時であった。④800年間のカナン在住の時代にはユダヤ国全体が律法と安息日を守っていた。⑤バビロン捕囚の70年間に安息日を忘れなかった。⑥キリストに至る500年間敵に殺されても安息日を守った。⑦キリストの時代にもユダヤ人は正しい安息日を守っていた。またキリストも安息日を守られた。⑧キリストの十字架の直後も、弟子たちは安息日を守った。⑨今から100年位前に5百万のユダヤ人、6千万のギリシャ教会、1億7千万のローマ・カトリック、8千8百万のプロテスタント、それに1億6千万のマホメット教徒は、その時の週の第7日目安息日は正しい聖書的の安息日であり、週の第1日はキリスト復活の日であり、週の第6日はマホメット教徒の聖日であることを証言した。そして天文学者も昔から週のサイクルは破壊されたことはなく、昔から現在まで連綿としてこの安息日は守られてきたことを証している。この驚くべき事実、靈感による聖書と歴史的証明、科学的証言に対して何か有効な反論があるであろうか。



## 第 21 章 安息日の戒めの本質

1. 十戒の第4条は主として礼典的要素からなり、道徳的な他の9ヶ条とは大いに異なっている。単に人間に必要な肉体の休息と宗教的礼拝の時に関するもので、第7日目を守ることは大して重要なことではないと主張する者が多いが、本章では第4条は決してそんなものではないことを反論することにする。
2. さて道徳律は神の御品性のあらわれである。神の創造力は活ける真の神と他の偽の神々と異なる特性である。安息日は神が世界を創造された大能と特性とを顕わすものである。
3. 我々が拝する神は天地万有の創造主である。我らをとりまく大自然はもちろん、我々を造られたのも真の神である。我々は単に神が聖であり、憐みある神、また全知全能の方だから神に従い、神を礼拝するのではない。「我らの創造主であるからに他ならない。我々がもし神なしで生きていけるならば、我々は神を拝する義務はないであろう。我々の生命も幸福も一切が創造の神に依存しているのであるから、我々は神に対して道徳的義務を有するのである」。これは神に対する全ての義務の最高、最大のものである。神は我らを生かし、また滅すことができる。6日のうちに世界を創造し、7日目を安息日として休みの日、創造の記念日として制定された。安息日の戒めの中心は神の創造力に土台をおいている。それ故に安息日の戒めは他の9ヶ条と同じく道徳律である。
4. 安息日は他の9ヶ条と同じく永遠不変の事実に基づいている。神の定めたこの日は永遠に地球の誕生日として守られるべきである。我々の誕生日もあるきまった日のみで、他のいかなる日でもない、地の続く限りその日は変わらない。(イザヤ65:17-25、Ⅱペテロ3:7-13、イザヤ66:22、23参照)、「わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地が、わたしの前にながくとどまるように、あなたの子孫と、あなたの名はながくとどまると主は言われる。新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝すると主は云われる」(イザヤ66:22、23)、新天新地において永遠に安息日を守るのであれば、この地上で他の日に変更されることがあり得るであろうか。
5. 道徳律の全ての原則は人間の墜落前に存在していた。人間が神に忠実であっ



でも、不従順であっても、それに何の影響も受けず、存在し続けるものであった。それに反し礼典律は人類が墮落したために与えられたもので、それは罪人を救済する神の贖罪の計画をさし示すものであった。人間が罪を犯す前に存在していた道德律は、決して礼典律と同じではない。

6. 神が安息日と定めた理由は、人間が創造主なる神を忘れないためである。もし人間が安息日を正しく守っていたならば、一人の無神論者も偶像崇拝者もいなかったであろうと言われている。(ジャスチン・エドワーズ)、安息日の使命は天地の創造者である活ける神の知識を人間の心に保存するもので、これこそ他の9ヶ条よりも重要な意義を有する所以である。現在のように、地上の人間が殆んど全員、真の神の知識を失い、罪深い生活をしている時、第4条の戒めほど重要なものが他にあるだろうか。
7. 神御自身が第4条を他の9ヶ条と共に律法の中に入れられた事自体が第4条の道德性を立証する。神御自ら語り、また書いて人間に与えられたものは十戒あるのみである。偶像を拜んではいけない。両親を敬え、殺すな、姦淫するな、盗むな、偽りを言うな、これらは道德的である。もし第4条が礼典的であったら、何故神がその中に加えられたのであろうか。神が間違っただけでも言うのであろうか。決してそうではない「だから、神が合わせられたものを、人は離してはならない」(マタイ19:6)。
8. 第8条の戒め、「あなたは盗んではならない」は誰が見ても道德律である。他のものを盗んではならないと言う道德がここにある。我々は隣人のものを盗んではならない。もしこれを犯せば有罪となる。神は時を人間に与えておられる。毎週の6日間は人間が自由に私用してよいとされた。しかし第7日目は神の安息日で、聖なるものとして他の日と区別し、人間は創造主を礼拝し、隣人に対して善事を行う様に定められた。第4条の戒めは神の時を人間が盗用することを戒めるものである。かく第4条は第8条と同様に道德律なのである。
9. 毎週めぐってくる安息日以外に、旧約時代には祭日、祝日の安息日があった。これらの安息日は皆罪よりの救済をさし示す型であり、また影である安息日であった。これらは礼典的であった。そしてキリストの十字架で廃される性質のものであった。しかし十戒の第4条の安息日は贖罪を示すものではなく、天地創造の神に立ち帰らせるものである。ここに道德律と礼典律の根本的な違いがある。
10. 十戒のうちどの条も天地を創造された真の神を示すものはない。天地創造の真の神をはっきりと示している第4条ほど重要な戒めは他にない。これこそ真の神と偶像との相違をはっきり教えるものである。これこそ神の印であって、この印無

しではすべての戒めはそのかなめを失ってしまうのである。「わが安息日を聖別せよ、これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである」(エゼキエル20:20)。十戒の第4条はこの偉大なる道德律の源泉は天地を創造された神であることを証明するものである。

11. エレン・G・ホワイトはこの点につき次のような重要な証言をしている。「(シナイ山において)安息日は新しい制度として紹介されたものではなく、創造の時に定められたものとしてであった。創造主の御業を記念するために安息日を覚え守るべきであった。天地の創造者を神として示すことによって、真の神を全ての偽りの神から区別した。第7日目を守る人々は、その行為によってエホバを礼拝する者であることを表示するのである。地上に神につかえる者が何人でもある限り、安息日は神に対する人間の忠誠のしるしである。第4条の戒めだけが、十ヶ条の中で、律法制定者の御名と御称号とを示している。律法をお与えになった方がどんな権威を持っている方かを示す唯一のものである。その権威と義務との証拠として律法に付着された神の印を含むものである」(人類のあけぼの、英文P307)。
12. 「主は預言によって『わたしは、あかしを一つにまとめ、教(律法)をわが弟子たちのうちに封じておこう』(イザヤ7:16)と命じられた。神の律法の印は第4条の戒めの中に見出される。十ヶ条の中で、これのみが律法賦与者の御名と御称号とを共に明示するものである。その方は天地の創造者であることを宣言し、全てにまさって尊崇と礼拝とを受けられるべき方であることを示している。この第4条以外に、他のどの条にも、この律法を誰が与えられたかを示している所はない」(各時代の争闘、英文P452)。
13. 「(再臨直前、恩恵期間が終わった後)神の律法の敵たちは、牧師から最も小さい者に至るまで、真理と義務について新しい見解をもつようになる。第4条の戒め、安息日が活ける神の印であることを知るに至るが、その時はもうおそい。自分たちの偽りの安息日(日曜日)の本質がわかるが、それはもうおそい。彼らは砂の上に家を建ててきたことに気がつくが、おそすぎた。自分たちは神と戦ってきたこと悟る。宗教の教師たちは天国の入口に人々をつれていくと言いながら魂を亡びに至らせた。最後の判定の日まで、聖職にある者の責任の重さ、そして不忠実な牧師の結果がどんなにおそろしいものかはわからない。永遠の日に始めて、一人の失われた魂の価値がわかる。『我を離れ去れ、悪しき僕よ』と神が仰せられる者の運命は実におそろしいものである」(各時代の争闘、英文P640)。
14. 律法賦与者である天地創造の神の御名、御璽が第4条にのみ記されている。こう

して見る時、十戒のうち最も重要なのは第4条であり、十戒の中心がここにある  
と言ってもよいと思われる。

## 第22章 新約聖書と安息日

1. SDAからバプテストの牧師になったキャンライトは、律法に反対して次のように攻撃している。「奇妙なことには、新約聖書中、どこにも、ただの一度も第7日目安息日を守れと書いてある所はない」(SDA主義を斬る、P267)、「一切の問題について新約聖書ははっきりと徹底的に教えている。全ての章に、全ての書翰に、また全ての書に、全てのクリスチャンの守るべき教えが、また全ての面の義務が十分に教えられている。第4条以外の9ヶ条の戒めは、それらを皆守るべきことと、それに違反した時の罪についていちいち名ざしで繰返し教えられている。しかし、第7日を守るべき義務については1回も言われていない……もう一つのはっきりしている事は、第4条は新約聖書に記されていないし、それを守るようにクリスチャンに命じられている所もない」(同じ、P265、266)、この大胆な宣言にもこだわらず、同じ本のP273では新約聖書の中に59回第7日目安息日に関する言及がなされていると言っている。一体どう言う事なのだろうか。
2. 例の如く、キャンライト氏がSDAの忠実な牧者であった時に彼自身が書いた立派なパンフレットがあるので、それを紹介しよう。「十戒の9ヶ条は新約聖書に言及されているが、第4条は何も言われていないと言う者があるが、これはウソである。本当は、十戒のどれよりも多くの言及がなされている。全体で少なくとも59回は記されている。そしてこの59回のうち、安息日の尊さと聖なることを割引いている記事は一ヶ所もない」(「二つの律法」P120)。
3. 神の子キリストは33年半の生涯中、毎週かさず、安息日を守られた。ナザレにおける30年間大工の家で6日働き、安息日には仕事を休んで、会堂に出席された。「それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた」(ルカ4:16)。
4. 安息日問題につき、キリストは「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである」(マルコ2:27、28)と仰せられた。創世記には神が安息日を人に与えられたことが記されている。第7日安息日の主はイエス御自身であって、主がこれを人のために制定されたのである。これが新約時代に万人の主御自身が安息日について語られた御言葉なのである。

5. マタイ12:1－12にイエスの弟子たちがうえて安息日に麦の穂をつまんで食したことに、パリサイ人が自分たちの習慣に従って譴責した時、なされたキリストの返答が記されている。そこでキリストは「安息日に良いことをするのは、正しいことである」(マタイ12:12)と言われた。キリストは安息日を守ることの正しいことを、新約聖書の中で弁護されているのである。
6. キリストの復活から39年も後で起こるエルサレムの滅亡について預言し、それが冬または安息日に起こらないように祈れとキリストは警告された。「あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ」(マタイ24:20)、これは、その時にも安息日は存在し、また人々が安息日を守るべきであることを立証されたことに外ならない。
7. 新約時代のクリスチャンの守るべき安息日は週の第1日である日曜日だと言う人々が多いが、果してそうであろうか、新約聖書の中から、調べて見よう、「さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤが墓を見に来た」(マタイ28:1)。この聖句に二つの日、安息日とそれが終ってから来る週の初めの日が記されている。最初に安息日があり、それが終ってから、週の初めの日が始まっている。週の初めの日は安息日ではなく、安息日の次の日である。これはクリスチャンの聖書と言われている新約聖書の言葉である。
8. もう一つ、別な聖句を開いて見よう。「さて、安息日が終ったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが、行ってイエスに塗るために、香料を買い求めた。そして週の初めの日に、早朝、日の出るころ墓に行った」(マルコ16:1、2)。これもマタイの言葉と同じく二つの日、安息日と週の初めの日についてはっきり区別して書かれている。新約聖書の福音書の言葉である。主の復活から数十年後に書かれたクリスチャンのための福音書の記録である。どの日が安息日であるか。
9. 「この日(キリストが墓に入れられた日)は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。イエスと一緒にガリラヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだを納められる様子を見とどけた。そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ」(ルカ23:54－56)。イエスと共にいた女たちはおきてに従って安息日を休んだ。その前の日が準備の日であった。安息日の後に週の第1日が来た。安息日は週の第1日ではなかった。

10. 使徒時代の安息日の記録も多い。「しかしふたりは、ペルガからさらに進んでピシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた」(使13:14)。パウロとバルナバは安息日(第7日目安息日)に会堂に入った。パウロはその日には預言者の書が読まれたと言い、またユダヤ人以外の大衆も集まってきた事を述べている(使13:27、42、44)。エルサレム会議の議長をつとめたヤコブもまた「古い時代から、どの町にもモーセの律法を述べ伝える者がいて、安息日ごとにそれを諸会堂で朗読するならわしである」(使15:21)と言っている。パウロはテサロニケで「例によって(いつものように)、その会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らの論じ」(使17:2) たことをルカは記録している。
  
11. バプテスト派の牧師となったD・M・キャンライトはSDAの第7日目安息日を攻撃した文中で、次の事実を間違いのない学者の一致した意見として述べている。「全ての教会史家は、ユダヤ人クリスチャンがエルサレム会議の後もしばらくの間は第7日目を守り続けていたことを異句同音に認めている」、「現存の最大の著者、フイリップ・シャフ(博士)は『使徒時代の教会史』の第118頁に、『我々の知る限りにおいて、第1世紀のユダヤ人クリスチャンは、少なくともパレスチナ在住の人々は、聖書的に安息日を遵守していた』と宣べている」(SDA批判、P277)。ユダヤ人クリスチャンは紀元1世紀末(100AD)まで聖書的な安息日を守っていたと言う、指導的キリスト教会史学者のこの言葉は重要な意味を有している。キリストの弟子たち、すべては1世紀の終る前に全員その生涯を終った。彼らは皆第7日目安息日を守っていた。聖書も、また歴史も、この事が正しい事を示している。
  
12. 使徒時代において、クリスチャンは皆キリストにあって一体であった。ユダヤ人、異邦人の別もなく、男女の別もなく、貧富の別もなかった。「あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト、イエスにあって一つだからである、(ガラテヤ3:26-28)。紀元100年までのクリスチャンはユダヤ人もまた異国人もキリストにあって一つであったとすれば、全てのクリスチャンは第7日目安息日を守ったのであって、後に背教者が出てきて、神の律法を変えようとした時まで正しい聖書的安息日を守られていた事は確かである。使徒たちが安息日を第7日から週の第1日に変えたと言うことは、全く何の根拠もない言葉である。新約聖書には安息日に関する句が59以上ある。イエスは御自身安息日の主であると言われた、(マルコ2:28)。聖書には安息日として日曜日を聖く守ったとか、守れとか書かれている所は全然ない。安息日の主とはキリストが第7日目安息日の主であることは明らかであって、それ以外に解釈する事は出きない。



13. 新約聖書には週の第1日に関する聖句は合計八つしかない。その一つ一つを注意深く観察して見よう。①マタイ28:1「さて、安息日が終って、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリヤとほかのマリヤとが、墓を見にきた」。安息日が終ってから、週の初めの日がきたと言うだけで、週の初めの日が安息日であると書いてないばかりか、全く別の日であることが明らかである。②マルコ16:1、2、9「さて、安息日が終わったので……そして週の初めの日に、早朝、(女たちは)日の出のころ墓に行った……週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた」。マタイの言葉と同様、安息日の次の日が日曜日で、主は日曜日の朝早く復活されたと言われている。③ルカ24:1「週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った」。これもマタイ、マルコと同じことを語っているだけである。週の初めの日の前日、ルカは23:56下句で「それからおきてに従って安息日を休んだ」とはっきり書いている。④ヨハネ20:1「さて、一週の初めの日に、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリヤが墓に行くと、墓から石がとりのけてあるのを見た」。⑤ヨハネ29:19「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスが入ってきて、彼らの中に立ち、『安かれ』と言われた」。ヨハネは週の第1日について2度言及しているが、単にその日に起きた事を述べているにすぎない。安息日の変更について何事も言われていない。ヨハネ20:16「八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた」。これは八日ののちとなっており、日曜日ではなく月曜日の夕方ではないかと言われている。たとえ日曜日に起きたとしても、弟子たちは単に家の中にいたにすぎない、どこにも聖なる集会と言う印象を与えるものはない。またヨハネは21:1-8にキリストがテベリヤの海辺で、弟子たちに現われたことを記している。これが日曜日に起きたと説く人もあるようだが、夜中弟子たちは漁業に携わっていたが一匹もとれなかった所、主の言に従ったら、網一杯のさかながとれたと言う、これが日曜日だとすれば、日曜日は普通の労働の日と言わざるをえない。なお、使徒行伝1:1-4には明らかに木曜日に起きたキリストの昇天の日の事が記されている。⑥使20:7-11「週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、パウロは翌日出発することにしていたので、しきりに人々と語り合い、夜中まで語りつづけた……(若者の奇跡的いやしがあってから)……明けがたまで長いあいだ人々と語り合って、ついに出発した」。これはたしかに週の初めの日の集会の記録であるが、他のいかなる所にも週の初めの日に行われた集会の例は1回もない。それに反し、パウロは84回の安息日の集会に出、またその日に説教をしたとの記事がある(使13:14、44、16:13、17:2、18:1-4、11)。さて、この集会は夕方の集会でパウロの旅出に先だつ送別の集会であった。その頃、集会はいつも夕方開かれていた。夕方の集会が開かれたから、その日は聖なる安息日だと言うのは理由にならない。⑦ I コリント16:2「一週の

初めの日ごとに、あなたがたはそれぞれいくらでも収入に応じて手もとにたくわえておき、わたしが着いた時になって初めて集めることのないようにしなさい」。別訳では「自分たちの家において各自貯えておきなさい」と訳されているが、集会の時、礼拝の献金が集められたというように解釈することは出きない。⑧ヨハネ黙示録1:10「主の日」は日曜日でなく、聖書的な主の日、すなわち第7日目安息日である(出エジプト20:8-11、イザヤ58:13、マルコ2:28)。

14. ペンテコステは日曜日で、その日に聖霊が降ったと言う人々がいるが、果してそうであったか、自ら日曜日を聖日として守っているある優秀な学者でさえ、その時のペンテコステは土曜日であったと証言している(ハケット教授)。第50日は土曜日に当たっていた(オルシャウゼン教授)。ニサンの16日の土曜日から計算して、多分その日は土曜日のようなものである。もしペンテコステの日を我々が記憶し、守るのがみ旨であれば、その日が何曜日に当たったかはっきり示されるはずであるが、それは示されていない(アルフォード教頭、「英国人のための新約」P 5、6)。

## 第23章 主の日と伝説

1. 新約のクリスチャンはユダヤ人の安息日の代りに主の日、すなわち、復活の日を守るべきである、との主張が盛んになされている。果してこの説には、どんな証拠があるのだろうか。
2. アドベンチストのD・M・キャンライトのパンフレットから引用して見よう。「私たちはキリストの復活を祝うべきであろうか、もちろんである。しかし、主は決してそのために日曜日を守るようには言われていない。神は復活を記念するために、水で葬られるバプテスマを我々に与えておられる。『すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえられたように、わたしたちもまた、新しいのちに生きるためである。もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にもひとしくなるであろう』(ローマ6:4、5)。「あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼とともによみがえらされたのである」(コロサイ2:12)。バプテスマ(浸礼)こそキリストの死と復活を記念するために神が与えて下さった礼典である」(キャンライト「日曜日は安息日ではない」P.8)。
3. キリストは復活してから昇天まで40日の間に日曜日を守ることを使徒たちに命じられた。との一説が流行している。本当にそうであったか、あるニューヨークのカトリックの司祭は次のように告白している。「主は復活後の驚くべき40日間に、使徒たちに日曜日を与えられたに違いないと私たちは信じている。しかし、それを証明することはできない」(1889年「展望」ニューヨーク教区、司祭A・M・ジョン・アンカテル)。単なる推測で何らの裏付けになる証拠でもなく権威ある宣告もなされていない。パウロ、ヨハネ、ヤコブ等の使徒によって必要な事はあますす所なく新約聖書の中に教えられている。しかし、この重要な問題について一言も光明となる言葉はない。聖書の中にははっきりとした言葉がないので、聖書以外の一介のカトリックの司祭の言葉を引用しなくてはならないのだろうか。カトリック教会は、衆知のように、聖書には教えていない煉獄だとか、死人のための祈祷とか、おとめマリヤに執り成しの祈りを願ったり、化体を説くミサだとかを誇り高く信奉している教会である。異教の太陽の祭日をキリストの降誕祭クリス

マスとして世界中の人々に守らせている教会である。日曜日聖日論者もまたこの教会に依存しなくてはならないのだろうか。

4. 主の復活の記念日として、使徒たちの時から現在(20世紀)に至るまで連綿として守られてきている主の日とは、この日曜日の別名である。聖書は週の第1日が主の日であると教えていると我々は信じる。また全ての聖書辞典、レキシカン、聖書、またはキリスト教百科事典にはそう書かれていると説く教師が多い。古代の教父たちもそう言ったとつけ加えている。これは事実であろうか。
5. 「昔の人々は、何らかの確かな理由があって、我々が主の日とよぶ日を安息日の代わりに制定した」(カルヴァン)。この昔の人々は誰の事であろうか。誰が神の律法を制定したり、変更したりする権限を有していたのだろうか。神のみがその権限を持っている。「立法者であり審判者であるかたは、ただひとりであって、救うことも滅ぼすこともできるのである」(ヤコブ4:12)。「主はわれわれのさばき主、主はわれわれのつかさ、主はわれわれの王であって、われわれを救われる」(イザヤ33:22)。

十戒がシナイ山で与えられた時、神の声に山が燃え、地は震動した。十戒の第4条の安息日を神が日曜日に代え、そしてその日を主の日とされたとしたら、それにふさわしい宣言がなされているはずである。何時神がシナイ山のように炎の中にくんだり、天地をふるわせて、律法の変更を宣告されたであろうか。こんな記録はどこにもない。神の律法は不変である。神は十戒を変更されない。それをやったのは人間であった。キリストは安息日を主の日と言われた。「また彼らに言われた『安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである』」(マルコ2:27、28)。キリストは日曜日に関して同じような事は言われたことはない。日曜日が主の日であると言い出したのは、ローマ法王による背教後のことである。ヨハネが天より異象を受けた主の日はもちろん土曜日安息日であったことは確かである(黙1:10)。

この点に関し、クリスチャン・チャーチのサンマーベル博士は次のように言う「多くの人々は週の第1日が主の日をさすものと考えている。しかし、これを立証する聖書の言葉はない。主の日の言葉は聖書の中で1回だけ載っている。『わたしは、主の日に御霊に感じた』(黙1:10) の主の日は、キリストが『人の子は、安息日にもまた主なのである』と言われた日の事であると思われる。というのは黙示録全体が極めて濃厚なユダヤ色をもって書かれているからである」(ユニオン・クリスチャン・カレッジ、道徳哲学教授、第1代学長、「キリスト教会史」P152)。

6. 古代の教父たちの言葉が日曜日聖日説を証明するものとしてしばしば引用される。この点につき考慮してみよう。正統派の有力な学者は次のように語っている。「紀元2、3世紀の教父たちは同時代のクリスチャンたちでさえ、安心して従える教師と置いていなかった……例えば学識、力量、天才として同時代のラテン教父の筆頭と考えられていたテルトリアヌスは陰鬱な狂信者のグループに属していた。あのギリシャ教父で無数(約6000巻と言われる)の著書を書いた大学者オリゲネスは異端のかどで教会から除名されている。古代のローマ教会はこれらの人々を最低に評価したが、我々も彼らの著書を価値の乏しいものとしか考えない。テルトリアヌスは、モンタニストとしてローマの監督に破門された……またローマ教会はオリゲネスをも破門に処した……」。

これらの聖書注解者が聖書を注解しているその説明ほど不十分で幼稚なものが他にあるだろうか……この時代の教父でヘブル語に通じていた者は殆んどない。この点から見ても、聖書解説の資格はゼロに等しい。オリゲネスでさえ旧約聖書の言語については非常に不徹底な知識しか持っていなかった。言語上から考えてみただけでも、2、3世紀の教父は、その未知の故に甚だばかげた失敗をしばしばやらかしたのである……」(ウイリアム・D・キレン博士「古代教会」1章33、34節)。

「古代教父の書中にはあらゆる種類の誤謬が満ちみちている。手段や事件の間違い、歴史、文法、教義等の誤りである。これらの誤りのないものは殆んど無い。これは正直な話で、決して彼らを軽べつしたり非難したりしているのではない」(大監督F・W・ファーラー博士「解翻史」P162、163)。

「いわゆる使徒後教父と言われている人々の書物は、殆んどが我々が全く信用することができないような状態で伝えられている、と言うのは、教会で非常に敬われている彼らの名前をつけて偽の書がかかれ、何かあやしい説や主義に重みをつけることが流行していたからである。また教父たちの書いた書物は今は無く、ユダヤ人教会の都合のよいように改ざんされて福音の自由を破壊することを目的として書き直されたものがそれに代ったからである」(アウグスタス、ニャンダー博士、「キリストの宗教と教会の全史」第1巻付録第4部「有名な教会教師に関する考察」P657)。

「クレメント、ディオニシウス、イシドール等の敬虔な人々の名がついている書物は、古代において承認されなかった説に権威を与えるためになされた偽書



である」(ジョン、エメリッヒ、エドワード、ダルベルグ、アクトン(ローマ・カトリック)「自由の歴史」P513)。

「これら教父の書いたものとされている類書は偽作である。またその他に疑わしいものがある。一般に本物として取り扱われているものも、改ざんされていないとは言えない」(ワーレー「教会史点描、第1世紀、P26)。

「これらの教父たちについて言える確かなことは、最も正統的な教義でこれら教父の言葉によって証明できないものはないが、同時にローマ教会を毒した異端説でその本源が教父たちから発していないものはない。教理に関して、教父の権威と言うものは、私にとっては全く無力である。神のみ言のみが正しい教理を含んでいるのである」(アダム・クラーク博士「箴言8章の註解」)。

「神の言を教父たちが注解し、解説し、こじつけて説明する時、私の考えでは、牛乳を石炭の袋に流し込むようなもので、牛乳は真黒になって飲めなくなってしまふ。神の言そのものは純潔で、新鮮、光り輝いて澄みきっている。しかし教父たちの教義や文書によって、神の言は暗くなり、誤りあるものとされ、無価値のものにされてしまった」(マルチン・ルター「卓上論議」P281)。

7. 最高であり、唯一の権威である神の言、聖書によって安息日が週の第1日、または日曜日であると言われた主の日に変更されたという事は完全に否定されてしまった。また使徒後教父たちの証言も完全に信頼出きないことが明らかとなった。ここに聖書と伝説とを二つの神聖な源泉と信じるローマ・カトリック教会が、日曜日について積極的に証言していることを記しておきたい。

「クリスチャンが救われるために必要な全ての真理を聖書は教えていない。また最も重要な事柄についても、聖書は十分に明らかでなく、また理路整然としていない」(ギボン枢機卿「父祖の信仰」P111)。

「伝説は書かれていない啓示であり、聖書は文書になった啓示である。これは使徒たちが口の言として教えたものを世々にわたって伝えてきたものである。我々は聖書と同じように伝説も信じなくてはならない。聖書と伝説はパラダイスから流れ出る二つの聖い流れのようなものであって、どちらも尊い真珠のような真理を含んでいる。これら二つの流れは、どちらも神から出ているもので、同じく真理に満ち、同じく尊いものであるが、伝説の方が一層明瞭で、安全な指導書である」(ブルノー「カトリックの信仰」P45)。

このカトリックの信仰は、イエス御自身のみ言と何と大きく食い違っているこ



とであろうか。

「イエスは言われた。イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である『この民は、口さきでわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教えとして教え、無意味にわたしを拝んでいる』。あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」(マルコ7:6-8)。

ブルノー博士の言葉のように、聖書と伝説は確かに二つの流れであるが、聖書は神の御座から流れ出る生命の水の流れであり、清く澄んだ真理の言であって、これを飲む者は決してかわくことはないが、伝説は人間の教え誤謬に満ちていて、真理の敵サタンから流れ出て、神の民の信仰を失わせるため、また人間を欺き、亡びに至らせるための濁った毒流のようなものである。

カトリック教会は公然と日曜日を聖日として守っている。何故かと言えば、彼らは聖書にそう書いてあるからではなく、伝説に従って守っていると公にそう宣言しているのである。

カトリック教会はその教理問答書で次のように言っている「プロテスタントが週の第7日目安息日を守らないで、その日を汚しているのは、決して聖書的ではない。土曜日を汚すことにおいて、彼らは神の御命令にそむいているのである。日曜日は決して聖書によって命じられている休日ではない。「それにもかかわらず、プロテスタントはこの日を守ることは救われるために必要だと言っている。キリストが復活されたから日曜日を守ると言うのは、全く聖書的な根拠一つないことである。キリストが昇天されたのが木曜日だから、我々は木曜日を聖日として、キリストの昇天を記念すべきであると言うのと何らかわりはない」(ステーブン・キーナン神父「教義、問答書」P352)。

## 第24章 安息日から日曜日へ

1. イエスと使徒たちも正しい第7日目安息日を守った。旧約はもちろんの事、クリスチャンは唯一の真理の源泉とする新約聖書を隅から隅まで探しても、日曜日が聖日になったという証言は全くない。しかし、教会は長い間、日曜日を守ってきている。この変化はどこから生じたのであろうか。
2. 教会で日曜日に集会を開いたという記録を残している信頼すべきものは殉教者ユスティヌス(紀元後140年)のものを初めとする。彼はクリスチャンが集会を開き、使徒の書を読んだと言う。しかし、彼は日曜日が神によって制定された聖なる日であるということは全く語っていない。この頃から教会が次第に変化し、異教化し始めた。
3. バプテスト派の教会史家ロビンソンはこの時代の変化について次のように記している。「2世紀の終り頃になると、殆んど教会に新しい傾向があらわれだした。始めの単純さは失われだした。昔の弟子たちは墓に入り、その子孫がこれに代り教会の働きも新奇な姿を呈するようになった」(「教会史探究」第6章P51)。
4. 教会が全体として日曜日を休むようになったのはまだ後になってからである。歴史家コールマンは言う。「紀元5世紀になってもユダヤ人の安息日を守るクリスチャンの教会があった」(「古代キリスト教会の事実」26章2節P257)。また彼は言う「キリスト教会の初期には、日曜日が安息日と称せられたことはなかった。安息日は週の第7日のことにきまっていた」(同26章)。
5. 聖公会のT・H・モーラー博士は記している「原始教会は安息日を非常に尊んだ。そしてその日を敬虔と説教をもって過した。聖書のあちらこちらに記されているように、この習慣は使徒たちから引き継がれたことに疑いの余地はない」(「主の日の対話集」P189)。
6. ルター派のH・C・ハグドベイトは次のように語った「教会史の最初の500年間において、安息日が週の第1日に変わったということを語ったものはない」(「教会史」P79)。
7. 最大の教会史学者ニャンダー博士の証言「日曜日の祭日は他の諸々の祭日と同

じく人間がきめたものである。使徒たちは日曜日を聖なる日とするなど夢にも考えたことはなかった。とんでもない、初代の使徒的教会が安息日の戒めを日曜日にかえるという事など使徒たちの意志ではなかった」(「キリスト教と教会の歴史」1巻P186)。

8. 初代キリスト教会の時代に、太陽礼拝を中心とした異教ミトラ宗が流行した。その原理は魅力的で、かなり高度の道德性をもつように思われていた。ミトラ宗はカエサルや軍隊、文化人の間にひろがり、ローマとアレキサンドリアはこの宗派の中心となった。大英百科辞典(ブリタニカ)によればミトラ宗は「3世紀の中頃には今にもローマ帝国の国教にでもなりかねない勢いで、キリスト教の大敵と見なされた。その主な教義は靈魂不滅、ベルやローソクの使用、聖水や聖餐、日曜日の聖化、12月25日の祭日等であった」(第11版「ミトラ」の項)、「ミトラは常勝の太陽神と思われていたので、ミトラ教徒は日曜日を聖別した」(C・P・ポールマン「日曜日」P 3)。「ミトラ教徒は日曜日を聖日とし、12月25日を太陽の誕生日として祝った」(フランツ、キューモント博士「ミトラの秘儀(1910)、P190、191)。
9. ミトラとキリスト教とは死闘を演じた。教会はかなり背教していたので、指導者たちは世と妥協することを選んだ。ミトラ教徒の多くも教会員となり、ある者は教会の指導者となった。心に変化なく、名のみ教会員となった異教の改宗者は、日曜日に対する尊崇の念と、ミトラの祭日に対する習慣とを心中に残していた。これらの指導者たちは、異教徒たちをキリスト教に改宗させ、キリストの福音を宣伝するため、ミトラの教義を教会で採用することを決議した。その中の一つが日曜日の祭祀である。
10. 「キリストの教会は異教の哲学を導入した。そしてそれをもって異教に対する盾とした。ローマのパンテオン即ちもろもろの神を祭った神殿を、全ての殉教者に聖なるものとした。これは現在でも残っている。異教の日曜日をクリスチャンの日曜日にした。異教のイースターをとり入れ、これを教会の祭日とした……太陽は異教の神々のうちで最大のものである……あの光々しい、王を思わせる太陽は、義の太陽と言われたイエスを表現するのに、最適なものである。昔の異教の名前を残して、聖なるものとして献げ、奉納せよ、かくして、日曜日という異教の名前、光明と平和の神、ボールダーに献げたその日がついにクリスチャンの聖日、イエスに聖別した日となったのである」(「カトリック世界」1894年、58巻、348網、P809)。
11. 日曜日祭日と共に、早朝東方からのぼる太陽を拝む習慣が教会に入ってきた。あのまばゆいばかりに輝く旭日に頭をたれ、目をして、「我らを憐み給へ」と敬虔な祈りをささげるようになった。「教会は異教の祭りを厳粛にとり行った。全

く、異教徒と何の相違もなく、ただ異なるのは、彼らと一緒にしないだけのことである」(「ファスタスがアウグスティヌスに出した書翰」ジョン・ウイリアム・ドレーパー博士「ヨーロッパ文化発達史」第1巻、P310)。「土曜日から日曜日への変化は、公式に行われたのではなく、序々に、また誰も気がつかないうちに実現した」(執事長F・W・ファラー「シナイ山からの声」(1892)P167)。

12. 「救主の降臨から900年ほど後になって、東方で始めて日曜日に農業を禁止するようになったが、殆んど同じ頃、西方もそれに従うようになった」(聖公会、ピーター・ヘイルン博士「安息日の歴史」2部、5章6節)。
13. 「日曜日の起源とその教義の発展の歴史を煎じつめて見ると、結局はこうなる。すなわち、日曜日に安息日の名と印とを与えたのは、使徒たちでもなければ、初代のクリスチャンでもない。昔の教会々議でもなく、実は中世の教会、そしてスコラ教師たちなのである」(ノルウェーのグリムルト監督、「日曜日の歴史」P 37)。
14. 日曜日の歴史の上で、忘れてはならない顕著な事件は、ローマ皇帝コンスタンチヌスによる日曜休業令(321年)である。「尊むべき太陽の日」に町でも村でもすべての者は「農民」を除いて皆この日に働きを休むべしというものである。農民が除外されたのは、種蒔き、刈入れ等どうしても日曜日だからといって休めないからであると説明されている。

この命令は神から出たものではなく、異教の大祭司と公認されているローマ皇帝が、異教(ミトラ)の太陽の日を尊んで定めた法令である。「主の日」を尊ぶ心から出たものではない。上記農民除外はミトラ教を信じていた農民が非常に多かったからだとも言われている。コンスタンチヌス大帝は決してキリスト教のためにこの法令を出したのではなく、むしろ、ミトラ教を強要したのであろう。

皇帝はこの命令によってクリスチャンにも異教徒にも太陽神の祭りを強制した。太陽礼拝を国民の義務とし、キリスト者が日曜日に働く事を禁じ、それを民法上の犯罪とした。その当時、日曜日に働いていたクリスチャンが相当あった事は確かである。コンスタンチヌス帝は当時純心なクリスチャン皇帝ではなかったばかりでなく、偶像礼拝と供犠とを奨励し、自ら異教の式典をとり行っていてこのような法令も異教徒たちの関心と支持を得、その反乱を防ぐために外ならなかったとも言われている。

ネブラスカ大学教授のフットン・ウェブスター博士は言う「コンスタンチヌスの法令はキリスト教とは何の関係もないものであろう。反対に、皇帝は異教の大祭司の権限を用いて、当時ローマで大いに流行していた異教の神聖な暦を

構成する祭りに新たに太陽の日を追加したにすぎなかったと思われる」(「休日」P122)。同博士はまた次のように語った「偶像教的法令が終りにはキリスト教的なものとなってしまった。紀元4、5、6世紀にわたる皇帝の統治のうちに、日曜日に労働を厳禁するこの法令は一層強加された」(「休日」P270)。

「偶像的な太陽の日を週毎にクリスチャンが記念するようになったのは、偶像教とキリスト教とが融合した結果である……ローマ帝国内の相互に異った宗教を一つの制度の下に一致和合するのが皇帝の望む所であった」とアーサー・P・スタンレー博士は断じている(「東方教会史講義」第6部、15節P184)。

「コンスタンチヌス帝の日曜日休業令を過大評価してはならない……この法令は神の律法の第4条やキリストの復活と何の関係もない。その上、異教徒が多かった田園に於ける農業を労働から除外している……クリスチャンも異教徒も祭りや休日にはなじみが深かった。コンスタンチヌスはこの休日を一致させ、日曜日を優先的にした」(フィリップ・シャフ博士、キリスト教会史、3巻、P 380)。

15. 教会会議(オルレアン第3会議)で日曜日に農業を止めるように推奨したのは538年のことであった。それによってより多くの人々が教会に出席するように決議した。
16. 「古代のクリスチャンはユダヤ人の守る7日制の週期を引ついだ。3世紀の終り頃になると日、月、火、水という天体の名称を用いるようになった。4、5世紀になると、異教の名称が、西ローマのクリスチャン教会で一般的に採用された。クリスチャンが天体的名称を使用するようになると、異教からキリスト教に改宗した者によって日月星辰に関する迷信が大いに流行するようになった。当時東洋の天体崇拜宗教であるミトラによる太陽の日が土星の日を圧倒してきた……そしてこの偶像の日がキリスト教に宿換えするに至った」(フットン・ウェブスター博士、「休日」P220、221)。

## 第 25 章 ローマ法王権と日曜日

1. 太陽礼拝は2、3世紀にローマにおいて非常に盛んになった。シリアの太陽神エメサは皇帝マクリヌスによってローマの神々の最高神なりとされた。皇帝は太陽神の名エラガバルスをとって自分の名とし、自らその大祭司である所から自分もまた太陽神として礼拝を受けた。人々は年若い皇帝の行きすぎた行動にはあきれたが、それにも拘らず太陽汎神論のようなものが流行し、それが多くの東洋宗教と結合した、アウレリア人はそれを国教の最高の礼拝とした」(H・ステュアート・ジョンズ「ローマ史の友」P302)。
2. 「エラガバルスの名によって、太陽礼拝こそ、一切の礼拝に優先するものであると公けに宣言された」(ヘンリー・ハート・ミルマン「キリスト教史」第2巻、8章、22節)。
3. 「もちろん、教父やその他の資料によって日曜日が礼拝日として初代キリスト教会に入ってきたことはよくわかっている。しかし、日曜日が異教のしるしをもって焼印をおされ、太陽神の名によって讃えられ、墮落法王権によって採用され、聖別され、そして聖なる遺産としてプロテスタントに明けわたされたとは何たることであろう(エドワード・T・ヒスコックス博士「バプテスト、指針」1893年11月13日ニューヨーク市、教役者会において発表)。
4. 「プロテスタントは聖書のみと叫び、カトリックは聖書よりも伝統を尊んでいると言っている。にも拘らず、プロテスタントは日曜日の問題は、聖書的根拠がないため、カトリックに迎合している。いつから日曜日になったか、余りはっきりした線はひけない。誤謬はいつも長い期間を通じて入っている。

第7日目安息日は十字架で廃され、それ以来教会は日曜日を守っているといかにも確実な事実のように言う人々があるが、私はどうしてそんなことが言えるかその人々の心根を疑う。余程無知であるか、不正直であるかによる。

日曜日が教会に入ってきた時、それは安息日としてではなく、日曜日という名であった。それは昔太陽礼拝の日であった。何故太陽の日が教会に入ってきたのであろうか。そのわけはこうである。初代キリスト教徒は異教徒の蕃族伝道の



時、まず酋長にあってキリスト教の伝道をした。彼が回心すると、何百人、何千人の部下に洗礼を命じた。この部下たちは偶像教徒で、太陽礼拝をしていたが、隊長の命によりクリスチャンになった。表面的には、教会員になったが、日曜日はそのまま守りつづけて、しまいには土曜日安息日は教会から忘れられてしまうようになった。もちろん、これらの部下のある者は本当にクリスチャンになったが、安息日と共に日曜日も守った……単なる休日または祭日として導入された日曜日もだんだん重要性がましてきてきた。半回心の異教徒がふえるにつれて、聖なる真の安息日は影を薄めた……そして紀元538年のオルレアン会議では、ローマ全国における日曜日休業が命令された。パレー博士が言うように、日曜日は教会の制度となり、教会は預言されたように神の聖徒を迫害するに至った。紀元538年に教会は日曜休業令を発令し、それから1260年間大迫害を行ったことは決して偶然な出来事ではないと思う」(D・M・キャンライト(SDAの時に書いた)「幕屋講演」第10話P76－83)。

5. J・N・アンドリウスは「安息日の歴史」の中で次のように記している。「バウワーが詳しく説明しているように、コンスタンチヌスは政治機構そっくりの教会機構を設け、教職の階級、秩序、組織等を創設した。主教や大都會の司教は教区の監督の上位にあったが、教職全体を統轄する最上の役職はなかった。それがニケヤ会議によって、ローマ市に榮譽を与え、ローマ司教を最高位に坐する司教であるとの決定がなされた。それはただ名譽ある称号で実権は伴わないものであったが、後には権限を有するものとなった。ローマの司教は間もなく、教会の信仰を代表する存在となった。そしてローマと一致するものが正統、不一致のものが異端と思われるに至った。

ある人の言ったように、コンスタンチヌスが教会を弾圧するような事をしなかったならば立派な政治家であつたらう。しかし、帝国の利益に役立つ党派の人々は皇帝を喜ばせたが、それ以外のクリスチャンは皇帝の迫害を受けた。皇帝に喜ばれたグループとはローマの司教のグループであつた。ローマ帝国の首都の司教に教会の頭、教職の首なる権限が与えられたのはそういう訳だからであつた。有名な教会の規定が作られたニケヤ会議は皇帝の司会によつたものである。こうしてローマ法王権、ローマ教会の聖職政治の基がおかれるに至つた」(1895年「キャンライトのSDA攻撃に対する弁証論」P148、149)。

6. コンスタンチヌスの日曜休業令が發布されてから暫らくすると、教会は、会議を開いて、法王や司教等は日曜日を宗教化するように力を益した。その頃になると教会の背教の色は濃くなった。異教の儀式、礼典が教会で採用され、神の戒めや新約聖書の式典が無視されるようになった。死者は感覚を持っているという教義、魔術、心霊術、滴礼、幼児洗礼等が教会内に入りこんできた。間もなくミサが主の聖餐に代ってしまった。イエスの代りにマリヤが神と人との間を仲保するように教えられた。人間の司祭が大祭司キリストの働きを取りあげてしまった。告解の制度が実施された。法王権は強大になった。しかし、最高頂に達したのはもう少しあとの事であった。これらの背教の最大事は教会の権威によって異教の祭日である日曜日をクリスチャンの安息日の代りに設定したことに他ならない。教会はこれを皇帝の法令として強制した。日曜日遵守を教会法で強要した最初のもは紀元後364年頃で、それはラオデキヤの教会会議の時であった。
7. 「クリスチャンはユダヤ化して、土曜日(始めは安息日)になまけていてはならない。その日に働くべきである。しかし、主の日は特に尊び、クリスチャンとして出きる限り働きを休むようにすべきである。もし、クリスチャンがユダヤ化すれば、キリストから棄てられるであろう」(チャールズ・ヨセフ・ヘフェレ牧師、博士、「教会会議史」第6巻、93節、「教会法令集29」第2巻、P.316)。
8. 364年のラオデキヤ会議で、ユダヤ化とユダヤ人の守っていた土曜日安息日がかくも強力に禁じられたという事は紀元後4世紀になっても、聖書的な第7日目安息日を守っていた教会が沢山あった事を意味しているのではないか。キリストから呪われ、棄てられるとおどされて、クリスチャンたちは強制的に安息日から日曜日に切換えさせられた。ローマ皇帝とローマ法王との命令は絶対的のものであった。背教した教会が、異教から改宗した多くの信徒の支持を得て、日曜日休業令を宣告したので、それが聖書的な根拠を有したか否かは全く彼らの胸中になかった。キリスト教を改悪した。そして新しい休日を設定した。これが本当の話である。ラオデキヤ会議後多くの会議が開かれたが、どの会議も日曜日休業を支持し、強化した。西方の教会、ローマやアレキサンドリア等が日曜日遵守を先導した。やがてローマが最高の権力をふるうようになり、狂気じみた努力によって全教会にこの新しい日曜日休日の教義を浸透させた。
9. 歴史家ソゾメンは次のように書いている。「コンスタンチノブルやその他のいくつかの都市の人々は安息日及びその次の日に集会をもった。ところがローマとアレキサンドリヤではこの習慣は行われなかった」(「教会史」324年から440年までの部、第7巻、19章、P.355)。
10. 歴史家ソクラテスは380年頃に生れ、ローマ司教が安息日遵守者を弾圧した時

に生きていた。ローマ帝国内を旅行し、自ら見たことを書にあらわした「世界中の殆んど全て教会は毎週安息日に聖なる秘義を祝っていた。しかし、アレキサンドリヤとローマのクリスチャンは、古い言い伝えに従って安息日を守ることを拒んだ」(「教会史」第5巻、22章、P404)。

11. ローマの教会が異教の日曜日をクリスチャンの安息日に代えたことは史実によって明らかである。東方の教会もだんだんとローマの範にならった。ラオデキヤ会議から日曜日遵守が一層厳しく強要された。それ以来、クリスチャン皇帝、王、教会、公会議、司教会議等は力の限りを尽くして、東方、西方の全教会、全信徒にラオデキヤ会議の教会法規をおしつけ、日曜日の聖日たるの所以を強調した。シャルルマーニュほどこれに忠実な王はなかつただろう。法王や司教等の無数の教書や法令等により繰返し繰返し、同じことが命令されたが、遂に教会の権威を無視して、真の安息日を固守する者に対する迫害が行われ、多くの忠実なるクリスチャンの血が流された。

コンスタンテヌス帝の時のローマ司教シルベスターは日曜日を主の日とよぶように命じた。

12. ローマ法王レオI世は5世紀にアレキサンドリヤ司教に教職の按手は安息日ではなく、日曜日に行くべきであるとして次のような手紙を書き送った。「主がたてられた諸教会の司祭の按手は日曜日にのみ行われるべきである。この日は主の復活の日で、土曜日の夕刻から始まり、数多くの秘蹟によってその聖なることが確認されている。この日に世界の創造が始まった。キリストの復活により、死は滅ぼされ、生命が始まった。主から使徒たちが世界伝道の命令を受けたのもこの日であった。聖なる使徒ヨハネの言うように、復活後に主がとざされた室にあらわれ、聖霊を受けよと云われたのも日曜日であった。またペンテコステの聖霊の降下により、主はこの日こそ聖職の献身礼を行う日であると指示された。あらゆる賜物と恵みがその日に与えられるのである」(大意要訳) (法王書論、No.9)。
13. 西ローマ側では、前記のオルレアン会議が紀元538年に開かれ農民も農事を止めて、教会に出席するように命じられた。東方では大分おくれて、9世紀の皇帝レオ6世が同じような法令を出している。「聖霊の正しい御旨とそれに導かれた使徒たちの教えに従い、聖なる日曜日に我らの清廉が守られ、休息と労働よりのいこいが与えられている。故に余らは、農夫もその他の全ての者もこの日に禁じられている労働に携わらないように命じる」(大意要訳) (ロバート・コックス「安息日問題に関する文献」第1巻、P422)。

14. デンマークのスカト・ロルダム監督はこの聖日の変更の責任はローマ法王であるとして、次のように宣告した。「新約聖書には何時、どのようにして週の第1日を守る習慣が始まったかについては何も書いていない……。

紀元321年にコンスタンチヌス大帝が都市の官吏も商人も皆日曜日に仕事を休むべきであるが、田舎の農夫はこの限りではないとしたのが最初の法律であった……。この大帝の法令を神の十戒の第3条(第4条)に関係づけたのは6世紀の前半になってからである。その時から次第にこの日曜日の教義が強調され、西洋中世、すなわち、暗黒時代を通じて、聖なる教会とその教師たち、ローマ法王を首とする聖僧たちは、自らキリストの代官とその使徒たちと称して、旧約の安息日の栄光と神聖さを週の第1日にうつしかえてしまった」(P・タンニング「コペンハーゲン第2回教会々議報告書」1887年9月13 - 15日、P40、41)。

## 第26章 獣の印と日曜日

1. 結局、正当な安息日を棄て、偶像礼拝者の太陽の日を教会に持ち込み、これを主の日としたのはローマ法王であったのだろうか。あるいは教会会議か、またはローマ皇帝であったのだろうか。カトリックの歴史学者ヘフェレは次のように言う。「古代の教会会議の命令は皇帝及び法王によって確認された。しかし、後の会議の命令は法王のみである」(「教会々議の歴史」第1巻、325年迄の部、P42)。

「教会々議の法令はローマ法王の協賛がなければ効力がない。どんなに大勢の司教や監督が集まっても、法王の同意がなければ何の権威もない……」。

「法王の是認が会議の決定を不可謬にした。法王が信仰及び道德に関して公会議の決定を認許した時のみこの不可謬の権限を発動することができる」(同、P52)。

聖書には全く記録されていない安息日の変更をあえてやったのはローマ法王だとはっきり言うことができる。

2. ローマ法王の権力に関してカトリック側の証言をいくつか挙げてみよう。

「法王は教会法の下にあるものではない。法王が教会の為と思えば教会法を修正したり、廃棄する権限を働かすことができる」(カトリック百科事典12巻「法王」の項、P268)。

「法王は非常に大きな権威を持ち、非常に高い地位にあるので、普通の人間ではなく、あたかも神の如き方であり、神の代理者とも云うべき者なのである」。

「法王は最高権威をもつ最も優れた方であって最高の司教と呼ばれている」。

「彼は聖なる君、至高き皇帝、王の王のような方である」。

「彼は全世界(全宇宙)教会の監督である」。

「法王は天上、地上、三界の王として三層の冠をかぶっている」。

「ローマ法王の首位権及び権能は決して天上、地上、地下に限定されず、天使たちよりも優れているので天使の上にもその権力は及んでいる」。

「天使たちが間違っって信仰をあやまり、また信仰にさからうことを考える時があるならば、法王は彼等を裁き破門する事ができる」。

「彼の権威、権力は非常に大きいので、法王はキリストと同じ法廷を持つことができる」。

「多くの博士たちの意見では、法王の行うことは何であれ、神の行為と思われるというのである」。

「法王はあたかも地上にある神、キリストの忠実な僕たちの王、王の王であって、全権を神の全能の命によって与えられ、地上の国々及び天上の国の統治をもまかせられている」。

「法王の権限と権力は非常に大きいので、聖なる律法さえも修正したり、解説したりすることができる」(フェラリス教会辞典「法王」の項)。

3. カトリックの教理問答書は公認されたものであるが、そこには次のような明快な問答が記されている。(問)どの日が安息日ですか。(答)土曜日です。(問)どうして私たちは土曜日でなく日曜日を守るのでしょうか。(答)私たちが土曜日の代りに日曜日を守るのは、カトリック教会がラオデキヤの会議(336年)で土曜日の神聖さを日曜日に移したからです」(ピーター・ガイエルマン「求道者へのカトリック教理問答書」1910年)。
4. カトリックの権威によって土曜日から日曜日への移行が行われたことは既述の通りである。もう一度重要な点を反復すると次のようになる。
  - ① 日曜日を祝うことはもともと異教徒から起こった。



- ② 2. クリスチャンの制度として日曜日を守り始めたのはローマ・カトリックの制定したものである。
- ③ 3. カトリック教会の会議の決定、法王の教書、カトリック皇帝の法令、ローマ法王の承認した公会議の法令等によって土曜日から日曜日に聖日を変更するに至った。

であるから、ローマ法王が変えたとはっきり言うことができる。

- 5. ここで途方もなくおそるべき事を明らかに預告している聖書の預言について読者の注意を促したい。旧約のダニエル書7:25にこの神の律法と時を変更しようとする権力に関する預言がなされている。「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にとわたされる」(ダニエル7:25)。

この権力は42ヶ月または1260日の間その権力をふるうと言われている。(黙13:5、12:6)、預言の時は1日が1年に当るから、この期間は1260年を意味する。この権力はローマ法王であるということは預言研究者の一致した見解である。この期間は538年から1798年までと理解されている。538年は例のオルレアン会議が開かれ、農民も仕事を休んで日曜日に教会へ行くことの決議が行われ、全ローマ国内の国民全体が偽りの安息日を強要された年に当る。そしてそれから1260年たつと、1798年になるが、この年ナポレオンの命により、ローマ法王権が崩壊し、ピウス6世はフランス軍に捕らえられ、翌年配所で死んだ。この間、この権力は至聖至高の神に反逆し、自ら神の如き者と称して神を冒瀆し、神の民を迫害し、神の律法と時を変更しようとして力を尽くした。

神の律法は10の戒めから出きているが、そのうちの9つの戒めについては、誰でもそれらが今も有効であることに異存はない。しかし第4条の安息日の戒めについては殆んどのクリスチャンがこれは廃止されたと言う。ところが十戒のうち、時に関係があるのはこの4条だけである。神は安息日を人間が守るように、そして俗事や労働によってこの日を汚さないように命じておられる。

さて聖書の預言によれば、背教者が起こって神の戒めと時を変えようとすることが示されている。これは十戒の第4条の安息日の変更以外ならぬ。そして、小さい角で象徴されたローマ法王権がこれを行うというのである。カトリック教

会は果たして自分がその事を行ったと認めているだろうか。もしカトリック教会がこれをはっきりと告白すれば、もう一点の疑いもない。

6. カトリック理問答書に次の様な質問、応答が書かれている。

Q. 教会が祭日や聖日を命じる権力をもっていることをどう証明するか。

A. 安息日を日曜日に変更したその行為によって証明できる。

(教理要約、P58)

7. Q. 土曜日である昔の安息日を棄てて、日曜日を守ることにはどんな根拠があるのか。

A. 我々はカトリック教会と使徒的伝説の権威によってそれを行った。

Q. 聖書の中に日曜日を安息日の代わりに守れという言葉があるか。

A. 聖書は教会の命に従うようにと教えている……しかし特に安息日の変更については語っていない。

(カトリック、クリスチャン教導書、P209)

8. 「我々は活ける神の教会、真理の柱、真理の基である教会の権威によって、信仰箇条と同様土曜日の代りに日曜日を聖日とした。プロテスタントは何の権威をも有していない。なぜなら聖書の中にはそれを命じている所はない。そして聖書以外の権威をプロテスタントは認めようとしない。実のところ、プロテスタントもカトリックも共にこの問題(日曜日聖守)では伝説に従っているのである。我々カトリックは伝説を神のみ言の一部と認め、教会は正当な保持者(伝説の)、注解者であると信じている。ところがプロテスタントはいつも伝説を誤り多く頼ることができないものと否定しながら、この件では伝説を受け入れている」(要約) (グリフトン、トラクト、4巻15頁)。

9. 「貴方が聖書を創世紀から黙示録まで読んでも、その中で日曜日の聖化を命じ

ているたった一行も見出すことはできない。聖書は土曜日を信仰的に遵守することを命じている。我々は決して土曜日を聖日とは認めないのである」(枢機卿ギボンズ「父祖の信仰」1893年版111頁)。

10. ここで注目すべきことは、カトリックの方がプロテスタントより理路整然としていることである。カトリックは聖書と伝説とを信じている。安息日から日曜日に聖日を変更したことは全く伝説に基づくもので、聖書的根拠は何もない。プロテスタントは聖書のみと主張していながら、非聖書的な日曜日を守っている。
11. プロテスタントの学者はこの点をどう考えているだろうか。「キリスト及び使徒たちが7日目の安息日をその権威によって週の第1日に変えたという現代の考えは全く何の根拠もないものである」(レーマン・アボット、1890年6月26日「クリスチャンの結論」の社説)。
12. 一体聖書のどこに週の第1日を守れと書いてあるのか。我々は第7日目を守るように命じられている。そして第1日を守るようにという命令はどこにもない……我々が第7日の代りに第1日を守るのは、他のいろいろな事と同様、聖書ではなく、教会が命じたから守っているにすぎない」(アイザック・ウイリアムズ牧師、教理に関するわかり易い説教(聖公会)第1巻、P334-336)。
13. 「ローマ教会は徹底的に背教した……神のみ言が教える安息日を廃し、日曜日を聖日にするによって律法の第4条を変えてしまった」(N・サンマーベル博士「キリスト教会史」P417、418)。
14. 安息日を変えたのは全くローマ教会の権力のしるしであるとの公然たる主張により、SDA教会は、黙示録13章の獣はローマ法王権であり、そのしるしは日曜日であるとの見解を持つに至った。

「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った。『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと子羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』(黙示録14:9-12)。

## 第 27 章 世界各地の安息日

1. SDAの攻撃者D・M・キャンライトは真理の敵を代表して「安息日は世界中の人が同時刻に守ることはできない」と言う。そのくせ、日曜日を守る上では何の問題もないと言う。一体どういう事なのであろうか。

「神の民は全世界で同じ時刻に聖日を守ることは不可能である。たとえばインドの土曜日はアメリカよりも12時間も早く来る。だからインドの土曜日が終わってからまだ12時間もアメリカの土曜日は終らない。オーストラリアではアメリカのカリフォルニアより8時間早く1日が始まるということは、オーストラリアの兄妹方が安息日を守っている時にアメリカ太平洋岸の兄妹は8時間も働いている訳である。アメリカ国内でも西部と東部では3時間も4時間も違う。一方では聖日を守っているのに、他方では同じ時間に働いている。世界中に散在している七日目安息日信奉者は決して同じ時刻に神の命に従って安息日を守ることはできない」(SDA批判 P174)。

また日付変更線の問題もある。例えば日本からアメリカに旅行する者は途中で1日追加し、反対にアメリカから日本に来る人々は1日をへらす。このように日がふえたり、へったりするとすればどうして正しい安息日が守られるであろうかというのである。

またある人物がある地点から飛行機に乗って1時間に1000マイルの速度で西方へ飛ぶとする。地球の回転も同じ速度であるから、この人物は24時間後出発地に帰りつくが、その時も昨日と同じ昼頃である。さて、彼が日曜日に出発したとすると、翌日同じ地点についた時は同じ日曜日の昼だろうか、または翌月曜日の昼だろうか。

また6ヶ月も昼ばかり、また夜ばかりの極地において安息日を守ることができらるだろうか。キャンライトは守れないと言う。同時に彼は日曜日は守れると言う。半年間昼が続く時には太陽の位置によって時は容易にわかるし、夜ばかりの時は星の位置によって日の始まりと終りとは、はっきりわかると言う。安息日を守るのに全く問題はないと天文学者は答える。

神が天地を創造し、安息日を制定された時、神は御自身の造った地球が円い事を御存知であった。問題は各自が住んでいる所で第7日目を守ればよいので世界の他の所に住んでいる人々のことを心配する必要はない。また神は全世界同じ時間に人々が安息日を守れと言われたのではない。

地球の各地では一日の始まりが皆違っている。「神は二つの大きな光を造り、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどらせ、また星を造られた。神はこれらを天のおおぞらに置いて地を照らさせ、昼と夜とをつかさどらせ、光とやみとを分けさせられた」(創世記1:16-18)。地球上の地点によって日の出、日の入が違うから、おのずと安息日の始まりと終りが違ってくる。しかし、そのいる所でめぐってくる安息日を守るように神は意図されたのである。何処にいても、自分に与えられた安息日を守ることを神は求められるのである。

2. 次に神の印と獣の印の問題をもう少し、聖書から掘りさげて考えて見よう。まず、神の印であるが、これはキリストの再臨直前に起る運動として、神の僕たちの頭に神の印をおす働きが全世界的に行われることが聖書にはっきりと預言されている。「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかつて、大声で叫んで言った。『わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』」(黙示録7:2、3)。

神の印とは何であろうか。印は三つの特徴をもっている。①印を持つ者の名前(カーター)、②その人の地位または権威(アメリカ大統領)、③その人が支配している領土(アメリカ合衆国)、この例に従えば①神、②創造主、③天と地、全世界、または宇宙、これらを一括している神の印がどこかにあるだろうか。

イザヤは次のように言う。「わたしは、あかしを一つにまとめ、教をわが弟子たちのうちに封じておこう」(イザヤ8:16)、下句の「教」は英訳では「律法」となっており、「封じておこう」は「印をおす」という言葉になっている。"Seal the law among my disciples"(キング、ジェームズ欽定訳)。これによると神がその弟子たちに律法をもって印を押されると言うわけである。さらば、神の律法のどこにこの印が見出されるだろうか。

律法の第4条以外のどこにも神の印はない。「イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない。これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである」(出エジプト記31:16、17)。すなわち安息日は神と人との間のしるしであると言われている。「安息

日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない……主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記20:8-11)。この律法の第4条に「あなたの神、主」(名)、つくり主(地位、権威、肩書)、「天と地と海とその中のすべて(領土)がはっきり表わされている。第4条の安息日こそ神の印であって、真の神、天地の創造主を信じて、心をささげる者には、神の戒がその心に刻みつけられる。その時、聖徒は「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩40:8)と叫ぶことができる。キリスト再臨直前に神の律法の回復運動が全世界に行われる。「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ24:14)。これが福音宣伝の全世界的働きである。キリスト昇天の際の命令がこれによって完成される。「イエスは彼らに近づいてきて言われた。『わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。そのゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいの事を守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである』」(マタイ28:18-20)。「キリストが命じておいたいっさいの事」、この中に神の律法を守る事、その中に第4条の第7日目安息日を守ることが含まれている。またキリストが命じられない一切の事を教えてはならない。その中に偽安息日である日曜日が含まれている。

3. キリスト再臨の直前、7つの災がまさに降下しようとしている時、地上の住民に与えられる最後の厳粛な使命が黙示録に記されている。「ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った。『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』」(黙14:9-12)。

獣の印とは何を意味するのであろうか。また獣、また獣の像とは何か。再び黙示録を引用して、キリスト再臨直前の暗黒時代に、神の民を迫害する「獣」につ



いて、また「獣の像」をつくる団体について預言された所を考えてみたい。

「わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、頭には神を汚す名がついていた。わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のものであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拜んで言った。『だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか』この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。地に住む者で、ほふられた子羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拜むであろう……」。

「また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である」(黙13:1-8、16-18)。

神を冒瀆し、聖徒を迫害し、42ヶ月(1260日、預言の1日は1年であるから1260年間、紀元538年ローマ市を占領していた東ゴート族が退却した時から、ナポレオンの軍によって法王ピウス6世が捕虜となり、一時法王庁が解体した1798年までを言う)が天下を支配した勢力はローマ・カトリックに他ならない。この政治と宗教を結合した団体は中世時代に何千万という神の僕たちを殺した。異端討伐十字軍や宗教裁判所等によって猛威をふるったこの組織も1260年の終り、致命的な重傷を負ったが、不思議にも、その傷は徐々にいやされ、1929年ムッソリーニによってその権力が認められ、現在では世界各国の大使、公使がバチカンに派遣され、全世界の7億に及ぶカトリック教会組織を誇っている。この教会はやがて預言されたように、地球上の全人類に偽りの安息日である日曜日、ローマ教会がその権威によって設立したその日を強制し、獣の印を全ての生きとし生ける者の額と手に押すことになろう。

その証拠には、人間の数字と言われる六百六十六がローマ法王が愛好した

三層の冠の上に書かれたラテン語の名「神の子の代理者」ウィカリウス・フィリー・ディ(VICARIUS FILII DEI)であることは何と驚嘆すべきことであろう。すなわち、ラテン語は数字にも直せるが、これを直すと丁度6 6 6になる。

$$\begin{array}{cccccccccccccccc} V & I & C & A & R & I & U & S & & F & I & L & I & I & & D & E & I \\ | & | & | & | & | & | & | & | & & | & | & | & | & | & & | & | & | \\ 5 & 1 & 100 & 0 & 0 & 1 & 5 & 0 & & 0 & 1 & 50 & 1 & 1 & & 500 & 0 & 1 \\ = & 6 & 6 & 6 & & & & & & & & & & & & & & \end{array}$$

我々は神の印を受けるか、獣の印を受けるか、二つのうち一つを選ぶことになるであろう。その時、神に忠誠を誓う者は誰であろうか。

## 第 28 章 古代ローマ法王権の発達

1. ウォルター・マルチン博士が1957年に出版した「SDA主義の真相」(The Truth About Seventhday Adventism)の中でホワイト夫人の著した各時代の争闘の中の「7日目から週の1日目に礼拝日を変えたのはローマ法王である」という言葉をとりあげ、一体どの法王であろうか、と反論した。そして西洋史上一般にローマ法王権なるものはグレゴリー大教皇が法王の座についた紀元590年以前には存在していなかったとつけ加えた。1960年代のマルチンから論ずれば確かにグレゴリー以前に法王権はなかったとの見解は了解できるが、19世紀下半のホワイト夫人やその当時の人々は法王権という言葉をどう解釈していたかが考慮されなければならない。
2. グレゴリー以前、はるか古代からローマ教会の発達ははなはだ顕著なものであった。ユダヤ人の都エルサレムが紀元70年にローマ軍によって攻撃され、神殿が火で焼かれ、また第2次ユダヤ戦争で132年エルサレムが完全に荒廃してしまった頃、すでにローマの教会は大きな有力な教会となりつつあった。ペテロとパウロの殉教や、昔からローマ帝国の首都であった伝統に支持されて、ローマ教会は他の大教会をしのぎ、権威のあるものとして仰がれるようになっていた。レオンのイレナエウスが185年頃、ローマ教会はペテロやパウロによって基をおかれた由緒深い教会であって、「この教会の最高権威については、全ての教会がローマ教会と同意見を持たねばならない」(異端反駁論3:3)と言ったことはもうすでにローマ教会が他の教会よりもまさった権威をもつものと思われていたことの証拠となる。
3. 次にイースター問題で、198年頃にはローマ教会とローマ司教とが指導的立場にあったことがわかる。ローマ、パレスチナ、アレキサンドリア等各地に会議が開かれたが、これらの教会会議は皆ローマの見解を支持し、ニサンの月の14日の夕説をすてて、イースター(復活日)は日曜日にすべきだとの決議をした。
4. 紀元200年頃には、ローマの権力は絶大なものとなり、ローマ司教は教会の会議には常に議長や司会役をつとめ、ローマ司教の同意なしにはどんな事項も決定されないまでになった。343年のサルデカ会議では司教間の論争はローマ司教によって調停されるべきことが決議された。それ以来司教や皇帝の依頼によ

ってローマ司教が仲に入って和解させた実例は多くある。366年にローマ司教になったダマススはグラチニアヌス帝から他の司教を裁判にかける権限を与えられた。

5. 第4世紀の教義論争はローマ司教の権限の増大に大きな助けとなった。インノケニチウス I (404年)は一切の教会争議の判決権、破門権がローマ司教に属することを主張した。また天下の教会の守るべき一切の規定を制定する権限を有することを宣言した。レオ 1 世(440-461)はペテロの首位権、及びペテロの伝承について公に主張した。ガリヤ、スペイン、北アフリカの諸地方を自己の実権統治下にありと宣言した。445年皇帝バレンチニアヌスⅢは全教会はペテロの首位権を与えられているローマ司教に服従すべしと布告した。レオはそれを実行した。
6. 3世紀にレオンのイレナエウスが歴代のローマ法王の名を書きつらねた系図を残しているが、それによると第 1 代の法王はペテロとなっていて、その後数人の法王が続いて位についている。3、4世紀の教会がローマ司教をキリスト教会の最高権威と仰いでいたことに間違いはない。ホワイト夫人が法王と言ったのはこれらの人々のことで、ある特定の法王のことでないことは明らかである。
7. このように考えればグレゴリウス I 以前にすでに法王権は存在していたし、またこれらの法王たちは、第7日安息日を弾圧し、日曜日を増大するために相当尽力していることは確かである。土曜日を断食の日と定め、日曜日を喜びの日と宣言した例もある。キリストの復活日を毎年日曜日にきめた例もあった。ユダヤ暦のニサンの月満月の日がキリストの死と復活の過越節であったが、この祝日と種入れぬパンの祝いは毎年違う日に当たっていた。キリストの復活の記念日は時により、火曜日、また水曜日等その年によって異なった。一時は全国の教会がこれを守り、特にエジプト、パレスチナ、小アジアの教会はこのユダヤ式伝統に従っていた。ところがユダヤ人が人々から嫌われ始めると、西方教会(イタリア、ガリヤ等)は教会の祝日をユダヤ式に計算して日を祝うことはけしからんと考えるようになった。キリストは日曜日に復活したから、復活の日曜日を尊び、聖書的安息日を軽視する様に力を注いだ。
8. 189年から200年頃ローマの司教であったビクターは小アジアの教会と論争して、彼に反対した小アジアの司教たちを破門した。この争いは3、4世紀を通じて行われたが、遂にローマ帝国内の全教会がローマ司教の主張に従う結果となった。日曜日は安息日に代わって人々の目に重要な日となった。かくして土曜日から日曜日の変更は何百年もの期間を通じて各時代のローマ法王によって実現するに至った。

9. 321年ローマ司教たちは皇帝コンスタンチヌスに働きかけて321年の法令を布告させた。

この法令では都会に住んでいる者は日曜日に仕事を禁じられた。343年から381年の間に開かれたラオデキア会議では「クリスチャンはユダヤ化して、土曜日に何もしないでいるようではいけない。土曜日には働き、その代り主の日を尊び、クリスチャンとして出きる限りこの日に仕事を休むべきである。もしクリスチャンがユダヤ化するならば、キリストからしめ出されてしまうであろう」と警告している。(教会法29、ヘフェレの諸会議、2巻6－93)。

10. 黙1:10ヨハネがパトモス島で主の日に異象を与えられた。その主の日は日曜日であると言う学者が多いが、最も古い文献は2世紀末のペテロ福音書という偽典である。その中にキリストの復活したのは主の日であると記されている(ペテロ福音書9:12)。しかし、この偽典は黙示録が書かれてから7、80年後に出されたもので、ヨハネの時の主の日は日曜日であった証明には不十分である。むしろ聖書の中で主の日と呼ばれる日は何かをしらべ、それによって決定する方が正しいと言わざるを得ない(SDAコメンタリー黙1:10)。これらの例句としてイザヤ58:13、創世紀2:3、出エジプト20:11、マルコ2:28等がある。
11. マルチン博士はその著書の中で「週の第1日が主の日であると記している数多くの教父の証言がある」と説いているが、我々としては教父の証言よりも聖書の証言を重視していると言いたい。マルチン博士が引用した教父の言葉を再検討して見よう。
12. まずアンテオケの司教、イグナチウスの言葉(107年)「もし昔の習慣に従って教えられてきた者たちが新しい希望を持つようになったのなら、もはや(ユダヤ人の)安息日を守らないで、主御自身の死により我々の生涯も主によって新しく生きかえた主の日を守って生活すべきである」。但し、この原文には「主の日」の「日」はなく、むしろ正しくは「主の生涯(ゾオエーLife)」と訳すべきことは衆知のことである。「主の日を守って生活すべきである」の代りに、正しくは「主の御生涯に従って生活すべきである」「もはや(ユダヤ人の)安息日を守らないで」は「もはやユダヤ人のように安息日を(形式的に)守らないで」と訳した方が適正であると思われる。「主の日」の日が入っている写本はただアルメニヤ写本のみで他の多くの写本には「ライフ」＝「生涯」または「生活」という語に訳してある。実はイグナチウスの書簡は加筆されたものや、偽物が多く、純正なものは殆んど現存しないと言われている。イグナチウスの書いたものは教義の証明に用いないとの意見を持っている用心深い学者が沢山いる。だから「主の日」の証明にイグナチウスを引用することは公正ではない。

13. バルナバ書簡(120年頃から150年の間)ユダヤ人の割礼は週の第8日である日曜日に行くべきだ。また第8日は主イエスが墓から甦ったその日である。あなた方の安息日は受入れることはできない。と記されたもの。バルナバ書簡は当時流行の異端グノーシス派の色彩の濃い論争の書でまともなクリスチャンの書ではない。反セム主義のためユダヤの習慣、法式一切を否定したため、ユダヤ人の安息日を拒否し、日曜日を強調したものであろう。また迫害をさける為、週の第1日を礼拝日とした教会の指導者たちも多くあった。SDAとしては聖書を第一とし、教父の書がどんな理由で何と言おうと、我々の信仰の根拠として彼らの書を見るようなことはしない。



## 第 29 章 安息日に関する難解聖句

1. コロサイ2:13-17、「あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。神は、わたしたちを責めて不利におとしめる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。そして、もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。だから、あなたがたは、食物と飲み物につき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されてはならない。これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある」。

今参考迄に聖書のパラフレーズ訳と言われるリビング・バイブルと比べて見よう。「あなたがたは、以前は罪の中で死んでおり、罪深い欲望を断ち切ることもできませんでした。そんなあなたがたに、神様はキリスト様のいのちそのものを、分け与えてくださったのです。それは、すべての罪を赦し、あなたがたに不利な証書——神のおきてに違反したことを記す明細書——を、塗りつぶしてしまわれたからです。この罪の明細書は、キリスト様の十字架に釘づけにされて、無効となったのです。こうして神様は、罪を犯したあなたがたを責めたてる、サタンの力をくじかれました。そして、十字架上でのキリスト様の勝利を、公然と示されたのです。この十字架によって、罪はすべて取り除かれました。そういうわけですから、あなたがたは、食べ物や飲み物のことで、あるいはユダヤ教の祭り、新月の儀式、安息日などを守らない、などという問題で、人からとやかく言われてはなりません。というのは、これらの取り決めは、キリスト様が来られる前にだけ有効であった、一時的な規則にすぎないからです。つまり、本体——キリストご自身——の影でしかなかったのです」。

この聖句の言わんとするところは、①キリストの十字架によって我々の罪が除かれた。②キリストを本体とするユダヤ教の祭り、儀式、安息日、食物、飲み物に関する取りきめはキリストの十字架によって取り去られた。との二つの点である。確かに、キリストの十字架は私たちの罪(罪の明細書)を取り除いてくれた。その時取り除かれた証書とかその規定もろともというのは、聖なる十戒ではないことは明らかである。キリストは決して律法や預言者を廃するために来たので

はないと言われた。そしてキリスト御自身律法を実行された。キリストは罪のために律法に適した正しい歩みをするの出来ない罪人の罪を赦し、それを取り除き、それに力を与えて聖なる行いができるようにして下さるのである。十字架は神の律法の不変性を証明するものである。神の義と愛とを表わすものが主の死である。律法が変えられるものであれば、キリストの十字架は不必要であった。

また一方、キリストの贖いを世の始めから示す、ユダヤ教の諸礼典、祭りや捧げ物に関する規定は十字架の影であって、キリストの死によって成就したので、十字架後は不必要となった。その中に大安息日(週毎の安息日でなく、ユダヤの祭りの日に起こる安息日)が含まれていて、それらの安息日はもちろん十字架後は守る必要はなくなった。これは決して十戒の安息日、第4条の天地創造の記念日である安息日ではない。これらを混同しないで正しく理解すれば、パウロの語っている意味がはっきりわかる。ペテロはパウロの手紙について次のように警告している。「その手紙の中には、ところどころ、わかりにくい箇所もあって、無学で心の定まらない者たちは、ほかの聖書についてもしているように、無理な解釈をほどこして、自分の滅亡を招いている」(ペテロの第二の手紙3:16)。無理な解釈をしたり、自分の先入観を聖句の中に吹き込んではいならない。

2. ローマ書13:8-10、「互いに愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局、『自分を愛するようにあなたの隣りを愛せよ』というこの言葉に帰する。愛は隣りに害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである」。愛は律法を完成するから、愛さえあれば律法は不要だ、安息日を守らなくても愛さえあればそれでよいという論者によく出あう。

果して律法と愛とは対立するものだろうか。一方があれば他方はいらぬというものなのか。主御自身のみ言に耳を傾けて見よう。「イエスは言われた。『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』、これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣りを愛せよ』、これら二つのいましめに、律法全体と預言者が、かかっている」(マタイ22:37-40)。

イエスの言葉は、心から神を愛する者は、決して唯一の真の神以外の者を神

とせず、偶像礼拝をせず、神のみ名をみだりに語らず、神の命に反して安息日を俗用して汚すようなことをしない。また隣人を心から愛する者は、決して両親に不孝なことをせず、隣人を殺さず、もちろん憎んだり、傷つけたりせず、姦淫せず、盗まず、偽りを言わず、また貪りの心を持たない。愛は律法を全うするとは、愛のある人は、律法を守り、律法を生活に活かしていくことを表わす。律法の精神は愛であるから、愛と律法は完全に調和する。愛と律法は決して別個に存在し得ないものであることがわかる。

愛さえあれば律法は不要だという論法がどんなに不合理であるかを考えて見よう。神を愛する者がどうして真の神以外の神を拝むだろうか。また神社、仏閣に詣でるだろうか。神のみ名を不敬虔に称えながら神を愛していると言えるだろうか。また同様に、隣人を愛すると言いながら、第5条から第10条までの律法を犯しても良いだろうか。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにいるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにいるのと同じである」(ヨハネ15:9—10)。

「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」(ヨハネの第一の手紙2:3—5)。

罪人は神の戒めに背いた生活を送る。罪人は偶像を拝み、または無神思想を抱いて生活する。神の名をのろい、安息日も守らない。親も人も尊ばず、もろもろの悪を行って人を傷つけ、自分の欲に従って放縦な生活をする。しかし、神に立ちかえり、新しい心を与えられた者は、神の戒めを喜び、これに忠実に従って生活する。そしてその生活は神の国まで続き、永遠の聖なる生命を喜ぶのである。神の戒めを無視して正しい生活はできない。神の戒めに従わない者はどうして清い神のみ前に立つことができるだろうか。

古の聖書は語った。「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ、主のあかしは確かであって、無学な者を賢くする、主のさとしは正しくて、心を喜ばせ、主の戒めはまじりなくて、眼を明らかにする。主を恐れる道は清らかで、とこしえに絶えることがなく、主のさばきは真実であって、ことごとく正しい。これらは金よりも、多くの純金よりも慕わしく、また蜜よりも、蜂の巣のしたたりよりも甘い。あ

あなたのしもべは、これらによって戒めをうける。これらを守れば、大いなる報いがある」(詩篇19:7-11)。

3. ローマ書14:4-13、「他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。また、ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである。日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる。神に感謝して食べるからである。食べない者も主のために食べない。そして、神に感謝する。すなわち、わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。なぜなら、キリストは、死者と生者との主となるために、死んで生き返られたからである。それなのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。すなわち、『主が言われる、わたしは生きている。すべてのひざは、わたしに対してかがみ、すべての舌は、神にさんびをささげるであろう』と書いてある。だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。それゆえ、今後わたしたちは、互にさばき合うことをやめよう。むしろ、あなたがたは、妨げとなる物や、つまずきとなる物を兄弟の前に置かないことに、決めるがよい」。

ローマ書14章でパウロは我々は人をさばいてはならないと説いている。しかし、SDAが週の7日目が聖なる正しい安息日だと人々に告げ知らせることは決して他人をさばいているのではない。ただ自分の信仰、福音によって救われた喜びを人々に証しているのにすぎない。SDAは主より与えられた命令に従い、全ての人々に、望みの理由を語らねばならないと思い、それを喜んで言っているのである。

4. マルチン博士のSDA批判の中で言っている2、3の点につき、正しいSDAの立場を弁明したい。マルチン氏はSDAはホワイト夫人の預言の賜物がジョセフ・ベーツ船長の安息日七日目論を肯定是認したから守っていると書いているが、SDA

はその教理を聖書以外の何物にも依存していないことをはっきりしておきたい。聖書のみが我々の信仰の基礎である。

5. 再びローマ14章の問題をとりあげよう。ここでパウロは教会の中にいる「強い」兄弟と「弱い」兄弟のことを語っている。弱い兄弟は野菜のみを食べ、強い兄弟は何でも食べるという。コリント第1書8、9両章と比較すると、結局、潔い食物、汚れた食物のことではなく、偶像に献げた食物に関する事であることがわかる。ギリシャ人の町で偶像にささげた肉を市場で売っているが、その肉を食べてもかまわない。何故なら偶像等はずっと存在しないのだからと思う人はその肉を買って食する。しかし、偶像に献げたものだから汚れていると思う人は肉を食せず、野菜だけを買って食べる。前者は強い者、後者は弱い人とパウロは言っている。彼の要旨は誰でもその事によって他の兄弟をつまずかせてはいけない。皆、他人のことを思って食べたり、食べなかったりすべきであるとすすめている。他人の良心のことを考えて行動せよと言っている。
6. 同様に日の問題をとりあげている。「また、ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信をもっておるべきである。日を重んじる者は、主のために重んじる……」。その当時の状態は、ユダヤ系のクリスチャンまたはその影響を受けた異邦人系クリスチャンがローマの各地、各教会に非常に多かった。それらの人々は、昔からの習慣に従って、ユダヤの祭日や祝日、その儀式礼典を行っていた。キリストの十字架によってこれらのものは廃止されたけれども、律法に熱心で、これらを守っていたユダヤ系クリスチャンが何万人もいた(使21:21-27)。パウロもエルサレムにおいて彼らの誤解をさけるため、彼らの習慣に従うようにすすめられた。この日とはユダヤ人の祭のことで、それは重要な日だと考える人もあれば、普通の日と全く同じだと思う人もあった。パウロはそれらの人々は他人を自分の考えでさばかず、おのおの自分の良心の命ずるままに行い、他人をさばくな、またつまずかせるなどと言っている。これは第7日目安息日と主の日と言われる日曜日の問題ではない。

人々はパウロがこれらユダヤの儀式祭典が、キリストの十字架後無効になったと言っているのだから、彼をひどく憎んだ。パウロのやっている行動をうの目たかの目でしらべ批判したが、彼らはパウロが第7日目安息日を犯していると責めたことは全くない。もしパウロが安息日を守らなくてもよいとか、正しい安息日は日曜日だとか一回でも言ったとしたら、どんなにひどい迫害と攻撃、非難を受けたであろうか。パウロ自身の言葉「わたしは今日に至るまで神の加護を受け、このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者たちやモー

セが、今後起るべきだと語ったことを、そのまま述べてきました」(使26:22) のように、彼は預言者やモーセに忠実であったと告白している。パウロは決して日曜日を安息日として守ったことはなく、そのような事を語ってもいないのである。



## 第30章 サムエル・バキオキ博士論文

1. 現在SDAの最高学府, 米国ミシガン州ベリエン、スプリングスにあるアンドリウス大学宗教学部助教授であるサムエル・バキオキ博士は、ローマ市にあるローマ・カトリックの名門グレコリウス神学校で新教徒、またSDAとして初めて勉学を許され、1977年、大学院の博士課程を終え、「土曜日から日曜日へ」という論文を提出、学位審査会の審査を経て、無事受領され、優秀な論文としてパウロ6世から金メダルを賦与され名誉ある神学博士号を与えられた稀に見る博学の士である。

私は370余頁に及ぶ氏の英文の論文を拝読したが、その徹底した研究に心を打たれ、またその論文の内容に深く同感するに至った。第1章の緒論に次いで、第2章においてキリストと主の日について論じ、第3章では復活、顕現と日曜日の遵守の関係を検討し、主の晩餐や過越節と主の日の関係を取りあげ、第4章では日曜日の起源と関係ありと言われるいくつかの聖句( I コリント16:1-3、使20:7-12、黙1:10)についての研究発表を行っている。第5章では日曜日はエルサレム教会から始まったかについて論じ、新約聖書時代のエルサレム教会と紀元70年以後のエルサレム教会に分けて日曜日起源の史源を探っている。そして第5章の終わりまでの結論として、日曜日の起源はキリストや使徒たち、新約聖書やエルサレムのユダヤ教会に見出すことは出きないと結んでいる。

氏の論文の卓越した内容は第6章ローマと日曜日の起源、第7章の教父たちにおける反ユダヤ主義と日曜日の起源にあると信じるが、ローマ教会こそ新約の安息日なりとした日曜日聖日思想と習慣の発生地であると断じて、これを学術的に分析し、合理的に学究した氏の真摯たる学者的な態度に深厚な敬意を表する者である。この部分の要旨を本章に概説して、日曜日の起源がどのような状況のもとに発展したかについての真相を知る助けとしたいと望む者である。氏の書に於いて、第8章で太陽礼拝と日曜日の起源、第9章では日曜日の神学、第10章で過去の追想と未来への展望で全巻が終っている。

2. エルサレムを中心として、ローマ全国に散在していたユダヤ人クリスチャンはユダヤ的な要素を固守し、従って彼らは律法的安息日や割礼などに忠実であった、彼らが日曜日礼拝の起因であったという仮説は全くなりたない。それなら

ば非ユダヤ人、すなわちローマ人やギリシャ人などの異邦人クリスチャンの中心であったローマ教会に日曜日の起源を見出すことはできないだろうか、これが第6章の研究の分野となった。

3. ローマ教会は異邦人信徒が大多数であったことはパウロの書いたローマ書11章及び13章によっても明白である。そして大多数の異邦人信徒とユダヤ人信徒との間には種々の問題があったと思われる。教会外の社会に於いて、ユダヤ人と非ユダヤ人とは反目対立していたことは当時の大きな社会問題であった。ローマに於けるキリストの教会とユダヤ人の会堂の間には東方では見られないアツレキがあった。
4. 小数派であったローマ教会のユダヤ人信徒は異邦人信徒との間で次の様な問題で分裂を起した。律法の重要性(ローマ2:17)、割礼の必要性(ローマ2:25-27)、律法に服従することによって救を得ること(3、4、5章)、祝祭日及び食物(清きもの、汚れたもの)(14、15章)等である異教から回心した非ユダヤ人信徒は教会内において、また教会外における異教徒とユダヤ人と同様多くの問題を起し、ローマは東方よりも早く、ユダヤ人離れをするに至った。この分離の中に、ユダヤ人的安息日からローマ人的日曜日に変更して行く種因が見られるのである。
5. 紀元49年クラウディウス帝は、ローマ史家スエトニウスの記録によれば、「クリストスに扇動されて常に暴動を起すためユダヤ人をローマから追放した」のだが、これは聖書の記事と一致する。「アクラというポント生れのユダヤ人とその妻プリスキラとに出会った。クラウデオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるようにと、命令したため、彼らは近ごろイタリアから出てきたのである」(使18:2)。これらの記録から見ると、その頃のローマ政府はユダヤ人とクリスチャンとを区別視していなかったと思われる。
6. ところがそれから14年後のネロの時代になると、ユダヤ人とクリスチャンとは同じ者ではないことがはっきりとしてきた。歴史家タキトゥスによれば、ネロはローマ市大火の罪を、大衆から憎まれていたクスリチャンに課して、極めて残酷な刑に処したと書いている。以前はユダヤ人と一体と思われて、宗教的自由が許されていたが、今や、こうした法律的恩典は除去された。これは、異邦人クリスチャンが大部分を占め、しかも皆割礼を受けていないため、ユダヤ人の方からクリスチャンからの分離が始まったと思われる。
7. 紀元62年にネロはユダヤ教に改宗した、ユダヤ人びいきのポペア・サピナを妃とした。ローマ市の大火がユダヤ人の業だとの大衆の非難をさけるため、彼は

放火罪をクリスチャンにかぶせた。ユダヤ人地区は全く疑われず、クリスチャンがひどい目にあわされた。クリスチャンが最も苛酷なネロの迫害を受けたのはユダヤ人の影響であることを知り、ローマのクリスチャンはひどくユダヤ人を憎悪するに至った。パレスチナのクリスチャンが殆んどユダヤ系であるのとは対照的に、ローマのクリスチャンは大部分が異邦人クリスチャンであったことは、ユダヤ人離れがここから始まり、安息日を放棄して日曜日を採用したその土壌をローマが提供したことは極めて容易に考えられることである。

8. ネロの死後ユダヤ人たちの暴動がローマ帝国内の各地で頻繁に起ったので、人々はユダヤ人を過激派不穏分子として憎悪するようになった。第1次ユダヤ戦争(66-70)、第2次ユダヤ戦争(132-135)、アレキサンドリア、カエザリア、アンテオケの暴動、メソポタミア、キレナイカ、パレスチナ、エジプト、キプロス等の暴動によって、ユダヤ人は独立国家たらんとする意図に失敗し、都エルサレムは荒廃に帰し、自分たちは捕虜となり単なる宗教的一団として全国に散在する亡国の民となった。これらの暴動、戦争等はローマ人にとって、ユダヤ人は全く手におえない暴徒、不頼の徒として、無視され、敵視されるに至った。キレネ地区のユダヤ人はローマ人、ギリシャ人の生命財産をおびやかす、捕虜の肉を食べ、皮をベルトとし、衣とし、その血を注ぎまた体に塗り、またのこぎりで頭から腹部まで真っ二つに切り離したり、猛獣の餌食とし、また剣闘士に殺害させたりした。このようにして死んだ者が22万人もいたとの事である。これと同じような事がエジプトでもまたキプロス島でもあったとユウセピウスは書いている。クリスチャンもユダヤ人から憎まれ、ローマ人やギリシャ人と同じく殺されたものもあったが、ユダヤ人から見れば、クリスチャンは彼らが分離した背教者(ユダヤ系クリスチャン)、異端者と思われ、またその伝道活動においてユダヤ人を追いこした者としてのねたみやそねみがあった(異邦人を教化した数においてクリスチャンははるかに凌駕した)。ユスティヌスはユダヤ戦争においてバルコケバはクリスチャンがイエス・キリストをののしり、罵倒しなければ、彼らを最も残酷な目にあわせて、苦しめろと命令したと報告している。

ユダヤ人の反ローマ活動に比例して、ローマ側の憎悪と残虐さとはまた激増した。70年のユダヤ戦争においてタキトウスは60万のユダヤ人が殺され、デオカシュウスによればバルコケバ戦争(第2次ユダヤ戦争)では58万人のユダヤ人が戦場で倒れ、餓えや病気で死んだ者の数は不明だとしている。

上記のほか政治的、経済的にユダヤ人弾圧がなされた。ベスパシヤヌス(69-79)はサンヒドリン議会と祭司長を廃止し、エルサレムの神殿における礼拝を禁じた。ハドリアヌス(117-138)はユダヤ人のエルサレム地区侵入を死刑をも

って禁止した、またユダヤ人の宗教を禁じ、安息日の遵守を特に厳しく止めさせた。

上記ベスパシヤヌスは始めてユダヤ人に人頭税を課し、ドミチャヌス(81-96)、ハドリアヌスによって一層著しくとりたてられ、始めはエルサレム神殿の諸費用に当てられたが、後にはローマの神ジュピター・カピトリヌスの神殿(エルサレムの神殿の跡にたてた)のために使用され、それがまたユダヤ人及びユダヤ的生活をしていた者(一般のクリスチャンを含む)にも該当された。半シケルの重税は他の税に比べ非常に高額で、またローマ帝国において他に例のないものであった。

この不当な税を免除されるようにクリスチャンはネルバ帝(96-98)に願い出てその認可を受けた、それは同時に自分たちはユダヤ教徒とは一線を画する者であることの宣言であった。当時ローマの文章家たちはさかんに反ユダヤの文書を著したが、ローマ教会の指導者たちが自分たちはユダヤ人とは全く関係がなく、ユダヤ人の人頭税の義務は自分たちに該当しないことの証拠として、ユダヤの安息日の代わりに日曜日礼拝を始めたということは全くありそうなことである。

ローマの文化人たちは反ユダヤ思想に燃え、特にユダヤ戦争時ははげしくユダヤ人を攻撃した。野蛮な迷信としてユダヤ主義を嘲笑し、特に安息日は批判的であった。有名な哲人セネカ(前-紀元65)は「毎週7日に1日を守ることによって、一生の7分の1を無為に過し、危機に際しては安息日に働かない為一命を落すこともざらではない」と記している。

ペテロニュース(66年頃)の言葉として、「ユダヤ人は豚神を崇拜し、陽の皮をナイフで切りとっては、仲間から追い出されない為安息日を守るような特徴をもっている」とまで言ったとされている。ジュベナルは125年頃、ユダヤ人を父とする者の憐れさを風刺して次のように言った、「ユダヤ人の父親は割礼のない人間から遠ざかれと子供を教える。毎週の7日目には生活上の責任を果さず、何もしないで暮せと言う、何と有害な感化であろう」と、歴史家タキトゥスもかなりひどい口調でユダヤ人をこきおろした。「ユダヤ人の先祖はエジプトから追出されたハンセン病やみであったことを憶えて豚を食べない。ハンセン病は豚に流行していたからだ。安息日に何もしないのはエジプトを出た時の記念なのだ。彼らの習慣はどれもこれも曲ったもので全くうんざりする。ユダヤ人は特に欲が深い」と言った。反ユダヤ文学の源泉はローマであり、ローマはユダヤ攻撃の本拠であった。特に安息日に対する非難攻撃はひどかった。皇太子タイタスが小ヘロデ・アグリッパの娘ベレニケとの結婚をあきらめたのも、ローマにおける反ユ

ダヤ人感情のためであった。ベレニケはローマより追放された。

このような極端な反ユダヤ的感情に対して、ローマ教会はユダヤ人に対する毅然とした態度をローマ政府に表示するため、どんな事をやったであろうか。

紀元2世紀に於けるキリスト教文書の傾向はローマ帝国に歩調を合わせ、和解を望むと共に、ユダヤ人に対してははっきりとした対立を表示したものであった。皇帝に対するキリスト教弁証論の効果はさほど顕著ではなかったが、ハドリアヌス(117-138)やアントニウス・ピウス(138-161)等の皇帝はユダヤ人には厳しく、クリスチャンには同情的態度をとった。同時にクリスチャンの反ユダヤ主義文書の類は激増した。「ペテロの説教」、「バルナバ書翰」、「トリフォンとの対話」、「ペテロ福音書」、テルトリアヌスの「ユダヤ人反対論」、オリゲネスの「クルソスの反論」等がその一部である。ユダヤ人問題が最も激烈に論じられたのは、2世紀の30年代、すなわちハドリアヌスの時であった。

その頃①ローマとユダヤ人との間は非常に険悪になっていた。ユダヤ人敵視と弾圧は日常の事であった。②教会と会堂はひどく対立した。クリスチャンは会堂からしめ出され、官憲にわたされ、またユダヤ人から迫害された。③クリスチャンは国家の独立運動や政治的暴動を起こさないでローマ政府から保護を受けた。④ユダヤ系クリスチャンは教会内で問題を起した、モーセの諸規定を強調したりして内部的論争の起因となった。

以上の様な情況下、ローマの教会は今迄のような消極的な方法ではなく、断固たる反ユダヤ主義を表示するユダヤ人の慣習にとってかわる新改革の実施を行う時が来たと感じた。これによってローマ政府は明確に教会はユダヤ主義とは完全に分離したと感ずるような事、すなわち日曜日礼拝の採用こそその重大事であった。



## 第31章 東方と西方教会

1. 新奇な日曜日礼拝の採用は真の安息日を軽視及び放棄する。ローマでは日曜日聖日論を公式に採用する前に、安息日を軽視し、排除し始めた。
2. 歴史的事実として、東方教会(東ローマ地区における教会)において早くから土、日両日を守っていたことは周知の事である。これは従来の安息日を保持しながら、新しい日曜日を承諾していたという妥協的態度の表われに他ならない。安息日を放棄しなかったことは、日曜日遵守をその代わりに守り出す急先鋒となり得なかった所以である。
3. ローマ教会は東方教会と全く異なった状態にあった。単に日曜日礼拝を採用したばかりでなく、強力に信者たちを安息日遵守から離脱させた。ローマで教え又著書によって強く日曜日を宣伝したのは殉教者ユスティヌス(100-165年頃)であった。小アジアではこれより早くイグナチウス(110年頃)、アレキサンドリアのバルナバ(135年頃)が安息日を非難していた。しかし本格的にユダヤ的安息日を口ぎたなくのしり、クリスチャンの日として組織的に日曜日を高揚しているのはユスティヌスである。安息日はもともとモーセを通して与えられた一時的の規定にすぎず、神の罰を受くべきユダヤ人のしるしであった。神もユダヤ人の安息日を永久的に遵守されるべきものと意図しなかったと述べている。異端者マルキオン(144年頃)はローマに住み、極端な反ユダヤ、反安息日運動を行って大きな影響を人々に与えた。ユスティヌスはローマの住民はマルキオンの言葉を真理として丸のみにしたと書いている。エピファニクスはマルキオンが土曜日を断食の日とするように命じたと言っている。ユダヤ人は安息日を喜びの日とし、決して断食はしなかった。ラビたちの意見はいろいろの面に対立したが、安息日の食事は豊かで美味のものであるべき点では一致していた。この安息日を断食の日とすることは、安息日冒瀆、安息日軽視、安息日を普通の日と同一視する第一歩にほかならなかった。またユダヤ人の神とユダヤ人の全ての風習に対する憎悪を表わすものであった。有名なアウグスティヌスは「長老たちの伝統的教えは安息日に断食を禁じ、これを楽ししいこいの日とすることにあった」と言っているほどで、安息日に断食することは忌むべき行事とされていたが、この伝統を破って東方教会が全面的に、また西方の一部の教会、特にアンブロシウス(397年頃)のミラノの教会等が喜びの日、食事を楽しむ日の安息日を断食の日、



悩みの日に変えた。これは安息日を格下げして、日曜日を聖日にしたローマ教会の影響によるものである。

ユスティヌスとマルキオンは思想的には大きく相違していたが、反ユダヤ主義、反安息日主義では一致していた。ユスティヌスは安息日は悪辣なユダヤ主義の商標であるとし、マルキオンは安息日を断食の日、悲しみの日、悩みの日に変えてしまった。マルキオンはグノステックの二元論のためローマ教会から除名されたが、安息日断食論の方は採用された。この点に関して法王カリスタス(217-222)、ヒポリュタス(170-236)、法王シルベスター(402-417)、法王インノケンティウスI世(401-417)、アウグスティヌス(354-430)、カシャヌス(360-435)等は皆ローマ教会が率先して安息日を断食日とし、他の地区の教会にも同じように行うことを極力勧めたと証言している。しかし教会が追放した背教者マルキオンが主張していた安息日断食論をローマ教会が採用したのは一見不思議に思われるので、安息日を断食日としたのはマルキオン以前、既にローマ教会はそれを実行していたのではないかと考えられるし、また次の事からこの説が正しいと断定される。そもそもキリスト教会において安息日に断食した事の起源はイースターの毎年の聖安息日の延長として断食した事にあった。テルトリアヌスとアウグスティヌスは羊を捧げる日の安息日は認めたが、ローマ教会や多数の西方教会でやっている毎週の安息日の断食は止めるべきだと言っている。テルトリアヌスは「過越の時の安息日には断食してもよいが、平常の安息日には決して断食すべきではない」と譴責している。

イースターの日曜日を祝う習慣は2世紀の初期にローマ教会で行われていた。ユダヤ人の過越節と違うところのクリスチャンのイースター・サンデーがもうこの早い時期にローマ教会で採用された。これがまた週毎の安息日に断食したことの始まりでもあった。だからローマ教会が先に断食を始め、むしろマルキオンがこれを自分の益のために利用したのが本当である。ヒッポリュトスは3世紀の初め、「今日でさえも、ある者たちは安息日の断食を命じているが、これはキリストが言われた事ではなく、キリストの福音を汚すことである」と言っているのを見てもわかる。この断食を誰が命じたかは記されていないが、命じるのは権威者に違いないからローマ教会だと思われる。ローマの監督カリストス(217-222)の時に四季毎の安息日の断食を命じた文書があるのでこの事をヒッポリュトスが暗に言及したのかも知れない。ヒッポリュトスの態度はローマにおける安息日の断食の習慣を弱めたのではないかと見る者もある。彼はローマ法王ゼフィリヌス(199-217)、カリストゥス I (217-222)、ウルバヌス I (222-230)、ポンティアヌス(230-235)の対立教皇であったが、彼はローマ人でもラテン人でもなく、彼の言語、哲学、神学はギリシャ人を代表するものであった。

法王選挙に敗れ、反教皇派として危険視された。ヒッポリュトスは安息日を尊び、断食を喜ばなかった東方諸教会の態度を代表したものであった。彼と対立して法王に当選したカリストウスは前述の教書をもって安息日断食論を強化した。しかし安息日の断食については全国の教会があまねく実行していたわけではなかった。教皇シリキウス(384-398)さえ、安息日に断食することに反対する司祭について言及している。アウグスティヌスがローマ教会及び幾つかの西方の教会が安息日に断食を行っていると言ったことは既に述べた。

大部分の学者の意見では、この習慣はローマで発生し、そこから西方の教会に伝えられ、東方教会の反対にかかわらず、11世紀まで固守された。ギリシャ人たちの度重なるプロテストにもかかわらず、ローマ側は断乎その態度を変えなかったが、これが1054年の東方と西方両教会の大分離の大きな原因の一つであったと言われている。

さてキリストが死の力の下におかれた時は金曜日から土曜日に引き続いていたので、イースター土曜日と共に金曜日も死の墓に葬られた主をいたみ、かつ神の子キリストを十字架につけたユダヤ人に対する呪いの断食日となった。過越節の安息日の断食が毎週の土曜日安息日の断食にまで進展したのはローマ教会の業であった。もう一度繰返すが、この断食は、キリストの死に対する悲しみと同時にユダヤ人及びその安息日に対する侮蔑を表わしていたことに注目したい。法王シルベスター(314-335)が、「日曜日はクリスチャンにとっては、主の復活を祝う大きな喜びの日である。それに反してあの弟子たちは死んだ主を悲しんで断食をしていた。だから我々はその模範に従って、土曜日に悲しみと断食を行い、日曜日に喜ぶのである。ユダヤ人の習慣から言っても、食物を食べながら儀式を行うことは出来ないことだ」と言ったのは、この心境をはっきり表した言葉である。

やがて土曜日はユダヤの日、主の殺された事を悲しむ日として、聖餐や礼拝を行うべきではないとの考えがローマの指導者の心にわいてきた。聖餐は断食を中止することになるから当然断食日にはできないとの主張が起るわけであるが、あるクリスチャンは断食日を一層厳粛にするからさしつかえないといったが、ローマは聖餐はおろか、礼拝をも禁ずべしとの頑固な態度を保持した。法王インノケンチウス I (402-417)のデケンチウスへの書翰(後に教令集に編入された)は「教会の伝統によれば、金、土の両日は聖餐を絶対に行ってはならない」と強く禁じている。歴史家ソゾメン(440年頃)、ソクラテス(439年頃)の記述もこれを証明している。「世界中の殆どどの教会では毎週の安息日に聖なる秘義を祝っているが、アレキサンドリアとローマのクリスチャンは古い伝統に従

って、もう前からこれをやっていない」(ソクラテス、「教会史」5、22)。古い伝統に従ってという言葉から考えると、第2世紀のユダヤ憎悪、ユダヤ離れのその頃から始まったのではないかと推定される。ソゾメンは「コンスタンチノポリス及びほとんどの地区での安息日と日曜日の両日に集会が持たれているが、ローマとアレキサンドリアではこれを行っていない」(ソゾメン「教会史」7、19)と書いている。

以上の史実から、次のように言うことができる。ローマ教会は①安息日を断食日とした。②安息日に聖餐を禁じた。③安息日に宗教的集会を持つてはならないとした。これらは安息日の無視と同時に、日曜日の高揚につながるものであった。

4. イースター日曜日論争は紀元2世紀にローマ司教ビクター(189-199)と小アジア、エペソ教会監督ポリュクレテスの間で行われた。ローマ側はユダヤの過越節の日後の最初の日曜日に復活祭を祝うべきだと主張し、エペソ側はニサンの月の14日の日を曜日に関係なく守るべきだと言った。小アジア教会は使徒ヨハネ、ピリポからの伝承であるとしてその正当性を主張し、ローマ司教からの破門を少しもおそれなかった。この両者の間に立って仲裁の労をとったのがリオン(イム)の監督、イレナエウス(176頃)であった。

この論争はビクターの時に初めて始まったのではなく、すでにローマの監督シクストウス(116-126)の時に始まっていた。ユダヤ的過越の守り方を棄てて日曜日にイースターを祝ったのはまさにこのシクストウスであった。それは丁度反ユダヤ主義で強剛な政策を実行したハドリアヌス帝(117-138)の時であったから、ローマの監督も皇帝と歩調を合わせて反ユダヤ化改革を断行したと思われる。エルサレムからユダヤ系クリスチャンが追放され、それに代って異邦人グループが住みついたのもこの時であった。イースター論争はこの時に起こったとエピファニクスは言っているし、クプロの監督も135年頃、割礼された監督たちがエルサレムから退出された時に論争が始まり、今でも続いていると証言している。ギリシャ系の監督がエルサレムで新しい日曜日イースターを主張したので、ローマ教会ではないと言う人もあるが、皇帝ハドリアヌスがユダヤ人の祝祭日を禁止したから、エルサレムのギリシャ人監督たちも皇帝の前に非ユダヤ化のしるしとして日曜日にイースター祭を行ったのであろうことはうなずかれる。しかし、エルサレム教会の勢力は日毎に衰微して行くその頃、天下の教会が右へならえをするような大改革がエルサレムから始まったとすることには同意しがたく、イースター、サンデーはまさにローマ教会から始まったとの大部分の学者の意見を信じるべきであると思われる。ある学者は「ローマのイースター」と

称したほどである。ニケヤ会議(325)回状及びコンスタンヌス帝の全国の監督にあてた書状はローマが日曜日イースターの発生地であり、全国の教会はローマの模範に従ったことは明らかである。

5. イースターの日曜日と週毎の日曜日との関係はどうであろうか。テルトリアヌスは「日曜日に断食したり、礼拝のときにひざまずくことは違法である。イースターからペンテコステまでこのようにせず、自由を楽しんでいる」と言ったが、この頃クリスチャンはユダヤ人が安息日にひざまずくように、日曜日にひざまずかず、立って祈った。オリゲネスは「主の復活は年に一度だけでなく、常に週の第8日(日曜日)毎に記憶すべきである」と述べた。ユーセビウスもまた「モーゼに忠実なユダヤ人は年に一回過越の小羊を捧げた。新しい契約にある我々は毎週の日曜日に過越を祝うべきである」と言った。法王インノケンチウスⅠもまた「我々は主の復活の日曜日を祝う、単にイースターだけではなく、毎週の日曜日にこれを行う」と書いている。

土曜日から日曜日に安息日を変えたのはローマ法王権であり、全世界の教会にそれを強制したのもローマ教会であった。キリストでもなく、使徒でもなく、初代教会でもない。日曜日聖日論はローマ教会で発生し、実行された。ローマ教会の権威のしるしである。

## 第32章 反ユダヤ的教父論

1. 第2世紀の上半期における文書としてイグナチウス、バルナバ、ユスティヌスの三教父のものは、キリスト教徒をユダヤ主義から分離させ、またユダヤ人の安息日から日曜日に変らせるために大きな役割を果たした。
2. イグナチウスはトラヤヌス帝(98-117)の時アンテオケの監督であった。アンテオケはパレスチナに近いので、ユダヤ人的影響がかなり強かった。しかし、徐々にユダヤ人ばなれの傾向はあった。マグネシア人への書翰の中で「もし我々が今だにユダヤ人の習慣を固守するならば、我々は神の恵を受けたとは思われない。なぜなら、聖なる預言者はイエス・キリストに従って生活したからである」と書いている。また旧約の預言者たちは「昔風に生活したが、新しい希望をもち、安息日を形式化せず、主の生涯のように(主の日に従ってと訳す者もある)生活した」と書いている。(No Longer Sabbatingは安息日を守らずとも訳せる)、また別のところでは「イエス・キリストについて語り、ユダヤ人の如く生活するのは間違っている。なぜならキリスト教はユダヤ教を信じなかったが、ユダヤ教はキリスト教を信じたからである」と書いている。彼がフィラデルフィアの人々に書いた手紙の中で「ユダヤ教を説く者に耳を傾けるな、割礼を受けた人からキリスト教の話聞く方が、割礼を受けていない人間からユダヤ教の話聞くよりましだ」と勧告している。このようにしばしば、ユダヤ人の風習を棄てるようにとの勧告が出てくるのを見ると、当時の教会内にユダヤ人的な要素が非常に多かったと推定することができる。この様な環境下ですでに安息日からの分離が起っていたとは思われない。しかし、ユダヤ人風に安息日を守ることを非難したり、主の生涯の模範に従って生きるようにと言っているところを見ると、これらが、やがてユダヤ人的礼拝の仕方から違った新しい日の礼拝に変わって行く初めの第一歩であったかも知れない。

しかし、このイグナチウスの時、115年頃に小アジアでもう日曜日が大勢の人々によって、あるいは僅かな人々によってでも守られていたのだろうか。先の手紙の9:1にある「もはやユダヤ人のような安息日の守り方をせず、主の生涯に似た(または主の日に従って)生活をするべきである」の一句は最近かなり注目を集めている言葉である。



学者の公正な検討の結果は、主の生涯、主の生活と訳すことが最も妥当だということになっている。ヌケネス・A・ストランドによれば、「マグネシアやアンテオケで主の日が何を意味していたか、また、イグナチウスが文法的に同族目的語を意図したとしても、これは初代のクリスチャンの事を言っているのではなく、旧約の預言者の事を描いているのだから話しにならない……。イグナチウスは旧約の預言者たちが7日目安息日を守っていたので第1日ではなかったくらいの事は良く知っていたはずである。であるから、これは土曜日、日曜日を比較して論じているのではなく、生活の仕方、すなわち安息日を形式的に守るユダヤ人的生活と、キリストの復活に表示されるクリスチャンの新しい生活とを比べているのである」。まことに正しい論説であると思う。ロバート・A・クラフトは「この内容を安息日と日曜日論争とすることは確かに不条理である。むしろ二つの異なった生き方、恵から離れたユダヤ人的生活と復活の力に満たされたクリスチャン的生活の比較とするのが正しい」と言っている。こうした事から推定すると、当時の小アジアの教会で安息日を全く放棄し、日曜日のみを守っていた等とは全く考えられない。むしろユダヤ人のクリスチャン改宗者が常に教会に入ってきたから、ユダヤ人の習慣、儀式、また安息日に対し、クリスチャンは絶えざるあこがれと尊崇の念をもっていた。そのため東方において日曜日の聖日化は何百年もの長い期間を必要とした。しかし、東方の教会で日曜日と安息日との両日を守ることに對し、安息日を忘却するように努力した東方教会の教父たちは多くあった。一方西方ローマではこの変化がはるかに早い時期に、また短期間のうちに行われた。

3. バルナバ書簡は、130から138年の間に書かれたと大部分の学者は信じている。筆者は多分アレキサンドリア在住の偽バルナバと言われる人間である。アレキサンドリアはクリスチャンとユダヤ人の対立衝突が頻繁に生じたところであった。バルナバ書簡は特に注目に値する理由は次の二点にある。①日曜日聖守について言及している。②安息日から日曜日に移った社会的また神学的背景について語っていることである。

バルナバ書簡を注意深く検討すると、イグナチウスがクリスチャンのユダヤ化を譴責しているのに反し、バルナバはユダヤ主義全体を神から見捨てられた偽りの宗教としている。ユダヤ主義をかばうクリスチャンに対して強力な攻撃と非難とが向けられている。バルナバはユダヤ人は墮落天使に導かれた悪人の群であって偶像礼拝を行って神より棄てられ、預言者たちを殺し、キリストを十字架につけた者たちであると断罪した。またユダヤ人の基本的信仰、すなわち、犠牲制度、契約、約束の地、割礼、レビの律法、安息日、神殿等はユダヤ人に文字通り適用するものでなく、諷諭(ふうゆ)的解釈法によってキリスト及びクリスチャン



にその成就、完成が見られるとした。

バルナバ書翰で注目をひく言葉はユダヤ人の安息日を低評価し、週の第8日を持ち出している点である。神は6日のうちに万物を創造し、7日に休まれた。主にあっては1日は1000年の如しとあるから6日すなわち6000年の後に、この世界を新しくし、7日、すなわち7000年には全ての悪人を裁き、日、月、星を変えて、休まれるのである。そして第8日に新しい世界が始まる。第8日はキリストが復活し、昇天された日なのである。と言うのがバルナバの論説である。第7日目安息日のいこいを現在の経験ではなく終末論的に論じ、万物が変えられるキリスト再臨の時とする。汚れている今の人間は安息日の聖化を体験できない。神は「新月と安息日」を受け入れることはできないと言われたから、現在の安息日は神に喜ばれず、第8日、すなわち、新世界の始まりこそその時である。

教会と会堂との論争が険悪化するにつれ、第8日の言葉は多く使われるようになった。キリスト教は不完全なユダヤ教を完成するものであるとの意味で、ユダヤ人の7日目を凌駕(りょうが)、超越する第8日が用いられた。ヒエロニムス(342-420)は第7日から第8日はユダヤ人の律法からキリスト者の福音への移行を示し、7の数を成就して8が実現するのだと言っている。バルナバの論法の中に、日曜日採用の背後に根深い反ユダヤ主義が存在したことをかきまみるのである。また彼の言葉のうちには、少なくともアレキサンドリアにおいては、ユダヤ教とキリスト教、安息日と日曜日遵守が全くはっきりと絶縁していなかったことがわかる。

4. 殉教者ユスティヌスはギリシャ哲学者であり、キリスト教の殉教者となった人物であった。ローマ皇帝アントニウス・ピウス(138-161)に宛、弁証論を書いた。その中で安息日及び日曜日について論じているが、それにより、その頃のローマ市の住民がどんな考えをもっていたかを知ることができる。

異教哲学者としてのユスティヌスの見解は、ユダヤ人の罪故に律法が与えられたので、あまり重要な部分ではなく、聖典はこの一時的のものを除けば、全世界的であり、永久的である。これらモーセの律法がもしユダヤ人の不信仰、頑強な罪深さのために与えられたことを我々が知らなければ、我々もまたそれらを守ったであろうとトリフォンとの対話の中で言っている。モーセの律法はユダヤ人に与えられた刑法だとした。モーセ以前の聖なる人々は安息日も割礼も守っていない。だから、ユダヤ教以後のキリスト教には不必要なものだとの論法である。

「日曜日とよばれる日に、町や村に住んでいる我々は集会に集まり、使徒や

預言者の書を時間の許すかぎり読む。日曜日は神が闇を変え、主要な物質を創造された第1日であり、救い主イエス・キリストが死より甦られた日であるからだ。土曜日の前にユダヤ人はキリストを十字架につけたが、土曜日の後、すなわち日曜日に使徒や弟子たちにあらわれ、我々があなた方にも伝えた事柄を教えられたのである」。これがその頃のローマの状況であった。日曜日、太陽の日と呼んでいる彼の弁証論は、ローマ皇帝には、クリスチャンはユダヤ人と違って反逆者でなく、国に忠実な民と映じたと思われる。同時に、異教徒が太陽を尊ぶように、またそれ以上に、クリスチャンは太陽よりも輝かしいキリストに対する尊崇を献げるものであると言う気持があったのであろう。

## 参考文献 ( 順不同 )

1. Doctrinal Discussions, A Compilation of Articles Originally Appearing in The Ministry, June 1960-July 1961, in Answer to Walter Martin's Book, The Truth About Seventh-day Adventism. SDA Ministerial Asociation 1961 216 pages
2. Samuele Bacchiocchi "From Sabbath to Sunday", The Pontifical Gregorian University Press, Rome, 1977 372 pages
3. Encyclopedia Britanica 米シカゴ大学、英、Oxford大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学、トロント大学、1966 全24巻
4. Walter R. Martin, " The Kingdom of the Cults", 1968, 443 pages, Bethany Fellowship.Inc. Publishers, Minneopolis, Minnesota, U.S.A.
5. エレン・ジー・ホワイト「嵐に備えて」、福音社編集部、184頁、昭和36年発行
6. Paul K. Jewett, " The Lord's Day", William B. Eerdmans Publishing Company, Grand Rapids, Michigan. 1971 174 pages
7. Jerald C. Brauer, " The Westminster Dictionary of Church History", 887 pages, The Westminster Press
8. Seventh-day Adventist "Encyclopedia", 1966 Review and Herald Publishing Association, Washington, D.C. (Commentary Reference Series Vol.10)
9. 教文館「キリスト教大事典」改訂新版1204頁 1963年版
10. J. K. Van Baalen, "The Chaos of Cults", 1938 414 pages, Wm. B. Eerdmans Publishing Company, Grand Rapids, Michigan
11. Carlyle B. Haynes, "From Sabbath to Sunday", Review and Herald

- Publishing Association, Washington, D.C. 1928 128 pages
12. Anthony Hoekema, "The Four Major Cults", The Paternoster Press, Exeter, Devon, England 1963 447 pages
  13. J. Oswald Sanders, "Cults & Isms" 1969, Lakeland, London 167 pages
  14. Wm. Irvine, "Heresies Exposed", 1917, Loizeaux Brothers, Neptune, New Jersey 217 pages
  15. Maurice C. Burrell, J. Stafford Wright, "Some Modern Faiths", 1973 112 pages, Inter-Varsity Press, England
  16. W.H.Branson, "In Defense of the Faith," Christian Home Library. Review and Herald Publishing Association, Takoma Park, Washington, D.C. 1933 389 pages
  17. A.A.Hoekema, "Seventh Day Adventism", 1973 103 pages, Grand Rapids, Mich.
  18. Seventh-day Adventists Answer Questions on Doctrine", Review and Herald Publishing Association, Washington D.C. 1957 720 pages
  19. 三育学院短期大学「セブンスデー、アドベンチスト、教理の研究」、1957 607頁(18)の訳本

# あとがき

1979年(昭和54年)1月元旦から書き始めた「日曜日か、土曜日か」の原稿が、脱稿したのは5月の半ばであった。浅学非才を顧みず、使命の重大さを痛感し、関係資料を比較分析して、とにもかくにも、一応一冊にまとめた。同信の友や、同胞諸賢の参考文献として御批判をいただければ幸いと信じる次第である。

本書の作成に当り、主として引用使用させていただいた文献のリストは読者諸賢の参考のために紹介したが、本書の性質上、原著者各位の御了解を得ることは困難な点もあるので、その要旨の引用に対し、なるべくそのまま原著者の意向を訳出したが、それに対し、関係各位に感謝の意を表したい。また SDA 関係の書に関しては、本書は私個人の意志を表明したり、個人の名望や利益の為でなく、もっぱら、主の御栄えの為に作成したので、そのため引用させていただいた事に対し、必ず賛同を頂けるものとして、原著者各位に本紙上を通して、感謝の意を表するものである。

本論は32章で終わっているが、最終的結論はあえて書かなかった。その結論はそれまでの資料に基づいて、読者各位が祈りと共に神の前で、自ら結成してほしいと私は願っているからにほかならない。

全ての人々の運命を決定するこの大問題を冷静に検討し、神よりの静かなみ声をきいていただきたい。聖書は神がエリヤに語った時のことを次のように記している。「その時主は通り過ぎられ、主の前に大きな強い風が吹き、山を裂き、岩を砕いた。しかし主は風の中におられなかった。風後に地震があったが、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞こえた」(列王紀上 19:11 - 12)、今こそ人類は神の静かな声をきき、真理を悟るべき時である。

1979年(昭和54年)5月13日

青山の自宅で

伊藤繁美